－文 芸－

草の丘

第 26 号

2024 年 6 月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第二六号（二〇二四年 六月）

目次　草の丘 第二六号

《詩》
うそをつく人　中川とら……一
命～ミッション その３　安達真魚……三
《短編小説》
残　骸　畑中康郎……一二
最後の間借り人　中川とら……二七
《エッセイ》
トワイライト世代 その４　安達真魚……三五
エッセイ集　畑中康郎……四八
《連載小説》
この前・この間 ―第４回―　いんば華子……九二
伊能忠敬の化身 ―第３回 完結編―　香取 淳……一〇五

うそをつく人

中川とら

かわいくて　笑ってしまう
バカくさい　うそはいい
悲しみに沈む心を
なぐさめてくれるから
自暴自棄にあばれる心に
冷水をかけてくれたりもする

済んだ目で
明らかにありえないうそを言う人が
時に寂しい心を

和ませてくれるのはうれしい
自分がどうにもならない時は
ケセラセラとうたって踊ろうと
手を取ってくれた人も懐かしい

先人も言ったでしょう
うそも「方便」と
辛いことばかりの日々だったと振り返るより
いい人生だったとニッコリ天を仰げば
花の雨が降ってくるやも

うそからでたまこと

暗い出来事と明るい未来
何があっても
心一つで　うまく生きたいものだ

ところで
「うそ」という鳥がいるのを知ってる？
緋色の喉毛をして
口笛を吹くように鳴くのよ！

これは本当の話です

◇

命 ～ミッション　その３

安達　真魚

安房神社(2024.5)

ヒミコ

戦い破れて　悲しみにくれても
私は嘆くことはない

実の入り少なく　飢えに苦しんでも
私は嘆くことはない

神の告知　アマテラス
伝えたい言葉がある
伝えたい思いがある

人を惑わし　勇気づける
精魂苦闘　　心火を燃やす

solar eclipse　solar eclipse　祈り続ける

災い多くて　打ちのめされても
私は嘆くことはない

傷つき疲れて　哀れな姿でも
私は嘆くことはない

神の告知　アマテラス

伝えたい言葉がある
伝えたい思いがある

人を惑わし　勇気づける
精魂込めて　心火を燃やす

solar eclipse　solar eclipse　祈り続ける
solar eclipse　solar eclipse　祈り続ける

雀

巣箱の雀　どこの誰
なすがままに　あずけた命
目に浮かぶ母の姿　遠い記憶
運命の受け入れ　悲しみの中に

どんな運命が　自分をここまで
弄（もてあそ）ぶのか　地の果てまで

君の愛にたより　君の愛に答えて
君の愛だけを支えに生きている

とめどない涙　いつ尽き果てる

波頭の中に　見えてくる
君のために　委ねた未来
焼野原古巣の村　胸に沁みる
定めた覚悟　風に消えゆく

どんな悪戯が　自分をここまで
誑（たぶら）かすのか　霧の彼方

君の愛にたより　君の愛に答えて
君の愛だけを支えに生きている

とめどない涙　いつ尽き果てる

戦乱

広がる大地　水辺の豊かさ
樹は茂り　鳥は歌う
息づく命　平穏な日々

闇の中の戦い　襲い掛かる兵火
燃えさかる炎のなかに　滅びゆく村里
Forever Friends. 愛おしい人　悲しまないで

土地は荒れ果て　家は燃え尽き　崩れ落ちた
ここには　もう留まれない
人はだれもこの土地を捨て　逃げ去った
もう二度と戻ることはない

遠い昔から続く営み
平和な時間が流れていた
今日の命　明日に繋げるために

何も知らずに　命を落とした
憎み苦しみ　理不尽な悲しみとともに
Forever Friends.　愛おしい人　やすらかに眠れ

墓場と化した　訪れる人　だれもいない
ここでは　もう生きれない
人はだれもこの土地を捨て　逃げ去った
もう二度と戻ることはない

さよなら　眠りから覚めるまで
さよなら　新しい時代まで
さよなら　いつか蘇るまで

プルシャン・ブルー

凄く綺麗　君が好きだ

得意げに　馬鹿みたいに
愛を確かめる　愛を捧げる

少しは妬ましくて　少しは憎らしくて
得意げに　馬鹿みたいに
君に打ち明けた

胸はドキドキ　眼差し閉じた
エモい感情　頭を巡る

悪魔の言葉　Devil's Blue
巧妙な罠　Clever Tricks

Blue Blue Blue Prussian Blue

狂い始めた　しびれた体
浅はかに　迷いもなくて
夢は朽ち果てる　夢は遠のく

ほんとは疎ましくて　ほんとは許せなくて
偉そうに　上目目線で
君を遠ざけた

切ない思い　晴れない思い
隔たる思い　焦がれる身体（からだ）

悪魔の言葉　Devil's Blue
巧妙な罠　Clever Tricks
Blue Blue Blue Prussian Blue

青く横たわる肢体
手を伸ばしても　届かない

悪魔の言葉　Devil's Blue
巧妙な罠　Clever Tricks
Blue Blue Blue Prussian Blue

少年の夢

一瞬で消えた まどろみのなか
戸惑い　迷い　戻れない　体
心の疼き　さざ波が立つ
ためらい　惑い　動かない　手足

自由な花園　歩き回っている
まだ見たことのない　自分の未来
Illusion　幻想の世界　Illusion ・・・ fantasy

人が群れている どこかで見た顔
汚い こわい　届かない　目線
何か話してる　聞き取れない
拙い　うとい　浮かばない　知能

連なる山々　怯え立ちすくむ
とてつもない力　ぼくを動かす
Illusion　錯覚の世界　Illusion ・・・ fantasy

輝く内海　ここはどこなのか
つかみどころのない　固定観念
Illusion　錯覚の世界　Illusion ・・・ fantasy

古都感傷

君と過ごした　ひとときは
古い街並み　あたりは沈んでた
南禅院は　雨に煙って
薄ら寒さが　沁みるこの身に

つらい思い出　二年坂
八坂の塔が　傷跡包んでた
祇園四条は　いつものように
カフェの外は　人が流れる

大切な人　二度と戻らない
憂いに沈む　古都の灯火（ともしび）

蓮池傍（そば）の　天龍寺
大方丈で　二人は横たわり
微笑みばかり　言葉なくして
池の山並み　胸に沁みる

通い続けた　丸太町
熊野神社の　片隅待ち合わせ
平安神宮　心のままに
遊び疲れた　子供のように

愛おしい人　旅立ったまま

切ない想い　古都の灯火（ともしび）

河津桜（2024.02）

残骸

畑中康郎

河原崎五郎はそのとき三八歳だった。人生がどんなものか、その輪郭がおぼろげながら分かり始める年齢だった。しかし彼は何も理解できていなかったし、理解する気もなかった。そのための知性が決定的に欠けていたのだ。

人生で経験する感情のうちで最も重要なものは、他人を心から思いやる優しさと他人の喜びを自分の喜びとして共感できる心であろう。そうした感情を持つと人間としての完成度が高まっていく。しかし、彼はそうではなく惨めさ、悔しさ、恨み、憎しみ、そしてもうひとつは嫉妬、そういった負の感情ばかりが心に巣食っていた。最も大きかったものは、どうせ俺なんかダメなんだ、生きる価値のない男なんだと考える劣等意識だった。

（一）

恐ろしく蒸し暑い、人を怒鳴りつけたくなるような不快な八月のある晩のことだった。いつものとおりＳ駅西口の地下道で、五郎は段ボールを広げ、そのうえに寝転び、人知れず悪態をつきながら飲酒を重ねていた。その地下道、近くに大企業が集中しているため、人通りは激しい。多くの人たちが忙しそうに地下道を通る。帰宅を急ぐ大企業の会社員たちもいた。その多くが彼には幸せそうに見えた。

カップルで歩いている人たちも、中には家族連れで歩いている人たちもいた。例外なく幸せそうなのだ。思うことはいつもの繰り返しだった。人生って一体何だ？　ただし彼の考える人生は難しい哲学的な問いではない。自分は何も悪いことをしていないのに、どうして自分はいまここにいるんだ？　他の人たちとどうして違うのだ？　ただそれだけだった。それで彼はむしゃくしゃしていた。ただ何かに感情をぶつけたくて、先日運送会社の敷地でトラックからガソリンをポリタンクいっぱいに抜き取った。傍らに武器になるガソリンでもあれば心強いとでも考えたのだろう。

その晩もいつも通り、何本かのカップ酒やら缶酎ハイが傍らで空になっていた。その風采は薄汚れた襤褸切れ同然

の下着と真っ黒になった皮膚。風呂にもかなり長い時間入っていないと見え、周囲には異臭を放っていた。
午後九時過ぎのことだった。五郎は烏賊ゲソをつまみにさらに追加の酒を飲もうとしていた。そのときだ。ふたの空いたカップ酒が何かのはずみで倒れた。酒が段ボールの上を流れ、それが地下道を歩いていた三〇代くらいの若い男の靴の先端を濡らした。男が五郎に突然怒鳴った。
「馬鹿野郎！　こんなところで酒なんか飲むな！　きたねえ奴だ。お前みたいな奴は人間の屑だ。邪魔なんだよ。早くここから失せろ！」
男は暴力こそ振るわなかったが、その言葉は五郎にとっては最大の暴力だった。その一つひとつの言葉が彼の胸を抉った。その瞬間、彼の胸に迸った激情が彼自身を翻弄した。もともと小心者であり、世間も僻んでみる傾向があったから、すぐ自分の人生のありとあらゆるものがどうでもよくなり、男に怒りをぶつけたくなった。
しかし男はそれきり足早に姿を消した。ただ五郎には、男の向かった先がどういうわけか駅西口のターミナル広場のような気がした。彼は突然、バケツにポリタンクからガソリンを注ぎ始めた。バケツは数リットル程のガソリンで満たされた。それを右手に持つと、五郎は男が向かったと勝手に思いこんだ西口ターミナルへと足を向けた。
見るとバスが一台、発車寸前で停車している。運転手がアナウンスした。「間もなく発車です」。あの男はこのバスに乗ったに違いない。そう思った彼は躊躇しなかった。途中で拾った新聞紙の切れ端に百円ライターで火を点けた。そしてバスの入り口タラップに上ると、突然バケツのガソリンを車内にぶちまけた。そして次の瞬間には火のついた新聞紙を流れるガソリンの上に落とした。
それは一瞬だった。火は流れたガソリンの上を走り、一気に炎上した。あっという間にバスの車内は火の海になった。何人かはとっさの判断でバスの外に飛び出した。もしも話に興じていたとか、ウトウト居眠りでもしていたら飛び出すことは敵わない。実際、逃げ遅れた人たちがかなりいた。結果、死者六人、重軽傷者二二人という大惨事になったのである。死者の中にはプロ野球のナイトゲームを観戦した帰りの二人の父子連れもいた。
その時、五郎自身のボロの衣服にも一部火が点いたが、反射的に手で叩いて消し、それからは炎上するバスを外でぼんやりと眺めていた。そこには何の感慨もなかった。た

だ炎上する火の勢いを見ていた。あらゆる感情が抜け落ちており、魂の抜け殻状態だった。

すぐに何人かの男たちが五郎を取り囲んだ。そして彼らは恐る恐るだが、協力して身柄確保に動いた。警察官も駆け付け、現行犯逮捕された。五郎は一切抵抗しなかった。

この事件は世間を震撼させた。おそらくこれが、被害者側に何の落ち度もない無差別殺人の先駆けだろう。それまでは加害者と被害者の間に事件の動機となる原因があった。ところがこの事件にはそれがない。強いて言えば、五郎を怒鳴りつけたあの男か。男の行為が五郎の犯罪を起こした動機だったが、その若い男は現場からどこかに姿を消していた。

六年が経過したとき、東京高裁において五郎は心神耗弱を理由に無期懲役の判決を受けた。裁判を受ける際、責任能力が最大の争点になったが、その能力なしとの判断が下されたのだった。しかし五郎が望んだのは死刑だった。それが六年間の裁判中、五郎なりに苦しんだ彼の結論だったのである。せめて自分の命を罪の代償にしたかったのだ。

判決が出た直後のことだ。彼は傍聴席にいる怪我を負った被害者や遺族に対し、突然、土下座した。そして涙ながらにこう叫んだ。

「自分だけが生き残って本当に申し訳ありません」

五郎はしばらくそのままの状態で、法廷の床に頭をつけたままだった。刑務官が傍らに寄り、彼を立たせた。その後、検察も弁護側も上告せず、刑はそのまま確定した。

（二）

その家は集落を少し外れて崖の上に建っていた。周囲は熊笹に覆われ、人の寄り付かない場所だった。しかし小道があった。一家七人の生活のために自然と出来た道だ。それは一軒家から崖下の集落へと続いていた。

家は小屋と言ってよかった。父親が近くの取り壊した建物の廃材の中から使える木材を選んで作ったものだ。作りは八畳の板の間と台所だけだった。トイレは裏手に簡単な囲いを作り、その中に穴を掘った。入浴は十日に一度程度銭湯で済ませ、普段は水を浴びた。そんな粗末な家に両親と男の子ばかり五人、七人で暮らしていた。ひどい貧乏だ

ったが、父親は怠け者のろくでなしだった。
「馬鹿野郎、お前は俺が悪いというんだろ。冗談じゃないよ。悪いのは世間だし政治だよ」
誰に言うともなく、そんなことを怒鳴っては、朝から酒を飲む。母親はとうに諦めていた。何を言ってもこの人は働きに出ない。一〇歳の長男を頭に毎年のように子供を産ませられた。いっそ自分だけ蒸発してしまいたいと思ったが、それはできなかった。それが母親だった。仕方なく母親は仕事に出た。しっかり者の彼女も、間もなく四〇歳であった。
体力があったから、男の中に混じり建設現場で働いた。結構金になったが、やはり家族七人の生活費としてはとても足りなかった。
彼女はどんな仕事だって厭わなかった。自分を含め家族七人を守るためには、体を売ること以外は何でもやった。水商売に近い仕事にも一時勤めたことがある。が、すぐに辞めた。彼女には馴染めなかったのだ。
一番下の男の子は五郎といった。五郎は決してわがままを言わない。お腹が空いても母親を困らせるようなことはなかった。じっと我慢もできた。彼はまだ五歳だったが、母親の一番の理解者だった。
雨の激しく降る、ある朝のことだった。雨が降り、工事が休みになるときも、別の仕事を探しに日雇い募集の現場に母は向かった。そんな母親をじっと見つめていたのは五郎だけだった。他の男の子四人は遊ぶことに夢中で、母親のことなど見ようともしなかった。父親も相変わらず酒浸りで自分の女房を顧みない。
「母ちゃん。がんばってね」
五郎はぼろ傘をさして小屋を出ていく母親を軒先で見送った。母親はしばらく歩いてから足早に戻り、五郎を抱きしめた。
「五郎ちゃん、ごめんね」彼女はそう言って笑ったが、目には涙が光っていた。何故母親が自分に謝ったのか、幼い五郎にはわからなかった。五郎は小屋の隅にいる父親を見た。酒浸りの目は虚ろだった。
母親は毎晩七時には帰ってきた。仕事でクタクタになっていたが、帰宅途中に買ってきたわずかな食材で七人分の粗末な夕食を作った。家族は当たり前のように、ガツガツと食べた。食べ盛りの男の子たちは、しょっちゅう母親に文句を言った。

「母ちゃん、もっと食べたいよ。これじゃ少ないよ」
しかし彼女はどんなに不平を言われても心を鬼にした。無視して返事もしなかった。お金がないのだから仕方がない。でもときどき自分の分を男の子たちに分け与えた。父親は酒を飲んでいた。朝から酒浸りだった。
母親はしばしば思った。こんな男、アルコール中毒でぽっくり死んでしまえばいい。でも死ななかった。そして子供たちが雑魚寝をし始める頃合いになると、決まって彼女の体を求めてきた。こっちの方は相変わらず旺盛なのだ。傍らで子供たちが寝ている、こんな狭いところでも一切頓着しない。拒んでも、この男はしつこく挑んできた。気が狂っていると思った。仕方なく母親は家を出て、裏手の熊笹の中に入って行く。父親はそこで母親を抱くのだ。この男には彼女を抱くことと酒しか楽しみがなかったのである。

その年の九月のことだった。稀にみる大きな台風が五郎たちの住む町一帯を襲った。今でも歴史にその名を残す巨大台風だった。雨も風も強かった。母親は台風が来ることを察知して建設現場で使用する当てのない木材をかき集めた。小屋の周囲に木材を打ち付けて補強したのである。しかしもともと廃材で出来上がった小屋は、そんな補強程度で耐えられるものではなかった。
母親は小屋の入り口付近にいた。心配のあまり一睡もできていない。現実の危険な状態を知ろうともしない父親は無頓着で奥の隅でいぎたなく眠り呆けている。子供たちは父親の傍らにいた。そのときだった。メリメリ、バリバリと凄まじい破壊音がした。強風で小屋が潰れたのである。全体が入り口の方向に倒れた。
「あーっ」母親の叫び声が聞こえた。小屋の下敷きになったのだ。さすがに飲んだくれの父親も気が付き、母親の方に近寄った。子供たちも起きた。雨の勢いは激しく周囲はすでに水浸しになっていた。
「母ちゃん！！」子供たちの絶叫がした。しかし母親の姿は廃材の下にやっと見えただけだった。彼女はすでに反応せず、家族で廃材を取り除いたときには死んでいた。

（三）

こんなどうしようもない父親ではあったが、母親が死ん

だあとに多少の知恵は働いた。民生委員の助言に従い、子供たちの身の振り方を地元の役所に相談したのだ。役所の担当者は、この男には子供たちを養育する能力はないと判断した。

子供たちを手放すことになり、彼らは孤児院に預けられた。もしも養子にもらってくれる篤志家でも出てくればそれが一番いいというのが結論だった。ただこの男にしては珍しく一番下の男の子だけは手元に置きたいと粘った。土下座までしたのである。五郎のどこが良かったのか、わからない。一度だって可愛がる素振りもなかったからだ。

役所は父親が独り立ちするまで生活保護の対象に指定し、五郎だけを手元に引き取ることを認めた。この父親、栄三と言った。親の資格さえない男だったが、五郎と二人だけの生活になってやっと生活態度が改まった。職業安定所に通い始めたのだ。だから自活する能力はもともとあったということだ。

何度か通い、そして仕事を得た。体力はまともであると見なされたのだ。仕事は運送会社での簡単な貨物仕分けだったが、彼の性分に合ったようだ。そして仕事を面白いと感じたのか、真面目に働き出した。栄三は変わった。

街中に出て、小さなアパートを借りることもできた。収入も少しずつ安定し、やがて生活保護も解除になった。すると周囲の目も好意的に変化した。栄三はまだ四〇を少し過ぎたばかりの働き盛りだった。体も表面上は健康に見えた。すると顔つきまでが生き生きとしてきた。五郎と二人の生活はそれなりに充実してきた。

そんな中、父親に新しい奥さんを世話しようと名乗り出た人がいた。五郎が九歳になった頃だ。結局父親は再婚した。彼は四五。新しい奥さんは再婚で一五歳年下だった。名前は奈美恵。外見はまずまずの美人だった。

だが、奈美恵は元来が情緒不安定だった。ちょっとしたことでもヒステリックに怒るのだ。あるいは前の結婚はそれが原因で破綻したのかもしれない。彼女は五郎によく手を挙げた。五郎に何の落ち度もないのに、虫の居所が悪いと五郎に当たった。体には紫色の痣がいくつも出来た。

ヒステリー症状は、その後、男の赤ちゃんの誕生とともにますますエスカレートした。奈美恵の手を煩わせているのはその幼児なのに叱る対象は五郎だった。

「お前が、その陰気な顔のお前がいるだけで、子供が怯えるんだよ。外にお行き」

そんなことを言っては五郎に当たるのである。
幼児が生まれるまでは、栄三がそばにいると多少の遠慮はあった。しかし幼児の誕生以後、次第に栄三の前でも公然と五郎に暴力を振るうようになった。だが栄三は何も言えない。言えなくなったのである。何故か、奈美恵を恐れるようになったからだ。五郎の方もいつも何かにビクビクするようになった。奈美恵が機嫌の悪いときなど、尻尾を垂れ上目使いの表情を見せる臆病な犬のように自分の中に閉じこもるようになった。ますます寡黙な暗い子供になっていった。
生来陰気で卑屈なところがあったから、学校でも友達はできなかった。いつも校庭の隅でひとり遊ぶ子供だった。そして外が暗くなるまで家には帰らなかった。自分の存在が奥さんには邪魔になると子供心に感じていたのだ。
あるとき、午後八時になって外が真っ暗になっても、自宅に五郎の姿はなかった。帰宅した父親がさすがに心配になり五郎を探しに学校に来ると、たったひとり校庭のブランコで遊んでいた。
「どうした。こんなところで何をしている?」父親が聞くと「ボクがいると母ちゃんの機嫌が悪いんだ。だからボクひとりでいるんだ」と応えた。
そのとき父親はやっと父親らしい、それまでの自分を悔いるようなことを言った。
「父ちゃんが悪かった。死んだお前の母ちゃんがやっぱり最高だったよな。ごめんな」
そして泣きながら五郎を抱きしめたのである。そこにはかつての性根の腐った栄三の姿はなかった。だがそう言われても五郎にあの優しかった母親の記憶はすでになかった。

五郎が中学を卒業する直前、父親が脳溢血で急死した。五〇を少し回っただけだったのに相変わらず大酒飲みだったから、体の方が悲鳴を上げたのだ。
それは重い荷物を持上げて運送トラックに積み込もうとしていたときだった。ふいに蹲り倉庫で倒れた。あっという間の出来事だったという。救急車で病院に搬送されたが、そのときはすでに死んでいた。
葬式は寂しいものだった。陰気で友人のできない彼は職場で孤独だったから、見送った人は会社の上司と、身内は五郎と奥さんとその実子だけだった。それぞれ孤児院を巣

立った他の四人の子供たちにも知らせたが、誰も来なかった。

栄三がいなくなると、ますます奈美恵は五郎に辛く当たるようになった。でも五郎は逆らおうとはしなかった。気が弱く人に反発もできないのである。

五郎が間もなく中学を卒業する時期が近付いていた。いつかは出ていくと考えていた五郎だったから、父親の死はいい機会だと思った。

「これからあんたに一生懸命働いてもらって、しっかりお金を入れてもらうよ」と奈美恵は言った。だが、五郎にそんな気はなかった。奈美恵が外出した隙を狙って身の回りの荷物をまとめ家を出た。そして二度と家に戻らなかった。中学卒業まであと二か月という時期だった。学校からは失踪後に卒業証書が家に届けられたが、とうとう五郎が自分の卒業証書を見ることはなかった。

中学校をきちんと卒業したわけではなかったから、学校から就職先を紹介してもらえなかった。それに中学の卒業証書もなかった。

（四）

彼は結局、かつて彼の母親が働いたように建設現場で仕事を探すようになった。折しもその頃は高度成長期。全国で建設ラッシュが続いていた。人手不足だったから、いくらでも仕事は見つかった。五郎は痩せており、しかも体の大きい方ではなかったが、取り敢えず健康だった。

彼はまずあるダム工事現場に雇われた。飯場での生活が続いたが、これがかえって彼には都合がよかった。衣食住が整っていたからだ。真面目に働けば、金も貯まる。特にダム工事となると人里離れた場所である。街から隔離されていたから遊ぶ誘惑からも逃れられた。金に苦労したから彼は、まず金を貯めようと考えた。

だが五郎も若かった。たまには寂しくなることもある。仲間が山を下って繁華街に遊びに行った時は、さすがに気持ちが疼いた。それでも仲間の誘いをいつも断っていた。

あるとき、仲間が五郎を威嚇するように言い放った。

「お前のような守銭奴は仲間ではない。そんなに金貯めてどうするつもりなんや。人付き合いができん奴はこのダムから出て行け」

五郎は小中学校時代、誰にも相手にされず、いつも一人ぼっちだった。友達のいないのは辛い。あんな思いはもうしたくない。この飯場では彼も仲間に入れてもらったから今の仲間を失いたくなかったし、元来が孤独に耐えられない人間であった。

「わかったよ。俺も街に行って一緒に遊ぶよ」

その週末、四人で繁華街に行った。まず酒を飲んだ。まだ一六だったが、仲間の勧めで酒を口にしてみた。次々酒を注がれた。目が回るほどひどく酔ってしまい、飲み屋の二階で動けなくなった。天井が回り、吐き気を催して横になることもできなかった。そして何度も吐いた。

仲間の三人はその晩のうちに飯場に帰った。翌朝財布の中を見ると、一円の金もなかった。自分が率先して支払ったのか、全く記憶がない。用心のためかなりの現金を持ってきたのだが、そのすべてが消えていた。仲間を疑うわけにはいかなかった。

吐瀉物の清掃や、背中をさすってくれたりしたのが朝美という店の従業員だった。まだ若そうだった。彼女とはそれがきっかけで付き合うようになった。

五郎は若い女性と口を利いたこともなかった。陰気で内気だから口の利き方も知らなかった。いつも女の子たちから馬鹿にされていた。ところが朝美は違った。五郎を一人前に扱ってくれたのだ。いままでの女の子に感じないものがあり、愛情に飢えていた彼には朝美が新鮮に映った。自然気持ちが傾いた。

五郎は仲間から離れ、独りで朝美の酒場に通うようになった。そして何回目かの週末、外に連れ出して男女の関係になった。一度そういう関係になると、若い二人は止まることがなかった。五郎は朝美に夢中になった。

朝美の両親は二人の関係に気づき、五郎に嫁としてもらうよう求めた。だがすぐというわけにはいかなかった。二人は若すぎた。それで五郎が十八歳、朝美が二十歳になった時点で入籍させることになった。

五郎がいちいち山から下りて朝美に会いに来ることはできなかったから、ダム現場の仕事を諦め街中にあるビル建設現場に移った。

小さなアパートで同棲を始めると、まだ欲しくなかった子供がすぐにできてしまった。自分たち自身がまだ子供なのだ。赤ん坊を育てる自信などなかった。それが最初の躓きだった。赤ん坊は男の子で、五郎の死んだ父親と同じく

栄三と名付けられた。
子供ができた以上、法律上は婚姻が認められない年齢であったが、役所も認めないわけにいかなかった。入籍したのである。

（五）

栄三はよく夜泣きをした。声を張り上げて泣きわめくのである。生まれつきの我がままで、親の言うことを聞こうとしない強情な子だった。朝美は次第に栄三に手を焼くようになり、よく手を挙げた。叩かれた子供は一層大きな声で癇高く泣いた。朝美には子供を育てる忍耐力がなかったのだ。やがて自分の時間がなくなり、彼女は睡眠不足にもなった。そして次第に情緒不安定と呼ばれる状態になり、自分でも泣きわめいた。そして泣きながら栄三を叩いた。栄三も負けずに大声を張り上げた。
折檻は日常的になり、栄三の体は紫色の痣だらけになった。火のつくような泣き声は狭い近所でよく聞こえた。折檻が日常的だという噂はたちまち広まった。
朝美はひどいキッチンドリンカーにもなった。ストレスを酒で紛らわすのである。五郎が出かけると、朝から一升瓶を取り出してはコップ酒をあおるようになった。意識を失うまでに飲むのである。そんな状態だから、子供の面倒を見る正常な判断ができるとは思えなかった。
このままでは五郎が不在の時、栄三にもしものことが起きるかもしれない。大けがや死んだりしたらどうしよう、五郎は思い悩んだ。二人の身を守るためには、五郎が栄三を引き取り、朝美と別居するしかなかった。それにもうひとつ気になることがあった。彼女が五郎の留守のとき、家に男を頻繁に上げていたという噂だった。噂だから本当に浮気をしているのかわからなかった。しかし結局別れた。愛していたから無性に寂しかったが、子供のためには仕方がなかった。
世間は様々な人間同士の関係で成り立っている。その関係がどのように維持され、あるいは変化するのか、それが言わば運の巡り合わせというものだろう。
自分はどこまで恵まれない運をもって生まれたのか、五郎は疑問に思った。他人がふつうに生活していることが悉く自分にはできない。どうして自分の人生はふつうではないのか。他人はどうして幸せで、どうして自分が不幸なの

か、彼にはわからなかった。

結局自分の兄弟たちが預けられたように、栄三も養護施設に入れた。五郎独りの力では満足に育てることができないと判断したのだ。実際彼は人を指導し、育てる教育を彼自身が学び得ているとはいえなかった。

彼は別のダム現場に戻った。以前のように金を貯めようと考えたのである。しかし仕事から帰ると、どうしようもない寂しさが彼を襲った。朝美と栄三を失った悲しみを紛らわすため、いつも飯場で独り酒を飲むようになった。そしていつも荒れた。寂しくてやりきれなかったのだ。

深酒は毎晩になり、人を寄せ付けなかった。だが、そのくせ人恋しくて寂しいのである。飲みながら彼はよく泣いた。あるとき仲間のひとりが、

「飯場はあんたひとりのものではないんだぜ。毎晩毎晩、大酒食らって泣きわめく。こっちは迷惑なんだ」と注意した。

注意された五郎は、そのとき急に怒りが脳天を突き抜けた。感情が爆発したのだ。

「うるせいや。お前なんかに俺の気持ちがわかるかよ！」

仲間に手が出した。顔面に拳を叩き込んだのである。血が吹き出した。再び手を挙げようとしたとき他の仲間が止めに入った。

それは一方的に五郎が悪かった。が、謝罪しなかった。どうにも素直になれないのだ。そのうちに、仲間から相手にされなくなった。作業現場では仲間との連係プレーなり人間関係が重要なのだが、それが難しくなった。現場監督も五郎に冷たく当たるようになり、五郎も飯場に居づらくなった。自分で自分を追い込んだようなものだった。そして結局は、ダム現場を去るしかなかった。

栄三に会いたくなり、預けてから半年ぶりに養護施設に顔を出した。二歳になっていた栄三は、施設の子供たちと元気よく明るく遊んでいた。

子供たちの世話をしている、五〇がらみの落ち着いた婦人が栄三を連れて出てきた。

五郎は涙を溜めながら、栄三が出てくるのを待った。

「栄三ちゃん、さあお父さんですよ」

婦人は優しい声で、栄三を少し前に押すようにした。

だが、栄三は五郎の顔をろくに見なかった。見ても何の

反応もない。どこかの知らないおじちゃんが来た、といった感じであった。

「あら、栄三ちゃん、恥ずかしいのかしら」

と、婦人は言った。なんだか、今日は機嫌が悪いのかもしれません。彼女は五郎に申し訳なさそうに付け加えた。

それで五郎はまた寂しくなってしまった。

自分は子供にも相手にされないのか。考え方がひねくれて素直でないから、物事をすべて悪い方にとった。急に栄三が憎らしくなった。こんな子供俺の子ではない、と思った。それきり栄三に会おうとしなくなった。

それから五郎は東北地方の現場に移った。そこで一年頑張った。ある大手建設会社の下請けを一手に請け負う建設会社の社員になっていたから、会社の都合によって次は九州に行った。そこが終わると北陸。彼は孤独だったが、真面目に働いた。給料も安定した。その給料の中から、養護施設にいる栄三に将来のなんらかの資金になるように、毎月いくらかのお金を送ってやった。やはり栄三は自分のたったひとりの子供なのである。

五郎はどこに行っても、いつも独りぼっちだった。友人を作ることが出来ない。どう話しかけたらいいかがわからない。失礼なことを言って、怒らせるのではないかといつもビクビクした。第一、人に気を遣うことで自分自身がすぐに傷ついた。独りでいることが無性に寂しいくせに、片方で面倒くさいと思うから友人ができないのだ。

それで仕事ではなんとか自分をごまかして協力しても、仕事を離れると自然ひとりになった。病気になることもあったが、そんなとき自分を心配してくれる他人の存在が無性に欲しかった。寂しくてどうにもならなかったのだ。

テレビ番組を飯場でよく見た。そこには一家団欒の風景が良くも悪くも映し出された。中には人間関係がうまくいっていない家庭の描写もあった。しかし彼はそんな状態でも自分よりはましだと思った。自分には喧嘩する家族もいないのだ。自分だけがどうして惨めで不幸なんだ？　これがいつも繰り返された疑問になった。

生まれてからこの方、心から幸せをかみしめる瞬間がひとつでもあっただろうか？　それは確かにあった。朝美との間に経験した二年足らずの年月だ。そのときは確かに幸せだった。でもたった二年だ。これが彼の愚痴になった。

その後、五郎は全国各地を転々とした。いろいろな仕事をした。生きていくために、どんな仕事だってやった。でもどこに行っても、ふつうの人間関係を作ることはできなかった。何故かいつも人から敬遠された。何故か嫌がられ邪魔もの扱いをされる。その理由がわからない。自分では気づかない毒が体から発散されているのだろうか？

家庭を持つことも諦めた。だから家族に代わって自分の苦しい思いを聞いてくれるたったひとりでもいいから、友人がほしかった。たまに居酒屋に行くと、そこにはサラリーマン風の何人かがいつも楽しそうに酒を飲んでいる。それを見て彼は悲しくなり、人生を恨んだ。

しかし、彼のいつも疑問に思っていることが、実は多くの人たちに程度の差こそあれ、同じように起きている。人生はいつも幸福とは限らない。そういうものなのだが、そんなことを考えることすら彼には出来なくなっていた。広い視野で世間を見る目も完全に失われていた。

なお一層悪いことに、彼は三五歳を過ぎるころから自暴自棄になっていった。世間を一方的に敵視し始めたのだ。世間は自分だけを不幸にする邪悪な世界と思った。

会社もとっくに辞めていた。そしてついに路上生活者に転落した。手元にはわずかな貯金しかなかった。人間が堕ちていくのは早い。努力を放棄すればいいのだから簡単だった。

彼には生きがいも目標もすでになかった。ただぼんやりと一日を過ごすようになっており、なんとなく一日が始まり、なんとなくその日が終わった。そんなとき、あの事件が起きた。彼の破滅願望が事件を起こさせたのだ。

（六）

刑が確定し、五郎はC刑務所に収監された。

刑務所では懸命に働いた。働いて少しでもいいから社会に罪滅ぼしをしたいと思った。法廷で被害者や遺族に土下座して謝罪したのは心からの衝動だった。彼は完全に過去を反省したのである。そうしてみると、彼は根っからの悪人ではなかった。

手先が器用だったから、刑務所では机や椅子を作った。それを格安の値段で市場に出すのである。大部分が国庫に納められ公金として使われるが、わずかな部分は彼の報酬になった。

勉強も始めていた。幼少時は勉強をする環境ではなかったから、中学教育もまともに受けていない。多少の読み書きはできたが、考えるという能力は育っていなかった。第一文章を味わうということの意味が理解できなかった。

そこでまず童話から読み始めた。これが結構おもしろかった。次いで少年少女文学全集を少しずつ買って読んだ。読書する習慣もできた。すると世間というものが、違った光を帯びてくることを意識できた。過去の自分が何と愚かで、異常であったことに思い当たった。当時の彼には失敗を反省しそれを次に生かすという習慣も、他人を思いやる感情も育っていなかった。

やはり人間には教育が必要不可欠である。彼は人間関係や社会の仕組みを、まるで初めて学ぶ少年のように懸命に学習した。次第に人間がふつうに持つべき感情が彼の中に少しずつ育ってきた。

それから数年が経過した、ある夏の日のことだった。

一人の婦人が五郎を訪ねてきた。これまで彼を訪ねる人は誰もいなかったからとても驚いた。誰だろう？　彼は怪訝に思った。

面会室で彼女は名乗った。それは五郎にとって測り知れない衝撃だった。

「私ね、あなたにガソリンをかけられた被害者なのよ」と言った。

見ると、真夏にもかかわらず彼女は長袖のシャツを着ている。それ以外はまったくふつうの人と変わりなかった。顔に火傷の痕も一切見られない。

彼女は「これを見て」と言いながら、左手の袖をたくし上げた。五郎の目に飛び込んだものは、腕の肉が紫色に引き攣ってケロイド状に固まった醜い傷痕だった。

「これだけじゃないんです。背中も両足も全身の八十パーセントに火傷を負ったんです。何度も皮膚の移植手術を受けたし、敗血症も併発し死の瀬戸際まで行きました。そのまま死んでしまいたいと何度も思いました。でも助かってしまったんです」

五郎は絶望的な感情に襲われた。突然、椅子から立ち上がり床に正座した。涙が迸るように流れた。彼には謝罪以外に何もできない。

「ごめんなさい。ごめんなさい。取り返しのつかないことをしてしまいました」

彼女はこう言った。
「いいんです。今日ここに来たのは、私があなたを恨んでいないということをお伝えしたかったからです」
彼にはその言っている意味がわからなかった。
「どうして、そんなことを言うのです？　俺にはわからないよ。俺は極悪人だよ。あのとき死刑になってやはり償いをすべきだったんだ」
「私だって、一時はあなたを恨んだわ。ふつうの人生ではなくなったんですもの。でも、恨んでも元に戻らないと思ったんです。それよりもあなたがそういう事件を起こすには、きっとあなたなりに理由があると思ったんです。その何かを考えてあげたかった」
五郎にはまったくわからなかった。まさか自分を赦してくれる人がいるとは予想もしなかった。こんなに優しい人が世の中にはいる。それが純粋な驚きだった。
だがそう思い始めると、逆に苦しくなった。自分が鬼畜のように思えたからである。自分はやはり生きるべきではなかった。彼女は続けた。
「生きてくださいね。これからもずっと生きることが、あなたに与えられた使命と思います。私も頑張って生きています」
五郎はかすかに頷いたが、彼女の言っている意味がわからなかった。使命って何だ？　自分が生きること、そんなことにどんな意味があるというのか？　彼は考えれば考えるほどわからなくなった。逆に苦しい思いに捉われた。彼女の言った意味を理解しようと、彼は勉強を続けた。だが、結局、わからなかった。
彼女がC刑務所を訪れて四年が経った。その間五郎はずっと苦しみ続けた。そして、終に彼女との約束を破った。彼は自らに天罰を与えたのだ。それ以上、生きて行くことに耐えられなくなったのである。看守の目が届かないところを見計らって、タオルで首を吊った。過酷な五五年の生涯がとうとう終わりを迎えた。五郎にとって、それが長かったのか、それとも短かったのか、それは彼にしかわからない。

（了）

＊本作品は一九八〇年八月新宿駅西口で実際に起きた事件を参考に創作したものです。冒頭の放火シーンと最終章の自死のシーンは事実を文章にしました。

最後の間借り人

中川　とら

春は、いたるところからやって来る。

冬の冷たい空気が、かすかにゆるんでくると、固まった体中の筋肉が、少しづつほぐれて、伸びやかな気分がひろがる。

柾の垣根や庭木のそれぞれが赤茶色の若芽を出し始め、家の回り全体が、日一日と黄緑色に変化してくる様はうれしい。

思わず大きく深呼吸をしたくなる、歓喜の声を出したくなる。

冷えた布団の中で丸くなり、暖ったまって眠くなるのをじっと待たなければならなかった夜も、今は大の字になり、布団の端から思い切り足を出してみたくなるわ。

ああ、やっぱりわたしは春が好きだ。

その夜、襖の向こうの部屋で、父と母がいつまでも話をしていた。

そのせいで、なかなか寝付けなくなったわたしは、やがて話の内容が気になりだした。

どうも、父が母を説得しているようだ。
母はしぶっている様子。
「まっ、長いことではないから。」父がさとすように言う。
「いい話だとは思えませんけどね。」
「少しの辛抱さ」
「・・・・・何かあってからでは困りますよ。その時は、お父さんが責任持って対処してくださいね。」
「ああ」
「忘れないでくださいよ」
母は何度も念を押す。
「わかった」
堂々巡りをくり返し、やっと話は終わった。
いったい、何が決まったのだろう。　うれしい事ではなさそうだ。
心がさわいで、布団の外に出した足を思わず引っ込め、わたしは丸くなって布団にもぐった。

次の日、ほっかむりの母が、東向きの四畳半を掃除し始めた。
格子が付いた腰高窓、縁側添いのガラス戸を目いっぱい開けると、陽差しの中に埃が舞い上がる。
掃いて、拭いて、時々咳ばらいをしながら、無言で手を動かす母の姿は懸命としか言いようがない。

我が家は戦時中、軍需工場で働く人達のために建てられた、庭付きの公営住宅だった。
なかなかしっかりした造りで、和室が三部屋にお勝手、風呂場はなかったが、玄関、廊下、お手洗い、造り付けの収納など使い勝手がよく、建付けには少々の趣きすらあった。
当時の庶民の住まいとしては、充分過ぎるほど贅沢なものだったかもしれない。
戦後すぐに大きな台風で浸水被害にあったが、昭和三十年代になっても、とり立てて困ることはなかった。
家族は、両親にわたし、兄二人の五人。
皆元気だったが、父の仕事がいつまでも思うようでなく、住まいに反して、生活は大変苦しかった。
それもあって、時々、忘れかけた頃、庭に面した四畳半

に間借り人を入れた。
わずかな賃料でも生活の足しにしたかったのだろう。
母がその部屋を空にして掃除するのは、近いうちに間借り人が来ることを意味している。
しかし、きのうの夜の両親の話声を思い出すと、わたしの心は曇った。いやな予感がする。
（お母さんは心配していた・・・・・・。どんな人が来るんだろう。）
一週間程たった、あいにくの雨の日。
とうとう、父がその人を連れて帰ってきた。
わたしが、お手洗いに行きたくなり廊下に出たその時、玄関に父と立っているその人と鉢合せになった。
痩せて、背が高い。 目が細くつり上がって無表情な人だった。
伴さんだ。
父が出てきた母に紹介するとかすれ声で、「どうも」と言った。
「家内です。足元の悪い中大変でしたね」と母は新しい手ぬぐいを差し出した。
あわてて部屋に戻ったわたしは、襖のかげから目を凝らして様子をうかがう。
父が部屋に案内し、「庭があるし、陽当たりもいいさ」と言った後は、もう何も聞こえない。
伴さんが引っ越してきたのは、それからご五、六日たってからだったろうか。
庭の桃の蕾が膨らみ始めていた頃だったと思う。
兄達が、「どんな人、どんな人」としきりに知りたがるので、伴さんが来る前に両親からいくつかの注意があった。
あいさつをきちんとする。
物珍しそうにジロジロ見ない。
伴さんの持ち物には絶対手をふれない。
気になることがあったら、必ず親に報告する。
伴さんの荷物は、布団と少々の日用雑貨、そして、使い古した七輪だけだった。

ジロジロ見るなと言われても、知らない人が同じ屋根の下で暮らすのだ。　見るとはなしに、自然といろいろな事が分かってくるからおもしろい。

「伴さん　流しが空きましたから、どうぞ使って下さい」
「ああ」
いつもの朝の挨拶だ。
伴さんは朝がゆっくりだったので、私達家族が朝ご飯をすませ、父が出勤する頃起きる。
流しは、母の洗濯が始まるまでの間空くので都合がいい。
コップと歯みがき粉がついた歯ブラシとタオルをうでにかけ、眠い目をして部屋から出てくる伴さんは、きまってちぢみのシャツに腹巻、すててこという出で立ちだった。

間借り人が入ると、縁側添いの雨戸は隣の六畳間の三枚だけで、残りの二枚はご自分で戸袋に入れてください。
というのがきまりになっている。　が、ある日、雨戸係の次兄が五枚全部を戸袋にしまってしまった。

伴さんは、えらいけんまくで、「こんな早くに戸を開けられたら、ゆっくり寝ていられやしない」とまくしたてた。
あわてた兄が、「僕が開けました。スイマセン！」と頭を下げると、大人げないと思ったのか、伴さんは、ブツブツ言いながら部屋に引込んでしまった。
しかし、伴さんは大きな声を出すことはめったになく、普段はいつもしんとしている日常だった。
日曜、父が庭の草むしりをしていると外に出てきて、タバコを吸いながら、なにやら小さい声で話すぐらいだ。
父との関係はよく分からないが、二人はよく話しをする。母はそれを好ましく思わず、きまって縁側に出て、「お父さん、ちょといいですか」と手まねきした。

明るい春の花が咲き終わり、庭中が緑一色になると、しとしと雨が降りつづける季節がめぐってくる。
縁側の端がしょっちゅう濡れるので、伴さんは縁側の片隅においた七輪に傘をさしかけ食事の支度をしている。
軒下の雨樋から流れ出る雨の音は、いつ終わるともなくつづいて、部屋の中までベトベトしめってくるのがいやだ

った。

そんなある日の夕飯時、中学生の長兄が珍しく伴さんの話しを始めた。

「伴さんてさ、朝は必ずバタートーストだよね。七輪で食パン焼いて。すごくうまそう。」

「何でわかるんだ？」父が言うと、母はニヤリと笑った。

「匂ってくるよ　バターの匂い。　マーガリンじゃないよ。ね、お母さん」

「コーヒーを飲むのかな」次兄も話に入ってきた。

「コーヒーの匂いはしない。魚は鮭が好きみたいだね。油がのってるやつ。どこで買うんだろう。」

「伴さんってさ、昼間何してるの。仕事してんのか？　知ってるお父さん。」

「余計なことだ！」　父が吐き捨てるように言ったので、話はそれまでになった。

二人の兄が、母親の顔をチラリと見たが、母は表情を変えずだまっていた。

わたしは、日中幾度か伴さんが白の開襟シャツを着て靴を履き出かける姿を見たことがある。手には、決まって風呂敷包みを持っていた。

ひょうひょうとして、小さな小学生のわたしには目が合っても声をかけてくることはない。

「いってらしゃい」と言ったら、どんな反応が返ってくるんだろうと思いながら、そのうち伴さんにあいさつすることはなくなってしまった。

梅雨が明け、ジリジリと暑い夏がやってくると、どこもかしこも草におおわれる。

桃の木にまだ青い実がつき始め、毛虫がめだってふえた。

「もういいかげんにお願いしますよー！」

悲鳴を上げてるような母の声に背中をおされ、家族総出の庭の草むしりが始まった。

伴さんが他人事のような顔をして縁側にしゃがみこみ、うちわで足下をあおぎながら私達をながめている。

しばらくして、暑さと疲労がピークにになったのか、長

兄が膝をボリボリかきながら、休みをとろうと縁側に近づいて行った。
その時だ、運悪く伴さんが人差し指で鼻の片方を押さえ力いっぱい鼻をかんだ。
鼻水がまるで水鉄砲の勢いで飛び出し、なんと長兄のズボンに張り付いた。
長兄は、瞬時にそばに積み上げてあった草の山からすばやく一つまみ掴み取りゴシゴシとふき取っている。日差しを受けたボウズ頭は汗でギラギラと濡れている。
「悪かったな、あんちゃん」
伴さんはそう言いながらも、たいして申し訳なさそうな顔をしていない。
兄は鼻水をふきとった草の一つかみを、にくにくしげに地面にたたきつけた。
よからぬ気配に父が寄ってきたが、長兄は腕を伸ばし手を広げ、それをさえ切って、父親を桃の木の後ろに連れていった。兄が指差した木の根元にはなんと、中皿いっぱい程のタバコの吸いがらが無造作に捨てられていた。
「伴さんだよ」
父は、だまって目をおとし、首筋に流れる汗を手ぬぐいでぬぐった。
それからというもの、日を追って伴さんの奇行が目立つようになった。
お手洗いにも小さなアルミの吸いがら皿が置かれていたり、雨戸を閉めたままの日が続いたり、縁側にゴミを出しっぱなしにするので、それを猫が荒らしに来たり、などなど。
夏の終わり、おすそ分けした桃の食べかすを縁側に置きっぱなしにして部屋中にアリが上がってきた時は、家族みんなが途方にくれた。

秋風が庭の小枝をすり抜けて、部屋の中に入ってくるのは気持ちいい。
六畳間から父自慢の柿が実をつけ始めたのが見える。
もっと寒くなる頃には、大きくて格別に甘い実が枝をしならせるほど実ると思うと心がワクワクした。

久しぶりに、夕方、父と兄達がガラス戸をめいっぱい開け、腹ばいになって休んでいた。
「お父さん、伴さんて、中国人？　韓国人？」
次兄が、新聞に目をやる父に尋ねた。
「どういう意味だ」
「近所の人がうわさしているよ」
「どこの国の人だろうが、いいだろうよ」
相変わらず、父は黙して語らない。

そもそも、父はそういう人だった。
わたしが成人し、母から聞いた父はどんな人にも平等だったということだ。
終戦後、韓国の知り合いに日本姓を付けて就職を助けたり、軍に勤めていた関係か、食に困っている人に白米を都合したり。
身売りをされそうになっていた婦女を、体をはって救い出したり、武勇伝はきりがない。
そんな日常に、おそらく父自身も助けられた日々があったにちがいない。
「人は清濁、併せ持つ」と父はよく言っていた。
「世間は思うようにいかない事の方が多い。しかし、それが又おもしろいんだ」
そして、「人は一人では生きられないから」というのが持論だった。

母が甘く熟した柿を三つ、新聞紙にくるんで伴さんに差し上げた日、思わぬ事件が明るみになった。
事のてんまつはこうだ。
ある日、伴さんは大切にしていた金物を、うっかり縁側に置き忘れ、二～三日たった。
体裁が整ったものではなかった一握りの金物は、気付いて一夜明けると縁側から消えていた。
ひょっとして、と勘が働いた伴さんは長兄を問いつめた。
やはり思った通り、兄が鉄くず屋さんに持ち込み、お金にしてしまったということだった。
兄に悪気はなく、いらない物だと兄は思ったらしい。

父と母は兄を諭し、いっしょに頭を下げて伴さんに謝罪した。
「まっ、これで終わりにしよう」
弱々しい伴さんの声が、しんと冷えきった四畳半から妙にはっきり聞こえた。

木枯らしが吹き始めた師走。
伴さんは引越して行った。

風のおだやかな日曜日、ほっかぶりの母が四畳半の窓を開けはなって掃除をしている。
ハタキをかけ、掃いて、拭いて、時々咳ばらいしながら無言で手を動かす姿は、いつもの懸命な母だ。

伴さんは、我が家の最後の間借り人になった。

完

トワイライト世代 その４

安達 真魚

夕日（取手市 2023.12）

鉄の王キム・スロ

中国と韓国の連続ＴＶ時代ドラマは、目に留まって面白そうなものがあれば録画して視聴している。ドラマの時代背景やその時代の衣食住、街並み、自然などがビジュアルに再現されるので興味深い。また、それぞれのドラマには、争乱、権力闘争、格闘シーンなどの娯楽要素も多く含まれている。タイトルの「鉄の王キム・スロ」は、２０２３～２０２４年にかけて放送された。１０年前くらい前の作品で、今回は再放送であった。古い時代の物語なので、視聴するのに、とくに問題になることはない。

キム・スロは、金官伽耶国の始祖で、初代首露王である。在位は、４２年～１９９年で、１５８歳で死亡したと伝えられている。王妃は阿踰陀（あゆだ）国の王女の許黄玉（ホ・ファンオク）とされる。ドラマでは、天竺国の大商人の娘となっていた。キム・スロの１５８歳は疑問だが、いずれにしても長生きしたらしい。時代は、

1～2世紀頃で、中国では後漢の洪武帝のころ、日本では、弥生時代の終わりのころだ。1世紀から6世紀中頃にかけ、朝鮮半島中南部の洛東江流域には、韓民族の小国が分立していた。伽耶または伽耶諸国と呼ばれ、もともと三韓の中の弁韓といわれた地域にあたる。金官伽耶国は、これらの小国の一つで、現在の韓国慶尚南道の金海市に位置していた。

金官伽耶国は、建国後4世紀ころまでは、伽耶諸国の盟主の地位にあったが、その後は、高霊（コリョン）の大伽耶が伽耶諸国の中心となった。6世紀（562年）に新羅が伽耶を併呑するまで、伽耶諸国は統合されることはなく存続していた。なお、高霊の大伽耶は、ドラマで重要なキーパースンの一人だったスロの異父弟である伊珍阿豉（イジンアシ）が、建国したといわれている。

魏志倭人伝には朝鮮半島の帯方郡から邪馬台国までの行程が記されているが、経由地のなかに「狗邪（クヤ）韓国」がある。この「狗邪韓国」が金官伽耶国である。また、日本では馴染みのある「任那」という地名は、当時の倭国からすれば、伽耶を代表する金官伽耶国の別名だったという説もある。

ドラマは全32話であるが、物語の大筋を記しておく。

主人公のスロは、北方民族の族長の子であったが、父は戦死し、生まれた直後、実母と生き別れになった。浜辺で拾われたスロは、狗邪国（金官伽耶国の前身）の製鉄所の鍛冶長の子として育てられる。成長して鍛冶職人の技術を身につけたスロは、あるとき、祭司長から王になると信託を受ける。その後、幾多の試練に見舞われながら、狗奴国を含む9個の村と周辺の3の小国を束ねて伽耶の国王に即位した。ドラマでは、斯盧（サロ）国（新羅の前身）との関わり合いが、物語の構成上の重要な要素として描かれている。

ドラマのタイトルにもあるように、スロは鉄の王であり、製鉄と鍛冶の技術に長けていた。鉄鋌（てってい）と呼ばれる武具や農具を作る素材が、映像には何度も登場している。当時、すでに鉄の道具を作ることがいかに重要で、国力の象徴であったことがわかる。周辺の各地

でも鉄製品の製造が行われていた。ドラマのなかの製鉄現場は、現在の製鉄所の高炉のような作りになっているのには驚いた。

鉄は当時も貴重なものであり、周辺の諸国も金官伽耶国の鉄とその製鉄技術を欲しがっていた。スロは即位後、帯方郡の代表と倭寇（ドラマではそのように呼んでいる）の頭領を集め、ひとつの提案を行った。金官伽耶国に対する敵対行為を止める代わりに、それぞれに商館を貸与して交易を促進するとともに、製鉄技術を教え広めていくという内容だ。度量の大きな王だったことが想像される。このころに、帯方郡、伽耶、倭を結ぶ海のネットワークが構築され、鉄を中心とした交易が行なわれていた。魏志倭人伝の行程もこの流通路を踏襲しているのであろう。

伽耶が繁栄したのは、日本でいえば、弥生時代終わりのころから古墳時代にかけての年代である。この時代に、中国、朝鮮、日本の間で頻繁に交流していたことに驚かされる。伽耶の歴史については、多くの歴史本などが出版されているが、一通り読んだだけでは、その歴史の流れを理解するは簡単ではないと思った。これからも、それぞれの国の歴史書や古墳の調査、分析から、多くの歴史的な解明が行われていくと思う。

今回、伽耶の国々や当時の日本と朝鮮半島との交流史などに大いに興味を持つようになった。ＴＶ時代ドラマは見ること自体が楽しいことであるが、これからも知的な好奇心を刺激する歴史ドラマが放映されることを期待したい。

命より健康が大事

久しぶりに年寄り仲間が集まれば、まず「お元気ですか」から話しが始まる。それは健康かどうかの気遣いであるが、裏返せば、病気の話しの糸口にもなる。人によっては、自らの病気を自慢げに話す、いわゆる病気自慢をする人も多い。ある同窓会で、各自が近況を順次述べていくときに、幹事が、「今日は、病気の話しと孫自慢

は禁句とします」と宣言した。それはいいことだと、賛同する者が多かった。ネガティブな病気の話しや、孫の自慢話を聞いても、あまり面白くないものだ。皆がそれぞれ何らかの体の不調を抱えていることも多いし、それぞれの事情で孫のいない者もいる。

そうはいっても、高齢者になるほど病気や体の不調に気を配っている。ＴＶでも健康番組が多く、それらの影響もあるだろう。健康番組では、病気や不調のテーマごとに放映されることが多いが、それぞれ予防や克服するための食事や運動が提示されることが多い。それらを逐一実践しようとすると、１日が何時間あっても足りなくなるくらいだ。

あるとき、「『命より健康が大事』という人がいる」と聞かされたときがあった。それほど「健康」そのものを大事にする人がいることに共感を覚えたが、表現のニュアンスの面白さにも感心した。いくら健康に気を配っても、人間の生死は運命であり、ダメなときはダメで覚悟を決めなければならない。ただ、生きている間は、へばりついてでも生きていくことが大事で、それは人間をはじめとする生物としての本能であるし、使命（ミッション）でもある。

高齢者が、少しでも健康寿命を延ばすためには、、次の３つを実践することが、自分なりには大切だと考えている。ただ、自分は専門家ではないので、個人的な実践目標だと、理解していただきたい。

○ 運動すること

とにかく体を動かすことが大事らしい。運動の種目は、ＴＶの健康番組で推奨されものでいいし、散歩でもいい。できれば、それらの中に、有酸素運動を組み入れることだ。別な言い方をすれば、運動によって、心拍数を上げる時間があることが大切で、すこし汗ばむくらいがいいようだ。散歩であれば、少しだけ早足、軽いランニング、階段登りなどを組み入れると効果がある。心拍数は上げない方がいいと誤解している人もいるが、運動によって心拍数を上げた状態を持続することがいいらしい。確かに、ストレスや病気などによる心拍数の上昇は好ましくないが、運動するときは適度に心拍数を上げた方が運動

の効果がでるようだ。運動の効果を測るには、最近のスマートウオッチを活用するのもいい。スマートウオッチの活用については、別の機会に言及してみたいと思う。

○食事に気を配る

これも、ＴＶの健康番組では頻繁に放映されるので、効果のありそうなことを実践すればよい。ベジタブルファースト、栄養素のバランス、食べ過ぎない、間食に注意、たんぱく質、脂質を積極的に摂取する、不規則にならない、夕食は早めに終えるなど、気を配らなければならないポイントは多くある。とくに、太らない、やせ過ぎないのが大切だ。なお、最近発行された「糖質疲労」（山田悟著）には、食事の始めにたんぱく質、脂質を摂取すると、血糖値の上昇を抑制できることなど、食事の摂りかたが「科学的根拠（エビデンス）」に基づいて記載されている。注目すべき本だと思う。

○社会性、コミュニケーションを保つ

どんなときでも、だれかとコミュニケーションがとれている状況に身を置くことが重要だ。できれば、日常的に会話ができる相手がいればいいが、仕事でも、ＳＮＳでも、サークル活動でもいいと思う。何かしら自分が社会の中で認識され続けていなければ、生きる張り合いもなくなってしまう。

人間は、生きている間は生きなければならない。生命は貴重なゆえに、死ぬまでは健康でありたい。人生の目標が健康ではなく、生きるために健康が必要だと改めて考えさせられた。

行政サービスの民営化

２０２３年１２月、総務省は２０２４年秋に手紙とはがきの値上げを行う方針を示した。実施されれば消費税率の引き上げを除き３０年ぶりの値上げとなる。ただ、３０年ぶりといっているのは、手紙についてだけで、はがきは、２０１７年に、消費税に関係なく値上げしている。どちらにしても、郵便料金の値上げは、郵政民営化（２００７年１０月）以降も、頻繁に行われてきたと感

じる人は多い。個人的には最近手紙などの郵便物を出すことも少なくなっているので、それほど影響はないと思っている。それでも、些細なことだが、手紙やはがきのために買い置きした切手の額面が値上げの度に端数が合わなくなるのは困ったことだ。

この値上げの背景には、郵便利用の減少が続くなかで、２０２２年度の郵便事業の損益が２１１億円の損失となり、民営化以降、初の赤字になったことがある。しかし、ここで値上げすれば、2、3年後には黒字になるが、その後は再び赤字が拡大していくと試算されている。法律の改正が必要になると思うが、民営化以降の郵政事業のあり方を改めて考え直す時期が近づいているのかもしれない。手紙や切手がなくなる日がくるのだろうか。

昨今は、事業の公営と民営の線引きがあいまいになってきていることが多い。公共事業というのは、行政のサービスとして行うのが原則で、競争原理を重視して何もかも民営化すればいいというものでもない。

事業なかで、鉄道、運輸、道路、電気、ガス、上下水道、放送、通信、教育、金融、医療など公共性の高い業種は多く、これまで民営化された事業は数多くある。また、モバイル通信、プロバイダー、データーセンターなどのインターネット関連、宅配、介護などは多くが民間主導で事業拡大されてきたが、今となっては、それぞれ公共事業といえるものだ。

これらの公共事業は、本来行政が担当すべき不可欠な事業である。すべて行政で行っていくのは現実的ではないので、全部または一部を民間に委託しているといっていい。したがって、最終的には行政が最終的に責任を持つべき事業だ。法律などによって、民間業者を指導、規制などを行ないながら、逆に規制緩和を行う局面もでてくると思う。民営化した事業の運営がうまくいっていないときは、料金、費用、利便性などの面で、歪が発生することが多い。各サービス事業のコストパフォーマンスが明確に低いときは、どこかに問題を内包している。どんなサービスや事業であっても、常に適正に運営していくことが望まれる。

公共サービスは、民間サービス事業と競合する場合が

ある。スポーツ施設、会議室などの各種の貸出、フィットネスサービス、路線バスなどがいい例である。これらは自治体の懐具合や地域特性などを踏まえて、民間事業との良好な競合関係を保った上で、サービスを行っていく必要がある。

ＪＲ東日本は、２０２４年3月のダイヤ改正で、京葉線の快速と通勤快速の運行を朝と夕方以降の時間帯で取りやめることを発表した。これに対して、千葉市や木更津市など千葉県内の２０の市や町は、ＪＲ東日本に対して再検討などを求める要望書を提出した。ダイヤ改正などは、利用者の利便性を一番に考えて行うものだと思うが、大多数の利用者が改悪と考えるダイヤ改正を、自社の一方的な都合で、行なおうとすることに大きな問題がある。事前協議などはなかったのだろうか。公共事業だということをないがしろにしているか、忘れているとしか言いようがない。

公共事業は、独占的なサービスとなることも多い。公共、民間を問わず、どのような事業であっても、低コストで利便性の高いサービスを提供するのが大原則だと思う。

書籍について

読書が趣味という人は多い。一方で、趣味でない人も数多くいる。現在はマルチメディアの時代なので、文字主体の書籍（以下、雑誌を含めて本と記す場合がある）以外にも、人に何か伝える手段は数多くある。ネット上の各種の記事や、ユーチューブ、Line、TikTok、インスタグラムなどのＳＮＳも有力な手段になっており、それらから日常的に情報や知識を得ている人も多い。しかし、読書したり、何か学習して知識を得たりするときに、本という媒体は、伝統的な手段であり続けている。ユーチューブなどの動画は、活字を追わなくてよく、容易に視聴できるのが最大の利点であるが、その動画の基礎となるテキストやレジュメなどの文字媒体がなかったり、すぐに用意できなかったりすることは、容易さとは逆に、

最大の弱点だと思っている。

自分は、書店や図書館に行くことを一つの楽しみだと思っている。それも、書店の方が新刊書が多く並んでいるので、図書館より書店の方に足が向くことが多い。書店に行くこと自体が、趣味になっているのかもしれない。アマゾンでは、膨大な本のなかから検索できるし、読者のレビューを見ることもできるので、こちらの方を利用することも多い。しかし、書店のように書棚に本が並んでいるわけではないので、目的の本がとくに決まっていない場合は、アマゾンで検索する必要はないのだ。書棚に並ぶ本のなかから、自分の興味のある本を探し出し、現物を確認できるのが、書店の利点である。しかし、書店で並べることのできる本は有限である。また、並べ方などは、それぞれの書店によってポリシーがあるので、目につき易い本の傾向は、書店により随分と違いがあるのは感じている。それにしても、書店は大型の方が、気分は高揚する。

図書館を利用して本を調達する最大の理由は、購入費用が不要なことだ。逆に、手元に本を残せないのは最大の欠点だ。図書館には、小説や歴史本などのように、時間が経過して古くなっても、内容的に価値の落ちないものも多くある。自治体またはその周辺の地域の資料や本が充実しているのも図書館の特徴だ。自宅の書棚に本を増やしたくない人にとっては、図書館の本を借りて読むのが、スマートなやり方だ。

現在は、紙の本以外にも、デジタルブック（電子出版）やオーディオブックで調達することも可能だ。デジタルブックは、アマゾンの Kindle をはじめ、すでに普及度が高く、学校関係でもデジタル教科書や副読本が普及しつつある。オーディオブックは、もともと視覚障害者向け用途が中心であったが、一般向けとしても少しずつ普及が進んでいるようだ。

出版市場（紙＋電子）のこの１０年の市場動向の概要は次のとおりである。

（出版科学研究所調べ　単位：億円）

２０１４年　２０２３年

出版全体　　17,208　→　15,963（7.2％減）
紙出版（書籍＋雑誌）
16,064　→　10,612（33.9％減）
電子出版（書籍＋雑誌＋電子コミック）
1,144　→　5,351（367.7％増）

この１０年で、出版全体では、7.2％の減である。紙出版は、33.9％減と大きく減少している一方で、電子出版は、大幅増となっている。これは、電子コミックが急伸しているためだ。上記の数値ではわからないが、２０２３年度では、電子出版のうち、90.3％が電子コミックが占める。文字ものなど電子書籍では、「ライトノベルや写真集は比較的好調」だが「文芸やビジネス書、実用書などは不振」のようだ。

以上のことから、電子コミックを除けば、電子出版は十分浸透している状況だとはいえず、年齢が高くなるほど、電子出版の利用は進んでないと推察できそうだ。

身近な同年代の高齢者に書籍や文章の読み方を訊ねてみても、「私は、ＰＣやスマホで本は読まない」とか「ＰＤＦの文章は、印刷して読む」とか云われてしまう。まだまだ、文芸やビジネス書などをＰＣやスマホで読む高齢者は少数だ。

電子出版の本は、まだまだ扱いにくいかも知れない。自分は、現在、中古で購入する本を除いて、有料で購入する本の３０～４０％くらいは、電子版で読んでいると思うが、やはり読みにくさなどを感じることがある。電子版の本は、提供元や端末（ＰＣやスマホなど）によってアプリ（Ｗｅｂの場合もある）が異なるため、操作性はそれぞれ違う。目次、改頁、拡大・縮小、しおりの貼り方などそれぞれ違うので混乱することもある。同じ提供元でも、本によって検索ができたり、できなかなかったりする。また、電子出版物としての性格上、コピー防止のため、引用して自分の編集している文章に貼り付けることなどはできないのが普通だ。さらに、電子版は、家族内などで回し読みがやり難いことと、中古として出品することはできない。

一方で、電子出版の本は、書棚がいらないし、ＰＣやスマホなどがあれば、重い荷物として持ち運ぶこともな

く、通信手段と購入時またはサブスクのアカウントさえあれば、どこでも閲覧することができる。また、検索機能を使用できれば、そのメリットも大きい。紙の本は今後もなくならないだろうが、電子出版の本は、紙の本を補完する形で、少しずつ普及していくと思う。現在の若者が高齢者になるときは、デジタルについての苦手意識もなくなるし、関連技術も高まっていくので、電子出版の本の普及は確実に高まっていくと思う。

電子図書館サービスについて言及しておく。図書館による電子図書館サービスは、以前より検討され始めており、すでに導入されている自治体も多くある。これからの図書館サービスとして期待される。課題も多いと思うが、本格的に導入されれば、無償または低価格のサービスになると思うので、高齢者にも身近になり、多くの人が利用するようになるだろう。

現在は、書籍が電子化されて保存され、それらを閲覧できるようになった。このことは、歴史的にみれば、近代における数多いイノベーションがなかでも重要なことだと思う。紙が発明されて、紙に文字が記録されて以来の技術革新だ。改めて気にしている人も少ないと思うが、現在は、電子書籍をはじめとするマルチメディアの普及の時代あり、我々の世代は、変遷期に生きているといえる。1～2世代前の人々にとっては、このような電子書籍で読書することはなかったし、逆に、1～2世代後の人々にとっては、当たり前の世界となっているはずだ。

スポーツ志向

子供の頃から体育はそれほど得意ではなかった。学校の課外活動は、家庭の諸事情があったりして、体育系の部活で活動したことはなかった。学業成績でも、保健体育だけはあまり良い点はとれなかったことが多かった。ただ、学校の授業の中で、一番楽しみだったのは、校庭や体育館で行なう体育の時間だという認識は子供の頃からあったことを覚えている。体育の授業が雨で中止に

なり、室内の保健の授業になったりすると、何か損をしたような気持ちになったことも、たびたびあった。

高校では、体育の授業でポピュラーな種目を一通り経験させてもらった。バスケットボールや軟式テニスなど、楽しさが記憶に残っている種目も多かった。一方で、鉄棒や体力勝負の陸上はあまり好きになれなかった。高校最後の体育の授業は、フォークダンスであった。男子校だったので男子ばかりで輪を作って踊ることになるが、何か違和感があり、恥ずかしくもあった。男子校を卒業するにあたって、フォークダンスでも踊れるようになっておいた方がいいというような学校の配慮だったと理解していた。

体を動かすことが嫌いではなかったので、学生時代を通して、体育系の部活を経験できなかったことについては、今でも残念に思っている。自分の周囲にも、体育系の部活経験者は多く、彼らに引け目を感じたことも多かった。

社会人になる前のころから、とくに思いを入れて取り組んだスポーツといえば、ボウリング、スキー、テニス、ゴルフくらいのものである。それぞれ人気の高い種目であり、誰でも取り組みやすい種目ばかりだ。

スキーは、冬季のリゾート地に旅行気分で出かける気分の方が大きいが、滑るときの爽快感は格別なものだった。スキー場までの移動は大変なのであるが、当時は、その大変さを乗り越えてでも、スキーをしたいという気持ちが強かった。スキーには、車で行くときが多かったが、雪によるトラブルや事故に何度か遭遇した。それらの体験がトラウマになり、今でも雪道のドライブはやりたくないと思っている。

スポーツは、参加選手が互いに競い合うことが大切だ。この点でゲーム性を有しており、面白味がある。これは、オリンピック競技でも、一般スポーツ愛好者レベルの競技でも同様である。しかし、競技者間の実力差が大きかったりすると、結果に優劣をつけても、あまり意味がなくなり、ゲーム性がなくなってしまう。ゲーム性を保持することは、一般スポーツ愛好者にとっても重要だ。そ

こで、スポーツ競技によっては、実力差がある場合は、ハンディキャップ戦（ハンデ戦）で行なわれる場合がある。ここでは、このハンデ戦について少し考えてみたい。

一番いい例は、アマチュアのゴルフ競技である。通常、ゴルフクラブの月例競技などでは、パープレイと平均スコアの差などを考慮して、定められた方式により算出されたハンディキャップが与えられ、それを差し引いたスコアで競い合うことになる。したがって、実力下位の者でも、調子が良ければ誰でも優勝する機会がある。トーナメント形式のマッチプレイでハンデをつける場合は、難しいホールの順からハンデ分のホールを選び、それぞれ1打のハンデが与えられる。スコアカードのハンディキャップ欄の数字は、ホールの難しさの順で表記されており、これが利用される。なお、プロの競技やクラブ競技でも上級者のみが参加できる競技では、全員ハンディキャップはなく、これを、スクラッチ競技という。

ゴルフは、ハンデ戦が最も整備されたスポーツの一つであるが、他のスポーツ種目では、必ずしも整備されているとはいえない。ボウリングは、プライベートな大会にしか参加したことがないので、正確なことは全くわからないが、基準スコアとアベレージスコアの差から容易にハンデ計算ができ、ハンデ戦が行なわれているようだ。スキーは、アルペン競技であれば、過去のタイムの履歴を基に、ハンデ戦が行なわれているスキークラブもあるようだ。テニスは、競技自体がトーナメント形式で行なわれることが多いので、ハンデ戦は考えにくい。ただ、プライベートで練習試合などをするときは、レベル差があれば、ハンデ戦を行った方がいい。自分も、上級者と対戦するときは、各ゲームをフィフティーン・ラブやサーティー・ラブから始めるようにしてもらっていた。ただ、テニスはハンデ戦のやりかたについてオーソライズされているものがないように思う。なお、スポーツではないが、囲碁は、置き碁形式の対局があるので、最もハンデ戦を合理的に行なうことができる代表的なゲームだと思う。

入社した会社に、たまたまスポーツ施設の部門があった。スポーツについては、当時も興味があったので、そ

の部門に配属されて、新たなスポーツ種目の開発をする仕事ができないかなと思ったことがあった。開発したスポーツ種目が普及して、会社の売り上げも上がるという夢物語である。オリンピック競技でも、開催ごとに新しい種目が増えていた。スポーツの競技種目は多様化しており、新たに種目が採用されることはトレンドになっていた。しかし、当時、そのような常識から外れるようなことを考える人は社内にいなかったし、その部門に配属されることもなかった。

スポーツは、プレイすることも楽しいし、見ることも楽しいものである。最近では、相撲のＴＶ観戦もするようになった。ロシアのウクライナ侵攻はまだ収束しないが、国どうしで戦うのは、スポーツだけにしてほしいと心から思う。

この数か月、アーチェリーにはまっている。若いときから興味のあったスポーツで、一度やってみたいと思っていた。どこまで続けられるかわからないが、別の機会に、何かお伝えできるものがあればいいなと思っている。

アルペンローゼ（ツツジ科）

エッセイ集

畑中康郎

● 映画・ドラマの感想

一．モーツァルトとサリエリ

音楽界の大天才モーツァルトと宮廷音楽家アントニオ・サリエリを対比することで才能の伸ばし方について、映画「アマデウス」のストーリーを根拠に一つの考察を試みたい。

映画「アマデウス」のタイトルは周知のとおり、モーツァルトのミドルネームを採用している。因みにモーツァルトの名は「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト」である。

モーツァルトとサリエリはまったくの同時代人で一八世紀に生きたのだが、正直に言うと私はこの映画を観るまでサリエリの存在をまったく知らなかった。ところが、当時世間では両人は同程度の才能の持ち主として認識されていたようだ。しかしモーツァルトの音楽が時間の壁を問題なく超え、現代まで残ったのに対しサリエリは消えている。サリエリの音楽は時間に耐えられなかったということだ。それでも最近の戯曲や映画によってサリエリの知名度は上がり再評価の動きが出てきたという。勿論、再評価とはいってもモーツァルトとは比べ物にならない。

サリエリの才能が伸びなかったことの原因は明確だ。映画によると、サリエリはモーツァルトの音楽に嫉妬を感じ、敵視したと表現した。嫉妬の感情が生じた場合、モーツァルトから学ぼうとする姿勢は絶対に生まれない。なぜならサリエリは自分の才能を過大評価しモーツァルトと同程度か自分の方が上と認識していたように思う。傲慢だった。田舎出の貧乏小僧とでも思っていて、その小僧が出色の素晴らしい音楽を生み出していることが悔しかったのである。音楽を愛し、自分の音楽を伸ばしたかったとしたら、それではダメだ。絶対に成長しない。サリエリにはそれがわかっていたのかもしれない。プライドがサリエリの努力を妨げたのだ。目の前にモーツァルトという稀代の天才がいて自分の音楽を伸ばすチャンスだったのにできなかった。人間というのは自分が一番と思いたいものなのだ。

一方のモーツァルト。この人は天才だから他人に音楽を学ぶ必要はない。五線譜に訂正の痕跡がないほど、天から音楽が彼の頭脳にそのまま降ってきた。苦労などないのである。これが天才である彼の運命であり、とやかく言うこともない。ただ、天才の運命は必ずしも幸福とは言えない。世間からは認められ、有頂天になっており、天真爛漫にして殆ど傍若無人に振舞い、世間を気遣う態度は見られなかった。彼は三五歳でこの世を去るのであるが、最晩年は世間から隔絶し、酒に溺れ、借金に苦しめられ、精神も病んで判断能力も失われたように思う。それに対し、サリエリの音楽はモーツァルトにはるかに及ばなかったものの、宮廷音楽家の地位を万全に保ち、結果、裕福な生活を維持し、当時としては長命の七五歳まで生きた。二人のどちらが幸せであったか、論を待たないだろう。幸福論においても二人の人生は典型的であった。

二．米テレビドラマ「COLD CASE」（未解決事件）

先日、アメリカの連続テレビドラマ「COLD CASE」を見た。つまり未解決事件のことだ。いくつかの事件を扱っているが、ここでは一九七六年に発生した事件をテレビ化した。女性刑事のリリー・ラッシュが解決するという体裁を取っている。これはおそらく実際に起きた事件であろうし、未解決事件は他にも多数発生している。何人かの捜査官が関わった事件をリリーが全て解決した形を取ったと思われる。

事件の概要から述べる。ある富豪、その家はウィットニーと呼ばれたが、フィラデルフィアの大変な名士で地元の政財界、警察機構に対しても大きな影響力を持っていた。それがこの事件のポイントだ。

一九七六年に起きたこの事件はその富豪の兄弟が両親に内緒で主催したパーティーの現場で起きた。夜間時、外の暗闇で若い女性が撲殺されたのである。犯人はパーティーに参加した人間に違いなく、きちんと捜査すれば容易に逮捕できたはずだった。真っ先に疑われたのは殺された彼女と深い関係にあった、この家の兄弟である。しかし警察の捜査は頓挫した。圧力がかかったのだ。一九七六年当時、アメリカの地方警察はこの程度のものだった。権力に弱か

ったということだろう。
人間関係の破綻はあらゆるケースで起こる。職場における同僚、上司部下の関係でも起こるし、親子でも兄弟姉妹でも同様だ。この事件では富豪の兄弟に関係の破綻があった。
兄弟の場合は遺産相続に絡んでもつれることがある。あるいは兄が弟よりもすべての点で優れている場合、弟が兄に嫉妬の感情が抱く。それが原因で殺人に発展することもある。しかしこの兄弟の場合、兄の弟に対する支配欲が原因だった。兄は弟よりも何をやっても上回っていた。学業も仕事もすべて兄の方が優れていた。二人とも弁護士になっていたが、繁盛していたのは兄の方で弟は依頼人もなく弁護士事務所にはいつも閑古鳥が鳴いていた。兄は常に弟をバカにしており、弟も兄には何も言えず、兄から言われたことを盲目的に実行するだけだった。
ところがパーティーの晩ではいつもと異なる事態が起きた。兄の恋人が弟と暗闇の中でベンチに座りながら抱き合っていたのである。どうしてそんなことが起きたのか。彼女が兄を嫌ったのか、多分そうだろう。何事も力で支配したがるところは誰に対しても同じだった。そのために一時の気の迷いからか、あるいは別れたかったのかもしれないが、弟になびいてしまった。弟も兄の見ていない暗闇で解放感からか、彼女の求めに応じてキスをした。兄に反抗したい気持ちもあったと思われる。その時、弟は兄が傍にいないと思っていた。それが何としたことか、目撃が可能なごく近くにいたのだ。自分の言うことを聞くしかないバカな弟が自分の彼女とベンチで抱き合っている。兄は激怒した。
そこで怒りの矛先をどちらに向けたか、彼女の方だった。兄は彼女を大木の陰でバットを使い滅多打ちにした。何度も何度も打ち据えた。彼女は夥しい出血の中、息絶えた。傍で見ていた弟は為すすべがなかった。何も出来ず、何もしようともせずに兄の行為をただ黙って見ていた。とにかく兄に対して何も主張できず、この殺人行為に対しても止めに入ることさえもできない弱い男だった。
警察の捜査が入ったとき、証言を求められた弟は知らないとだけ言った。弟以外はその場にいなかったから目撃者なしで処理された。一番の問題は冒頭でも書いたが、兄弟の両親から警察の捜査に圧力がかけられたことだ。その結果、未解決事件となり二七年の歳月が流れてしまった。（事

件の再捜査は二〇〇三年)。

事件の再捜査、そのきっかけは何であったかというと、実はその家のメイドが事件現場を目撃していたのだ。そのメイドが警察に名乗り出たのだった。彼女は年老いてメイドの職を解雇されて初めて証言する勇気を得たのである。人間は自分の保身のために殺人事件の証言さえ闇に葬るものなのだ。

メイドから通報を受けたのは女刑事リリー、彼女は証拠固めから出発しようと考えた。そこで当時の捜査記録を読んだが、肝心なところで記録が抜けていた。そこで関係者に再度聞き込みを粘り強く行った。当然、兄にも聞き込みを行った。兄は言った。「俺が誰だか知っているか。これ以上捜査を続けると後悔することになるぞ」。しかしリリーの口癖は「私は学校も出ていない。ようやくここにいるだけの女。失うものが何もないからどうぞおやりください」。リリーはかまわず捜査に邁進し、ついに兄の逮捕にこぎつけたのである。

自供内容によれば逮捕された兄は弟にバカにされたと思ったのである。怒りは弟に向かわずにその原因を作った彼女に向かったのである。それにしても、この弟は情けない。こんな兄からはすぐ離れるべきだ。お互いにリスペクトがあってこそ、兄弟であっても関係が成り立つ。自立して、当初は自活できないギリギリの生活レベルであっても支配されて毎日を送るよりどれだけましなことか。犯罪に発展する関係の破綻はいろいろあるが、兄弟においては金銭上のトラブル、嫉妬、あるいはその裏返しともなる支配欲がある。

そして未解決事件にしてしまったもうひとつの原因は当然警察にある。警察が権力の圧力に負けてはどうにもならない。もっとも日本の警察も同じだ。ＧＨＱが起こした戦後直ぐのさまざまな殺人事件、例えば下山事件もそうだったし、現在でも警察固有の事情から全くないとは言えない。警察官も職を失う恐怖に勝たねば警察に務める資格はない。その点、リリーという女性は素晴らしかった。ドラマ化した脚本家の考えに私は賛同する。

三、山崎豊子原作のテレビドラマ「白い巨塔」の感想①

現在ＢＳ１１では毎週火曜日午後６時から８時まで２

回分をまとめて放映中であり、2月20日現在10回分が終了した。取り敢えずこれまでの感想を書いてみる。

番組のここまでのメインテーマは浪速大学医学部外科教授選出の裏事情である。浪速大学の外科は現教授の定年退官に伴って後任を誰にするか、その熾烈な駆け引きを映像にしている。教授の椅子を争ったのは、現助教授の財前五郎と石川大学教授の菊川昇の事実上の一騎打ちだった。ふつうなら医局内を十分にまとめ、手術の腕も確かな助教授の財前がそのまま教授就任となるところだったが、現教授の東貞蔵がある理由から財前を嫌悪していたために起こった騒動だった。その理由にはいくつか考えられる。まず財前の東に対する慇懃無礼な態度だろう。東は財前に自分に対するこころからの尊敬を求めたのだが、そんな様子はなく、それどころか財前には東を蔑ろにする態度が垣間見られたこと。その遠因として考えられるのは、外科には手術の際の手腕が求められるのだが、どうやら東は困難な手術の際に求められる技量にわずかに不足があった。財前から見て手術は下手だったのだ。教授執刀の手術に助手として何回か立ち会って十分にわかったことだった。だから財前からして尊敬どころか軽く見る向きがあったことは否めない。それがわからない東ではない。

そのうえ財前にはスタンドプレーに過ぎる傾向があった。外科手術の手腕は国内外に広く認められており、マスコミが取り上げたくなるレベルのものだった。おそらく、東の許可を得ずにマスコミ対応を繰り返したのだろう。これが東のこころのうちに内攻した。

内攻は高じて行き、どうしても次期教授から財前を外したくなった。東はいろいろ工作をするのだが、まず後任の教授を東都大学（東大）の船津教授に推薦してもらうことにした。結果、石川大学（金沢大学）の教授で心臓外科に確かな業績を残す菊川昇を候補に推薦してもらうことができた。喜び勇んだ東はわざわざ自身の多忙のなか金沢まで菊川に会いに行く。そして口説き落とす。ところが、当初菊川は浪速大学医学部教授の椅子に野望はなかった。どちらかと言うと内科の里見助教授と同様に学究肌だった。そうした態度を翻すべく頭を下げてまで候補者になってもらったのだった。菊川は教授選に立候補する以上、負ければ石川大学教授の地位を去らねばならない。そこまで腹をくくって出馬するのだから東の責任は重い。そんなリスクを排除してまで頑張ろうとしたのは菊川が独身だった

ことがある。自分の娘の婿にも丁度いいと東は思った。しかし肝心の二人が二人とも結婚に関心がない。娘の佐枝子は結婚相手を自分で探すと言う。

そこで思うこと。人間関係はほんの些細な行き違いの積み重ねで悪化し増大するものだ。助教授はいわば弟子ではないか。しかも長年、ドラマでは８年ということになっているが、それほどの女房役だった助教授を外すというのはやはりやり過ぎと言える。人間だから些細な行き違いは必ずある。東はエリート街道を走り続けて、自分に意見を述べたり、小さな無礼さえも許せない、つまり人を赦す度量がなかった。プライドが強すぎ、またそれを抑える理性の力もない。小人と言わざるを得ないのである。

教授選は三〇人の医学部内の各科教授の投票によるのだが、財前と菊川のどちらに投票するかの票読みを東は東都大学の船津と自宅まで船津を呼び寄せて行ったことがある。そのとき東は投票の行方を見切れていなかった。そこで船津に言われる。「あなたは甘いお人だ」。これが東のこころに棘のように突き刺さった。なにしろ面と向かって批判されたことのない人間だった。船津が東邸から引き揚げた後、東は荒れる。玄関横に並んでいた鉢植えを次々破壊したのだ。こんなところにも東の小ささが出ている。さっと何事もなかったかのようにやり過ごせばいいではないか。実際甘かったのだから、抵抗することもない。

決選投票では財前一六票、菊川一四票の二票差で財前の辛勝となる。一票でも多い方が勝ちとなる。よって負けた東は教授退官後の就職先として決まっていたところを辞退せざるを得なかった。船津の息が掛かっていたからだ。菊川も石川大学に帰れずにオーストラリアの大学に行くことになった。

東が余計なことをやったために自ら墓穴を掘ったことになる。仮に菊川が勝ったとして医局は財前が仕切っていたから医局員の気持ちは圧倒的に財前に傾いている。そんななか菊川は毎日を針のむしろの上にいなければならない。だから菊川も始めから教授選を辞退すべきだったのだ。逆に選挙に負けて結果はそれで良かったと言えるのではないか。結局、菊川は損な役回りを演じたことになる。

東にとって最大の敗北感、恥辱は定年退官の日にやってきた。その日１２月２６日は奇しくも東教授にとって最後の総回診だった。本来なら医局員全員、看護婦を従えて入院中の外科患者全員を診て回る。総勢二〇名を超える。教

授の大名行列と囁かれている行事だったのだ。ところがその日は財前の手術日に当たっていた。財前が日程をそのように仕組んだのである。手術には医局員と看護婦の殆どが立ち会っているため総回診に付き従うのはわずか六名に過ぎなかった。東教授の最後の日がこの寂しさだった訳である。私に言わせれば、財前も意地が悪いが、言い換えれば東の自業自得とも言える。人に刃を向ければその反動が来るのは至極当然なのだ。

結論として言えることは人間、素直に物を見て、自然の流れに沿ったまま人に優しく思いやりをもって接すれば最終的に人生の勝利者になれるということだ。逆に自分のことばかりを考えて行動すると墓穴を掘って自滅するという教訓でもある。過度のプライドは身の破滅を招く事実をいい年をした東は気づいておくべきだった。

四．山崎豊子「白い巨塔」感想②

「白い巨塔」最大のアピールポイントは財前と里見の医学に取り組む姿勢の違いを際立たせて人間の本質を暴いているところだろう。

財前と里見は同期で、二人とも大変な秀才だった。彼らはその才能を医学の道に捧げたいと思った。そこまではいい。しかし財前は類まれなる外科手術の才能を生かして権力を目指す方向に人生の舵を切った。言わば医学者の立場を利用して他人より優位に立ち、周囲を見下したい欲望にまみれた人生になったのだ。一方の里見は同じ医学でも内科医の道に進み、ひたすら医学を極め、その知識を人の命と健康を守るために生かそうとする人生だった。その人生には権威を求める欲も権力志向も物質欲もまったくなかった。私は至高の人生と思う。

顕著に二人の違いが表れたのが、テレビドラマで登場するところの弁当屋「佐々やん」の社長、佐々木庸平（原作では繊維問屋の社長。社員四三名）の死だった。佐々木は食べ物を呑み込むとき胃の上部につかえる感覚があった。ところが医者嫌いだったためになかなか病院に行こうとしない。しかし妻の執拗な勧めでしぶしぶ浪速大学医学部を訪れ、早期の噴門癌と判断された。そこまではよかった。早期だったから外科手術で全快する見込みは高い。ただ、佐々木の場合、肺にも陰影が見つかったのだが、不幸なこ

とに結核の既往歴があったために陰影はその遺物と考えられて無視された。実は癌の陰だったのだ。癌の手術は内科の里見から外科の財前に回され、財前が執刀した。手術は完璧に終了し、癌の腫瘤は完全に摘出された。しかし術後一週間で痰と咳が次第に酷くなり、三週間後には脈拍は上がり熱も三八度台に急激に上昇した。これを財前が術後肺炎であるとして、肺癌を疑うことはなかったことで生起した死亡事例だった。この事態を事前に懸念していた人物がいた。それが里見だった。里見は初期の噴門癌には遠隔転移が往々にして起こることを医学論文で読み、肺癌を疑っていた。しきりに肺の断層撮影を財前に求めたが、財前は自身の診断に過剰なまでに自信を持っており、まったく里見の意見に耳を貸そうとしなかった。実際、胃の全剔手術中、小腸、大腸、肝臓、膵臓などの周辺の臓器すべてに癌の転移がないことを確認した。この事実にさらなる自信を深めた財前は里見の再三にわたるアドバイスを無視し、たまたま時期を同じくしてドイツで開催された国際癌学会に出かけてしまった。

医学部外科の教授に選出されたこともあり、そのときが財前の絶頂期だった。ドイツ・フランクフルトでは噴門癌の公開手術に成功し、また講演会でも聴衆の絶賛を浴びた。まさに大変な栄誉であり、さらにその際ドイツ癌学会の名誉会員にも推挙されたのであった。

片やその陰で、日本では佐々木傭平が癌性肋膜炎を起こして、肺に血液の混じった胸水が大量にたまり、それが心臓を圧迫して心不全を起こし急死した。財前の立場なら患者の最悪を想定して打つべき手はすべて打つのがふつうである。どれほど診断に自信のあろうともひとつ間違えれば人を死に至らしめるのが医学診断の難しいところだ。ならば、慎重にも慎重を期すのが医師としての務めではなかったか。遺族には財前の不誠実な態度から反感を持たれ、ついには誤診と決めつけられて提訴されることになってしまった。

財前が学ばなければならない教訓はここにある。絶好調のときこそ、事を慎重に運び、油断をしないことである。絶頂期には自信が先行して物事を軽く見やすい。小事、実は大事につながることが多い。小事をおろそかにしてはいけないということだ。そこに大きな落とし穴が待っている。優秀な人間ほど陥りやすい過ちと言えよう。財前のような人間にとっては謙虚に振舞うことは難しいと思われるが、

こういうときこそ絶対に立ち止まらなければならない。里見のアドバイスに従って断層撮影をやっておけば何でもないことだった。

かくして医療裁判が行われるのであるが、原告側（患者側）が裁判で勝つのは非常に難しい。というのも医者同士でかばい合うからだ。ドラマでも洛北大学（京都大学）の唐木教授が裁判長の指名で鑑定人として証言したときのことだ。勿論、中立の立場でなければならないのだが、唐木教授は医療裁判で大学病院側に不利な証言をすると医者が困難な手術に挑戦する意欲をなくしそのことが医学の発展を阻害するという理由を述べて財前に有利な鑑定を出した。裁判長は医学に素人であるがゆえに鑑定人の意見を素直に採用して原告の訴えを棄却した。

一時失望した原告側だったが、これで引き下がることはなかった。控訴に踏み切ったのである。控訴審は佐々木傭平の弔い合戦の様相を呈するようになった。ドラマでは弁当屋は解散、従業員は全員解雇、そして経営存続が不可能となる。未亡人と長男が全財産を投げ打つ形で裁判を継続することとなった。実に不幸な成り行きである。ただ、控訴しても一度一審で被告側の財前が勝っているため、よほど新しい証拠や新事実が出てこない限り原告側の勝訴は難しい。原告側弁護士の関口仁は新しい証言をしてくれる大学医学部関係者を探すのであるが、なかなか見つからなかった。鑑定人に立った洛北大学の唐木教授の権威に影響されたと考えられる。

里見は原告側の証人に立ったため、浪速大学には不要の人間と判断され、大学を辞めねばならなくなった。彼にとって最も大きな衝撃は浪速大学で教授になることよりも長年続けてきた癌に関する研究を断念しなければならないことだった。このことで私が思い出したのが、二〇〇一年に起きた雪印食品による牛肉偽装事件である。西宮冷蔵の倉庫に保管されていた牛肉のラベルを張り替えて産地を偽装し、政府補助金を詐取した事件だ。その偽装を目の前で見ていた西宮冷蔵の水谷社長がマスコミに暴露した。そのため雪印食品は一気に経営が悪化。同時に西宮冷蔵も雪印以外の食肉業者からもそっぽを向かれてしまい倒産した。正義を貫いたがために自らの衰退を招くことになったのである。里見助教授とよく似ているではないか。このように正義は社会から指弾される傾向にある。それにめげずに真実を求めて前を歩いた、彼らの勇気に敬服し賞賛す

る。（勿論、里見脩二は架空の人物だが、モデルがいるかもしれない）

人間は一〇〇人いたらそのうちの九九人は真実に目を瞑る。いやひょっとしたら全員が目を瞑るかもしれない。それほどに人間は保身に走るものなのである。

以下の物語についての感想は③で述べたい。

五．山崎豊子「白い巨塔」感想③

ＢＳ１１の再放送テレビドラマ「白い巨塔」もついに第２１話をもって最終回を迎えた。

２１話のすべてについて面白く鑑賞できた。原作もテレビドラマもよくできた作品と思う。

主人公の財前五郎は地方の貧しい家の出身だった。苦学して浪速大学に進学した日々、無給インターンのとき母親の仕送りでやっと生活した日々、医局員になった後もアルバイトで派遣された病院で徹夜勤務し身体を酷使した日々、浪速大学医学部外科の教授を目指して権力闘争を繰り返した日々、そして診療ミスで患者を死なせたとして訴えられた裁判に勝つため戦いを重ねた日々。これら平坦ではない生涯を送った財前だったが、その間に自分を襲ったストレス、また医者の不養生のために蓄積していった疲労、結果それらを解消するための過度の飲酒そして喫煙、それが知らぬうちに財前の身体を癌が蝕んでいた。それに気づかなかった財前の迂闊さ。癌患者の命を救うために研鑽してきた財前が自ら癌に罹患し倒れることになるとは、何という理不尽。それが彼の大きな悔いだったであろう。

そんな財前の運命を狂わせたのが、ベビーブームで財を築いた産婦人科医院からそこの娘を嫁にしたことだった。財を蕩尽できる機会を得たことで財前に野心が一気に膨らみ、当初抱いた医学への純粋な理想と探求心に徐々に陰りが出たように思われる。そこが里見との違いだ。里見には財がない。そこがよかった。妻の父親にしても財と無縁な、名古屋大学の元内科部長であって、したがって妻も財に無縁の出だった。

裁判では一審で勝訴したものの、手術現場に立ち会った看護婦の残した私的メモが決め手となり、控訴審では逆転敗訴となってしまった。そしてここから財前の転落が始まる。彼はその判決の直後、裁判長に激怒し、自分の手術の

正当性を改めて叫び理不尽を訴えた。それから急に胸を押さえて倒れ込み救急車で病院に搬送されたのである。ＣＴスキャンで内臓をチェックしたところ初期の肺癌と判明した。そこで一安心と思われたが、後日、肺癌の名医でかつての上司だった東教授による執刀で胸を切り開いたところ肺癌はステージ１ではなくステージ４に近い末期癌であった。手術不可能なためすぐに胸を閉じた。当時のＣＴではそこまで撮影し切れなかったと思われる。

財前は周囲から手術の成功を告げられたが、癌の専門医である財前を騙すことは出来なかった。自覚症状と投与された薬から自分は初期の癌ではないと悟った。入院中の大学病院を抜け出し、別の診療施設で内科医をしている里見に最終診断をしてもらったところ長くとも余命三ヶ月と告げられた。財前は愕然とした。しかしさすが財前、そこでうろたえることなく自分の死後の扱いを里見に手紙で託した。手紙は病状の重さを裏付けるように筆跡が乱れていた。そこには今後の医学発展のために自分の遺体を大河内教授の手で解剖されることを希望していた。大河内教授とは同じ大学の病理学教室の教授である。

ふつう死の間際には人の本音が明かされる。死ぬときくらい人は真実を語りたいものだ。財前も本音を明かした。やはりミスで死なせた佐々木庸平を気にかけていたことが口をついて出た。ライバルであり医者として最も信頼を寄せていた里見を新しく建設途中の癌センターの内科部長で招聘することを譫言でも繰り返した。そしてこれが意外だったのだが、教授選や裁判で自分の味方になってくれた内科部長、いまでは浪速大学学長の鵜飼を自分の病室から出ていけと追い出したことである。やはり財前は本心で鵜飼を信頼すべき人間と見ていなかったのだ。鵜飼が自らの野心を満たすために結局は利用されたにすぎないことを財前は知っていた。彼が信頼していたのはやはり里見だった。裁判では財前に敵対する立場になったが、それは自分を貶めるためではなく、真に医学の進歩なり、患者に対する思いやりからやったことだと財前は知っていたのだ。やはり真の友人は里見以外にいなかった。

パートナーについても本当に愛したのはバーの女ケイ子だった。マンションを購入してやり、ケイ子には妻の陰に隠れて生きてもらった。彼に愛情を注いできたのはケイ子であり、決して妻の杏子ではない。杏子も二人の関係を知っていた。杏子はただ自分の名誉のためにのみ、財前に

大学教授になってほしかったのである。

財前は財前なりに人生を戦った。大学教授が頂点と考えたが、夢はさらに膨らみ、浪速大学附属癌センターのセンター長になって日本中の癌患者の命を救うことが次に与えられた彼の使命になっていた。しかしそれは叶わなかった。それが最大の悔いだったであろう。それでもできることはすべてやった。その点では悔いは薄まるだろう。やはり財前もそして里見も懸命に医学発展のために努力してきたし、里見はこれからも努力し続けるだろう。私はフィクションとはいいながら、このような人生を歩んだ財前と、また歩み続ける里見を羨ましいと心から感じた。財前の死にゆくシーンでは胸が快い感動で満たされた。素晴らしい作品だったと思う。里見にもし実在のモデルがいるのならば、心から尊敬し拍手を送りたい。

● 読後感

一・ 石原慎太郎「遠い夢」

石原氏が末期の膵臓癌に侵され、死の床にあった二〇二一年一〇月末、家族から原稿が新潮社に届き、遺作の編集作業が進められた。四〇〇字詰め原稿一七枚の短編小説「遠い夢」である。この小説が翌二二年の三月七日発売の雑誌「新潮」の四月号に掲載された。

デビュー作となった、芥川賞受賞の「太陽の季節」を一部彷彿させるところがある。

簡単に粗筋を書くと、主人公の「私」は葉山に住んでいた少年の頃、疎開してきた名家の女性に恋心を抱いた。それから時は流れ、彼女は東京に引っ越して音信は途絶えてしまう。　「私」は大学時代に書いた小説が評判を呼び作家となる。その後、彼女の弟と再会。そこで彼女のその後の人生を知る。官僚と政略結婚をさせられ、いまは癌に侵され死の床にあった。やがて彼女は死んでしまい、その葬儀で「私」はバラの花を祭壇にまき散らすというストーリーだ。そこにどんな怒りがあったのか、それともどんな悔恨があったのか。なにやら石原氏の人生を凝縮させているようで興味深い。その中の言葉で「所詮この世のことは何もかもがあっと言う間のこと」というのがある。あの石原氏にして、まだまだやり残したことがあるとの印象を与える言葉だ。

私自身に言わせれば、石原氏に人生をムダにした瞬間は少しもなかったように思う。だから石原氏は贅沢だ。この世には人生に悔いを残す人々の方が圧倒的に多い。運命は自分の思うようには動かないからだ。裏切られた思いを人生に抱く人の方が多いのではないか。

それでも石原氏は貪欲だった。もっともっと貪欲に人生を自分の望むように生き、悔いを残さずに逝きたい。そのように考えた人生だったからこそ、あれだけの業績を残せたのだと思う。

そして私の人生もすでに齢七〇を過ぎた。いいことも悪いこともいろいろあった人生だったが、あっと言う間に過ぎ去った印象だ。だが、本当にそれだけの時間を自分は生きたのだろうか？　はっきり言って自信が持てない。何もやらずに過ぎた感覚と後悔の方が大きいからだ。もっと勉強すればよかった。もっとしっかりと人生の目標を定め、着実に生きればよかった。しかし念のために言うのだが、これは自分がひとかどの人物になれなかったことを悔やんで言っているのではない。人生の目的が世間で言うところの成功にはないからだ。そうではなく人格の陶冶、完成にある。どれだけ世のため人のために生きることが出来たか、そのことが重要なのだと思う。私は近い将来に死を迎える。そのときに必ず抱くに違いない悔恨を最小限に収められるべく、どこまで出来るかわからないが、残りの人生を頑張って生きたい。

二．横山秀夫「仕返し」

横山秀夫氏の警察小説のうち、短編「仕返し」の一節に感じたことがあったので以下に記述してみたい。

主人公の敏腕刑事・的場はたったの一言、聞かなければよかった事実を聞かされ絶望し人生に嫌気が差し、そして自分の輝かしいキャリアを一時袖にしてしまう。

そのたった一言とは、急逝した元交通部長の通夜の席でのことだった。彼に出世競争で大きく水を開けられたかつてのライバルが彼に言った言葉だ。発言は勿論、悪意に基づく。出世競争の嫉妬であり、うまくいっている家庭生活を破壊したい黒い欲望だった。

「お前の嫁さん、和海ちゃんだがな、交通部長のお古だったんだぞ」

和海も同席していてその言葉を同時に聞いた。その瞬間

の彼女の顔は殺人の被害者になる直前の顔であり、それは事実を裏付けるものだった。

和海が交通部長のお古？　ということは部長が若いころの和海の果実を十分に吸いつくした後その肉体に飽きて別れたくなり、俺に押し付けたということだ。そう思ったとき、激しい怒りが彼を襲った。身を焼くような思いだった。

かつて的場は交通部長から「ウチにいるあのかわいい娘。あの子がな、お前のことを好きらしいんだよ。よかったら付き合ってみないか」、と言われた。

言われた彼はかってから憎からず思っていた彼女が自分のことを慕っている、と知って忽ち舞い上がった。付き合ってみると思った通り、おとなしく純情で気立てもよく優しい。すぐに深い愛情を感じて結婚を申し込んだ。彼女の方も何の躊躇もなくそれを受け入れてくれた。それで交通部長に正座して三つ指をついて仲人をお願いした経緯があったのだ。

ライバルの言葉があって以来、帰宅しても、いつも優しい気持ちで彼女を包み込んでいたが、そういう気持ちはまったくなくなった。寝室は別になった。顔も見たくなくなったのだ。おそらく彼女は交通部長から言い寄られ、そのおとなしく優しい性格から手籠めにされたのだろう。だから彼女は悪くない。しかし、しばらくして離婚した。今思えば狭量だった。和海は別れる時、ごめんなさい、と言って的場の下を去った。

横山氏が描いたのは、パワハラとかハラスメントに世間がまったく無関心だったころのことだ。当時はこうした事例は数多くあったと考えられる。

二人には一人息子がいたが、彼女が引き取った。そして彼女が一生懸命育てた。何の愚痴もこぼさずに。これが理不尽でなくて何であろうか。後年、自分が母親だけの手で育てられた息子は、どこかから噂を聞いたのであろう、母親の元を去った敏腕刑事の父親に毒づく。「勝手なものだよ。お前さんは」

離婚後、何年かして的場はスナックで出会った女性と再婚し子供を一人もうけた。子供が出来てからは、その子のためにまた俄然やる気を出し仕事に邁進するが、一方で最初の奥さんに申し訳が立たず、悶々とした日々を過ごすことになる。

横山秀夫氏は一体何を言いたかったのか、読者は想像す

るしかない。そして自分が的場だったらその時どういう決断をしたであろうか。意外と難しい問題である。

三．芥川龍之介「蜘蛛の糸」

この作品は短編だが、芥川の名声とともに歴史に残る名品となっている。私の記憶では中学校の教科書に取り上げられたはずだ。人間として守るべき大切なこころの持ち方を述べている。物語の筋立てはあまりに有名なので書くまでもないが、念のために書くと以下の通りである。

朝方、天国で蓮池の周囲を散歩されていたお釈迦様がふと池の底を覗いたとき、はるか地獄の底に殺人や窃盗などの大罪を犯した、カンダタという大悪人が見えた。地獄の灼熱や針の山などで苦しんでいる。ところが、お釈迦様はふと思い出した。カンダタが森を歩いていたとき足元を蜘蛛が一匹動いていたことがあった。カンダタは踏みつぶそうと一瞬思ったが、かわいそうに思い、その命を助けた。その記憶があったためお釈迦様はカンダタを救ってやろうとお思いになった。蓮の上にいた蜘蛛から糸を手繰り、それを地獄の底へと垂らしておやりになったのだ。糸ははるかかなたのカンダタの前まで届き、気づいたカンダタは糸をしっかりと掴んだ。これを辿っていけば天国に行けると考えた。それからはせっせと糸を手繰り、徐々に徐々に天国目指して上がっていった。縄を使って上がる泥棒稼業のカンダタには容易いことであった。しかし天国はまだまだ遠かった。まだ半分も来ていない。疲れたカンダタは途中一休みをした。そしてはるか下方を覗いてみた。驚いた。蜘蛛の糸には何百人という悪人どもがカンダタ同様にぶら下がって少しずつ上がってきているではないか。

カンダタは思った。こんな大勢がぶら下がれば糸が切れてしまう。切れてしまえば再び自分は地獄の底だ。カンダタは思わず叫んだ。「おい、お前ら手を放せ。ぶらさがるな。糸は俺だけのものだ」。次の瞬間、蜘蛛の糸はカンダタの上方で切れてしまい、カンダタは真っ逆さまに地獄に落ちていった。

お釈迦様は悲しく思われたのだ。せっかく過去に善行を施したとはいうものの、自分だけ助かりたいと思うことはあさましく、思いやりがないことだと思われたのだ。それならば、カンダタに相応しい地獄に戻すことがよかろう。

しかし、私は思った。カンダタの叫びこそが正当正常な

ものではないか。人は誰しもまず自分だけは助かりたいと思うもの。それが生存本能だ。せっかく天国に行く絶好の機会を他の悪人どもによってつぶされてたまるか。これがふつうの人間の考えることではないか。ギリギリ切羽詰まった状態で日々を過ごしているカンダタは他人のことを思いやる余裕など、まったくない。早く天国に行き、地獄の厳しい生活から抜け出したい。とても何百人という悪人を助けてやる義務は自分にない。これはむしろ人間の正直な心の動きであって、お釈迦様がカンダタをさもしいとか、あさましいと考えたことが芥川のフライングではないか。お釈迦様は果たしてこんなに狭量であろうか。これが私の疑問だった。

四．芥川龍之介「羅生門」

貴族による宮廷文化が花開いた時代。藤原氏が中心になって権力争いを繰り広げた時代。そこで平安時代とは華やかで衣食にも恵まれた時代と思いきや、下層階級にとってはあまりに悲惨な生活が展開していた。とくに地震などの天変地異や疫病、それに飢饉によって都が荒廃した時期が何度もあった。

芥川のこの作品、短編ではあるが、さすが芥川であって、意図するところを余すことなく描き切っている。それが名作、「羅生門」だ。ここに描かれた、下人と老婆はあまりに悲惨な境遇に置かれていた。

羅生門はかつて文化を象徴する立派な建造物だったのだろう。それがいまや荒廃し切って丹塗りのはげた丸柱、その材質の木は腐りかけている。門の七段ある石段は廃棄物置場と化し、死体まで放置されている。周囲は死臭が充満し、とても耐えきれない有様だった。

ひとりの下人が羅生門に来た。下人は雇人から暇を出されて数日が経っている。彼は石段の一番上の段に座り、雨宿りをしていた。しばらくして下人はふと、死人が身に付けている金目の物を手に入れようと思った。が、目ぼしいものを見つけられず、下人はさらに楼の上で別の死体を見ることにした。楼の上では何やら動くものの気配がした。何しろぼんやりとした月明り以外に明かりは何もない。始めは猫か犬だろうと思った。よく見ると薄汚れた紺色のみすぼらしい着衣の痩せこけた死に損ないの老婆だった。何をやっているのかとしばらく陰で下人は見ていた。老婆は

鬼気迫る様相を見せて、死人の髪の毛を一本一本丁寧に抜いている。おそらくかつらにするためと思われる。下人はおぞましいものを感じ、いきなり老婆の前に姿を現し、力ずくで老婆の着物を剥がしにかかった。売ればいくらかにはなるだろう。老婆は勿論抵抗した。しかし下人の腕力にはかなわない。すっかり剥がされ、老婆は丸裸にされてしまった。

下人は去り、老婆は泣きながらも髪の毛を抜く作業を止めなかった。このふたり、何ともおぞましい。下人も実に卑劣だ。しかし人間、衣食足りて礼節を知ると言う。こんな状態でふたりはこの先どうやって生きていくのか。かつらとして髪の毛を売ったところで、また老婆の薄汚く擦り切れたような着物を売ったところでどれほどの金になるというのか。人間は生きることを本能的に強いられている。どんなに苦しくとも生きねばならない。死は安らぎをもたらすのだが、死ねないのが人間だ。

私は、日本という平和で衣食住に満たされた場所、そしてこの時代に生まれたことの幸せをこの小説からしみじみと感じた。たとえ生活が出来なくなっても生活保護を受ければいい。われわれは実に幸福な時代に生きていると感謝せざるを得ない。

多分、下人と老婆は盗みで糊口を凌ぐしかない。何もしなければ餓死する。しかし盗みが発覚すれば死が待っている。生きた心地のしない時代であった。

五．芥川龍之介「地獄変」

この小説に描かれた時代がいつなのかは判然としない。芥川が今昔物語等の説話集を参考にしたというから平安時代の話かもしれない。

冒頭に出現する堀川の大殿様とは誰のことか、ともかくもその大殿が配下の絵師に地獄の炎に焼かれる人間の姿を絵にしてほしいと命じたことがあった。牛車に乗った女人が生きたまま焼かれる惨い場面を描かせようとしたのである。何故そんな場面を絵にして楽しもうとしたのか、その心のうちはいまひとつわからない。権力者の気まぐれだろうし罪人を殺しても何の痛痒も感じない、人権のない時代には有り得た話だろう。

絵師は良秀と言う男。性格劣悪にして他人に対する温情なり思いやりは皆無と言っていい。しかし絵師としての腕

は天下一品。弟子を多く持ち、弟子たちも良秀の命令には素直にしたがった。それなりの権威も有していた。絵の手法は完全に写実主義だった。目にしたものをそのまま忠実に描き出す、そういった手法を取った。だから地獄変の絵も目の前にその光景がなければならない。この男、想像では描けないのである。大殿もその辺のことは理解していたようで、それだけに火に焼かれる生きた女人が業火に悶える姿を見せることが必要だった。大殿は焼死する女人として女囚を考えていた。犯罪者にしてもその死に方はあまりに惨くまた非人道的である。

良秀にはひとりの気立てのいい娘があった。皆から嫌われた男の娘にしては出来過ぎていた。思いやりがあって誰からも好かれた。動物にも優しかった。ある時、大殿に苛め抜かれた猿を娘が助けたことがあった。以来、猿は娘になつき、何があっても一緒で離れようとしない。一方、娘は性格劣悪な父親に対しても優しかったし、尊敬の気持ちも抱いていた。

そんな明るい娘があるときからふさぎ込み、暗い表情を見せるようになった。その理由は良秀が業火で焼かれる女人として自分の娘を選んだからである。私の想像では自分の娘が目の前で焼死することで絶望する感情を味わい、それを絵として表現したかったのであろう。その感情は地獄絵を描く惨い状況に合致した。娘は尊敬する父親の考える芸術を理解し、死にたくはなかったが、父親の芸術を完成させるために死から逃げようとしなかったのである。大殿も目の前で娘が焼け死ぬ光景を見た。唖然とした。死ぬのは女囚とばかり思っていたからだ。娘は大殿のおそばに仕える仕事に就いていた。大殿も娘を気に入り、できれば側室にしたいとさえ考えていた。そしてついでに言うと、猿も娘と一緒に焼死した。

良秀は完璧な地獄変を完成させた。完璧な芸術だった。鼻高々だったであろう。しかしそれはつかの間のこと。娘は二度と良秀の手の届かないところに行ってしまったのである。良秀は絶望した。そして絵の完成した翌日、悲しみのあまり首を吊った。

私は芥川のこの小説に込めた真意について、芸術とはここまで追求するに値するものと考えたフシがあったと考えている。

六．松本清張「捜査圏外の条件」

果たして、完全犯罪は成立するのか。可能性がまったくゼロではないが、成功にはかなり幸運な偶然が必要になる。と言うのも人間のやる事だから、どこかで取りこぼしが出て破綻するケースが多いからだ。

この作品は犯罪の捜査線上に初めから上がらないよう画策して完全犯罪を目指した男の物語である。結論から言えば、想定外の出来事から犯罪が露呈し失敗に終わる。

完全犯罪を目論んだ男、黒井忠男には結婚したばかりで戦争未亡人になった妹がいた。屈託がなく明るい妹を黒井は深く愛し、彼女が非常に大切な存在だった。黒井は銀行員。近所に笠岡勇市という同じ銀行の同僚がいた。笠岡は別の課の課長を務めていた。この男、妻がいながら女の噂が絶えずあり、それだけに妹に笠岡が接近することを警戒していた。それがある時、二人が親しい口を利いていたので心配になった。だが、その時はそのまま何事もなく時間が過ぎた。

しばらくして妹が亡夫の墓がある山形へ墓参に行きたいと言い出した。その時は何の疑いも抱かず小遣いを渡して山形行きを許した。しかしまさか、それが笠岡との不倫旅行とは気づかなかった。妹はそのまま不帰の客になった。北陸の地で急逝したのである。急性心不全だった。旅館の主人が知らせてきたが、同行した笠岡からではなかった。笠岡は身の危険を感じて逃げたのだ。死亡した妹と旅行に行ったことも内密にしていた。それが後から知れて、黒井は激しい怒りに震えた。その時から黒井は笠岡を殺すことを考えるようになったのである。

しかし憎き相手を抹殺しても自分が捕まっては何にもならない。が、犯罪は大抵発覚する。死体をこの世から跡形もなく消し去ることはできないからだ。問題はその死体と自分を結びつける痕跡がなければいい。例えば殺人が起きた場所と今自分がいる場所だ。それが遠く離れ、何ら関連するイメージが浮かばなければいい。それと時間だ。妹が死んだ時と笠岡が死んだ時が遠く離れており、関連が出てこなければいい。

それで黒井はまず銀行を辞めた。取り敢えずは笠岡から離れることだ。家庭を持っていない黒井は自由に行動できる。彼は山口県宇部市に転居した。そして当地のメッキ工

場に職を得た。時間も置いた。七年間まったく行動を起こさなかったのだ。笠岡と自分を結びつける事物が距離も時間も遠く離れていればいるほどいい。銀行に捜査の手が入っても何も出てこない。七年という時間が銀行関係者から自分を忘れさせてくれる。銀行の誰もが笠岡と自分を関連付けて考える者はいないのだ。

こうして黒井は恨みだけは忘れずじっと時の流れるのを待った。臥薪嘗胆の心境でじっとその時を待った。しかし肝心で忘れてはならないことがある。七年のうちに笠岡が行方知らずになっては元も子もない。だから常に笠岡の現況を知らせてくれる人物の存在が不可欠だった。その人物を給仕上がりの重村に決めた。幸い彼は黒井を慕っていたので頼みやすかった。以後なにくれとなく重村に付け届けを贈るなど面倒を見た。重村は黒井に忠実で笠岡の現状を人事異動の都度報告してきたのである。今はどこにいる、どこの何のポストに就いている、と。事細かく律儀に知らせてきた。七年が経ったとき、笠岡は都内の某支店長に栄達し、重村は何の因果か、笠岡の部下になっていた。だから今度は日常的に笠岡の動きがわかった。すると笠岡は新宿の二幸裏の居酒屋の常連で頻繁に出入りしていることが分かった。黒井は笠岡に偶然出会ったことにすべく二週間の休暇をもらって東京に出た。

ある晩、黒井はその居酒屋の付近で笠岡に偶然を装って出会った。二人は久闊を叙し、無沙汰を詫びるかのようにその居酒屋に入った。笠岡はすでにかなり酔っていた。テーブルに座ってからも視線は下向きでまともに黒井の顔を見ていなかった。これは黒井にとって青酸カリをビールのコップに混入させるチャンスとなった。

とその時、笠岡は何を思ったか、突然、上海帰りのリルを歌い出した。そして、よくこの歌を君と歌ったものだったねぇと言った。その言葉を通りがかった女店員が小耳に挟んだ。笠岡はこの店の馴染みで女店員の彼女も笠岡の顔はよく記憶していた。まさかこの歌が黒井の墓穴を掘ることになるとは思わなかった。この歌が流行ったのは昭和二五年でそのころの笠岡の交友関係を洗えば黒井に辿り着く。七年の歳月をこの日の為に耐え忍んできたのだが、まさか笠岡が上海帰りのリルを歌うとは思わなかった。しかもそれを笠岡と顔なじみの女店員が聞いてしまうとは。完全犯罪は思わぬ行き違いで破綻する。完全犯罪が成就するのはやはり偶然の賜物以外にない。それでも黒井は殺人を

決行した。酔った笠岡が下を向いた時、一瞬の隙をついて青酸カリを笠岡のコップに混入した。そして何食わぬ素振りでそのまま店を出た。五分か六分後に笠岡は死ぬ。だから黒井は笠岡が死亡する瞬間を見ることはできない。しかし笠岡は間違いなく死んだのである。

しかし、私は笠岡が歌を歌うという偶然が仮になくても黒井の計画は破綻すると考えた。それは重村の存在だった。重村がこの殺人事件を黒井と結びつけないはずがない。二幸裏の居酒屋に笠岡がよく行くと教えた相手は黒井。笠岡の動静をずっと長期にわたって教えてきたのも黒井。だから笠岡が二幸裏の居酒屋で殺されたと知った瞬間に黒井の犯行と思わないはずがない。どんなにお世話になった人でも殺人事件と関りがあると知れば警察に通報するのが一般市民の取るべき義務。したがって、初めからこの計画が破綻しないはずがなかったのである。大作家・松本清張がこんな単純なことを何故無視したのか。世話になった重村が黒井のために沈黙を守ると何故想定したのか。私にはそれが違和感として残った。

それともう一点。急性心不全の妹を放置して逃げ帰った笠岡だったが、妹を手にかけた訳ではない。その程度の過ちをもって七年も殺人計画を持ち続けることが果たしてふつうの人間に可能か、という問題。臥薪嘗胆という言葉があるくらい、人間はどんな恨みも時とともに忘れてしまうものなのだ。過去を忘れることが出来るから人は生きることが出来るともいえる。七年間も殺人を忘れずに過ごすことはとても人間業ではない。これが私の違和感の二点目だった。

七．五木寛之「人間の運命」

人間という存在は生きねばならないよう、神から創造されている。死へと向かうハードルを越えることは容易いことではないが、それを越えさえすれば、死は安楽の世界といわれる。しかしそうせずに生きるべく生物学的に創られており、簡単には死ねない。

生き残るための戦いはそこから生じる。食べ、そして安全で寝心地の好い住処を確保するために人間同士で熾烈な戦いを繰り広げる。

殺人が伴うような行き過ぎた争いは、戦国時代や太平洋戦争などの異常時ならばふつうに起こる現象であるし、相

手を殺したくなくても、自分の身を守るために殺さねばならないこともある。

五木氏が書いた「人間の運命」には次のようにある。

現在でも彼と交流のある、温厚で紳士的な人の話だ。名は当然明かされていない。その人が太平洋戦争中、輸送船に乗っていて敵戦闘機に攻撃され、船底が火の海になったことがあった。そのとき、その人は平生では考えられないことをした。甲板に出ないと助からないことがわかったから、甲板の淵に手をかけて懸命に這い上がろうとしたのだが、そのとき彼の足に縋り付いてくる仲間がいた。仲間も当然、助かりたい一心である。切羽詰って彼の足を掴んだのだろう。

一分一秒を争うような時でなかったら、その友人は二人が一緒に助かるよう努力したに違いない。しかしそういう状況ではなかった。数秒後には自分の命もわからない。そこで彼は掴まれていない自由な足の方で、仲間の手を蹴ったのだ。仲間は船底に落ちて行った。

つまり彼は人を殺したことになる。やむを得ない行為ではあったが、結果的に人を殺したことになる。このことが、その人のその後の人生に暗い記憶として残った。何十年と経つにも拘らず、ようやく五木さんに語ることができたということは、そのときのことが衝撃となって、頭から離れなかったのだ。

もしもそのとき蹴り落とした人物がわかっていたなら、さらに心の傷は深かったかもしれぬ。が、幸いにして蹴り落とした人物の顔を見る余裕はなかった。

この行為は運命と思う。私も健康で未来がまだ十分にあると認識して同じ状況に置かれたなら、きっと同じことをするに違いない。人間は生きるためには何でもするものなのだ。殆どの人はそんな冷酷さ非情さをどこかに持っている。だからといって、自分に失望することもない。神によってそのように生かされている存在なのだ。

もうひとつ印象に残った話がある。

五木氏は戦時中、北朝鮮の平壌に両親と弟妹の五人で暮らしていた。教師をしていた父親はそれなりの地位にあって、暮らしは豊かな方だったらしい。

ところが、日本が戦争に負けてソ連軍が平壌あたりに大挙押し寄せる状況になった。母親は終戦後二ヵ月で亡くなってしまったから、父親は独力でまだ十二歳の五木氏と小

学校入学前の弟、それに二歳の妹を連れて逃げなければならなかった。すぐにでも逃げないと捕虜になる。男子は強制労働のためシベリアに送られる恐れがあるし、女子はソ連兵に暴行され、挙句、人身売買の対象にされかねない。

一家は乏しいお金でブローカー（混乱時には何でも商売にしてしまう人がいるものだ）に交渉し、逃げる段取りをつけてもらった。

昼間はソ連兵や北朝鮮兵がいるから夜間時に逃げるしかない。一家は夜陰に紛れて、他の家族ともども音をたてないように移動した。殺気立っている状態だから、妹が移動時に泣くと他の家族から静かにさせろと怒鳴られた。妹は体力もなく、助けを借りずには歩けない。足手まといになった。このままでは一家四人全員が捕まり、平壌に戻されてしまう。

一計を案じた父親と五木氏はある日の夜明け前、裕福そうな農家の庭先に妹を置き去りにして逃げた。勝手だったが、こうする方がかえって、妹の幸せのためにはいいだろうと思ったのだ。しかしさすがに置き去りにするとき、妹の顔は見られなかった。

ところが、運命は再逆転する。何時間か逃げ続けたのだが、前方に捜索隊の兵士のいることを知って、慌てて元の道を戻った。すると何ということか、道に迷った挙句、妹を置き去りにした、あの農家の庭先に出てしまったのだ。

家族全員にとって幸運だったことは、妹がまだそこに座っていたことだった。妹は置き去りにした場所に座ったままで移動していなかったのだ。そして五木氏たちの方を見てニコニコ笑っている。

その瞬間、五木氏は激しい後悔に襲われたという。同時に深い安堵の気持ちにも捉われた。思ったことは、もう二度と妹を手放すまい、何があっても自分たちが共倒れになっても、四人全員が一緒にいることが最上の選択であるということだった。妹には心の底で何度も詫びたのだが、その思いは今でも続いているそうだ。

余談だが、もしもそのとき妹が勝手に動いていたなら、あるいは朝の早い農家の人が妹を見つけ屋内に移動させていたら、さらにまた五木氏たちが捜索隊に行方を阻まれ元の道を戻らなかったら、五木氏は妹とこの世で二度と再会できなかったであろう。だから彼と妹の間には分かち難い運命があったと思われる。これは運命なのだ。人間には持って生まれた運命というものが厳然として存在するら

しい。

五木氏はそのような過去を振り返って自分自身を悪人であると決めつけている。

だが、私はそうは思わない。彼は決して悪人ではない。妹を置き去りにしたことでずっと後悔し続けた人が悪人であるはずがない。悪人ならばとっくに自分を正当化し、自分の都合がいいように忘れてしまっている。

私にしても、もしも貧困のどん底にあって、たった一枚であってもそのパンがなければ生きられないとわかったとき、家族を守るため、愛する人のために人と争うかもしれないし、傷つけ合うかもしれない。人間はそのくらい弱い存在であるし、自分本位な存在なのだ。

そこで、五木氏は結論づける。自らの経験からいっても、人間が悪人になるかならないかは状況次第である。つまり人間は極限状態において、自分や家族そして仲間を生かすために敵対する他人を傷つけ、また殺すこともあり得るのだ。

私もそうかもしれぬと納得する。そうであるなら、平穏無事に人生を送れている現在を、私はとても有難く思うし、感謝し幸福を感じなければならない。

裏を返すと、そうした平穏な状況に置かれていない人たちをどう考えたらいいのだろう。

どんな酷い犯罪者であっても一部の例外を除けば、例えば自分が死刑になりたいために誰でもいいから人を殺したかったという者やあまりに身勝手な自分の都合しか考えない者は別にして、多くの犯罪者にもそれぞれの事情がある。酷い状況から脱するためにもがいていたのかもしれぬ。それを全く考慮することなく、一方的に悪人と断罪することが、果たして正しい判断なのか。決めつける側にも驕りがないとはいえないのではないか。

つまり、人はもっと謙虚に生きる必要があるのではないか、もっと優しさがあってもいいのではないか。視点を変えてもっと大きく捉えれば、人間社会における日常には、生存競争の中で他人を蹴落とし、自分だけが日の当たる場所に出ようともがいている人たちが大勢いる。競争に勝ち、自分がある一定の地位にいるということは、それ自体が取りも直さず他人の犠牲の上に成り立っているのだが、そんなことには一向に気づくこともないし、気づこうともしない。それどころか、競争に負けた人を弱者と見做して蔑む

ことさえする人たちが結構多い。人間は自分本位で身勝手な存在である。自分こそ善人で悪いことなどは一切、何もしたことがないなどと嘯く人がいるが、そういう人こそ自分の真の姿を理解していない人といえるのではないか。

● 時事問題

一．范疇氏のこと

第一級の中国経済研究者、范疇氏は台湾で生まれた。シンガポールで中学、高校を修了し大学は台湾に戻って名門・台湾大学を卒業した。さらにアメリカに渡りコロンビア大学を卒業しそのままアメリカで新聞記者の仕事を得た。その後、中国に移住。中国では経営コンサルタントの会社を経営し二二年活躍した。その間、実に数多くの中国人と交流することになる。実業界は勿論だが、その実業界が共産党と深いつながりがあるために共産党員との関係も深かった。しかしボクシングで例えるならば、リングには上がらず、つまり権力闘争に巻き込まれることなくリングサイドでウォッチングを続ける付き合い方をした。それによって多くの党員の性格や考え方や行動パターンなど、したがって共産党の本質を熟知することができた。

そういう范疇氏であったが、彼の取った行動は意外にも中国から事業のすべてを引き上げることだった。引き上げたのは二〇〇八年、その年にあのリーマンショックが起きた。しかし世界各国がリーマンショックに翻弄される中にあって中国だけが莫大な投資を行い、いわば世界を救う形になった。つまり中国の経済はそのとき絶好調だったのである。周囲の関係者は范疇氏の行動を訝しく思ったようだった。

実は范疇氏、その段階ですでに中国経済を見切っていたのである。この国の経済はいずれ破綻する。しかしそれを誰も信じようとしなかった。が、それが范疇氏の真骨頂だ。現在の中国経済は見通したとおりに崩壊しつつある。どういうことかというと、すべての省（地方政府）、すべての主要都市の財政は赤字転落。地方政府の赤字が八〇％に達した段階で危険水域といわれるのだが、二〇二三年の八月ですべてが債務超過になった。当然中央政府の現金は枯渇しつつある。公務員に給与が支払えない状況となったのだ。となると心配されるのは治安だ。警察も消防も機能しなく

なる。民間企業においても不動産業のすべてが危ない。その他の産業についても給与未払いが続出。支払いを求めてストが頻発している。それでも会社を辞めない。辞めたら二度と職を得ることができないと不安視しているからである。現に若者の失業率は五〇％に達しており、大学は出たけれど無職といった状態になっている。外国からの投資も大きく減退。世界の大企業といわれるところが事業の拠点をベトナムやインドやタイ、フィリピンといったところに移転。他国より人件費が安いというメリットもすでに失われており、それだけでも外資引き上げの要因になっている。さらにもう一つの懸念材料が共産党の政治リスクだ。突然何をやりだすかわからないのである。

そして貧富の格差はますます拡大し、食事に事欠く人民が続出している。世界第二位の経済大国となり、さらにアメリカを抜いて一位になる夢は過去のものになり、もはやアメリカを上回ることは永久にない。いずれ中国に暴動が起こり、かつてのソ連が経験したような体制崩壊が起きる。つまり共産主義の崩壊である。

その范疇氏であるが、氏は台湾に帰り、すでに中国に関する書籍を一〇冊出版した。直近の著作は、「中共後の中国」である。これは台湾でベストセラーになった。台湾で中国経済に関心のない人は恐らくいないから当然だろう。それほどの名著と考えられる。私も翻訳本が出たら即刻買い求めるつもりだ。

さて、この本、共産党が崩壊した後の中国の状況を予測した内容だ。中国はいくつに分裂するのか、毛沢東がかつて言った二七なのか、それとも軍管区で分ける七なのか、それは誰も予測不能だが、あの広大な中国は分裂するしかない。あとは核の所有をどう考えるのか。ウクライナのようにすべての核をロシアに引き渡して、現在の悲劇を招来した反省から中国ではどうするか、経済難民の問題もある。難しい問題がこれから発生する。

その范疇氏は著作の中で共産党が近々崩壊すると断言した。崩壊するかもしれない、ではない。崩壊を断言した。そこで私は急に心配になった。范疇氏の身の上にある危険なものを感じたのだ。共産党や習近平が黙ってそのままにするかという危惧だ。中国で最近連続して起きている著名人や要人の心臓発作が范疇氏の身の上にも起きてしまうのではないか。誰も言わないが、私の考えすぎなのか、この方も暗殺されてしまうのではないか。

残念ながら心配は的中した。范疇氏は一一月六日、日本で行われる予定の台湾を守る集会で講演するため台湾の空港近くまできて急に体調を崩した。心臓発作を起こしたのだ。急遽、タクシーなのか電車なのか、そこから病院に搬送されたが、そのまま急逝した。八月二七日に収録したというユーチューブの映像を見る限り、病気の兆候はまったく見られない。前首相の李克強氏と同じだった。奇妙だ。実に奇妙だ。

范疇氏はまだ六八歳だった。非常に残念だ。これからもっと台湾や日本の危機について我々を啓蒙して頂けると思っていたのにこんなことになるとは悔しい。

二、中国人の死生観

一説によると、中国人は死後、全員が地獄に行くと考えている。この説が正しいと前提で、以下に論を進める。

中国人の死生観が死後、全員が地獄に落ちるということであるならば、当然、死ぬことが震えるほど恐いはずだ。出来るだけ生き延びて、その間人生を楽しみたいと思う。ところが我々外国人にとって最も困るのは、どうせ地獄へ行くのだから何をやっても同じだと思うようになることだ。したがって生き方そのものが汚いものになってしまう。人の命などどうでもよくなり、平気で他人を殺すことも出来るようになる。しかし自分の命だけは途方もなく大切なのだ。自分だけ助かればいいし、しぶとく生に執着する。

その典型的な事件が二〇一三年に起きた。二歳の女の子が車にはねられたのである。運転手は本来なら車から降りて介抱し、すぐに病院に運ぶ。ところがその時運転手はそのまま何事もないように走り去った。目撃した人も何人かいたらしいが誰一人として女の子を助けなかった。通り過ぎた人は一八人いたという。この数字は疑わしいが複数人いたことは間違いない。さらに酷いことに次に通りかかった車も停車することなく平気で女の子をひいて走り去ったという。女の子は死んだ。警察もいい加減で、面倒だから捜査もしないらしい。一四億人もいれば一人ひとりの命などどうでもいいらしい。とくに一人っ子政策が実施された頃、二人目として生まれた子には戸籍がなかったから人間扱いされない傾向があるという。この程度の国民性だから、本人たちも死んだら地獄に行くことが当然と自覚しているのも理解できる。

それに対し、今でも底流に武士道精神が生きている日本人は義のために、あるいは世間のために平気で命を投げ出すことがある。しかし残念なことにさすがに最近の日本人にも変化が出てきたようだ。無気力が横行しているためか、大義があっても命を捨てることが出来なくなっているとの指摘もある。

従来から日本人は桜を好むといわれている。桜は自らの咲く時と散る時を知っている。しかもその花の命は短く潔い。そこが日本人の精神に合致しているから桜が好きなのだろう。こうしたことからも私はつくづく日本人に生まれてよかったと思う。中国に生まれなくて幸いだった。

中国人はどうしてこれほどまでに見苦しく情けない人間ばかりの国になったのか。私なりに独断すると、隋の時代から一三〇〇年続いた官吏登用制度「科挙」がひとつの原因のように思う。科挙に合格すると官吏に登用され、破格の給与を得られる。貧しい人々がそうした極貧生活から一気に抜け出ることのできる唯一の方法がこの科挙だった。名誉と富を得るために例えば、紀元前の孔子孟子荀子などやその後の偉人たちの事績や思想が単なる机上の学問に劣化してしまい、その精神が実生活に生かされることがなくなった。人を押しのけて合格した官吏には一族親戚が群れるようになり、その富のおこぼれに与るようになった。孔子たちの高邁な精神が大金を得る目的になってしまったのだ。科挙は激烈な競争であり、一説には合格者ひとりに対し三千人の競争率だったこともあるそうだ。そしてこれが他人を蹴落としてまで勝つという今の中国人の原型を作った。一方、多少金のある人間なら試験監督官に賄賂を贈ったとも考えられる。そういう国なのだ。したがって中国文化と中国人文化は自ずと異なるものとなり、日本人が中国文化として憧れるものは本棚の中にあるだけで中国人文化そのものにはない。中国人がつまらない人種に沈んだ理由の一端がここにある。

三、中共の人民解放軍は軍として機能するか

中国人の死生観で述べたように、中国人は死を極端に恐れる。死後は必ず地獄へ行くとすれば、死がより怖くなって当然である。そうであるなら、死を恐れるこの民族が戦場に出てどう戦うか。勇敢に戦うことは可能なのか、そのことをここでは問題にする。

まず人民解放軍に入隊する目的から言及したい。目的は自らの豊かな生活である。人民解放軍は中国共産党そのものであり、国軍ではないのである。金がジャブジャブ入ってくることが共産党員の特権であり、それが目的で入党するのだから命を賭けて戦場で戦う気力は当初からないと私は想像する。少しも国を守る気がないとしたらどうか。勿論、真面目な人間はどこの国でも多少はいるだろう。しかし大多数の中国人はそうではない。彼らの目指すところは金を貯える事であり、そのためには少しでも軍の上部に出世したいと考えている。そのために軍の上官に金を貢ぎ、地位を金で買う輩もいる。そんな考えの連中が戦場に出てまともな戦いが可能なはずがない。しかも解放軍の最高司令官は私利私欲の権化たる習近平なのである。外国との取引で利権を得た習は不正蓄財を進め、今や莫大な富を得ている。政治の中枢にいる目的は自分の私利私欲であることから、そうした内情を知っている解放軍上部の連中が習の命令を素直に聞くであろうか。いざ戦って死ねと命令が出たなら戦場から逃げ出すのではないか。第一、彼らの親たちが死ぬことを許さない。早く逃げろと言い出すに決まっている。大切な一人っ子なのだ。上官が逃げれば下部の兵士の行動は明らかだ。

さらに解放軍の連中でこれまで実戦の場で戦った者たちが一体何人いるか、について考えてみたい。アメリカ軍のように世界に飛び出し、いくつかの戦場で戦ってきた戦士とは違って解放軍の連中は実戦の経験に乏しい。戦場を肌で知っている人間と机上訓練と書物のみの勉学に終始してきた人間とでは比較にならない。おそらく解放軍の連中は米軍とまともに戦えないだろう。今後、解放軍は中国の国軍の名の下で台湾に侵攻する可能性が大きいが、台湾併合の大義さえも多分わかっていない。多分、歴史を独自に勉強した幹部の人間なら大義がないことを知っている。習近平の野心に付き合わされているだけだと考える人間がかなりの数いるのではないか。この点も解放軍がまともに働かないと私が考える理由だ。日米台と欧州連合が加わることになる連合軍を前に解放軍はきっと逃げ出すに違いない。足がすくんで前に踏み出すことさえも出来ないのではないか。

ついでにロシア軍を引き合いに出すと、ロシアはこれまでシリア、チェチェン、グルジア、クリミアと何度となく実戦を戦っている。一応その戦いではプーチンが勝ったの

であるが、そんなロシア軍でも実際にウクライナで戦ってみるとウクライナを甘く見たせいか、戦略上の齟齬があったのか、当初において大した戦績を上げられなかった。まして人民解放軍はロシア軍よりさらに弱体と考えるのが妥当だ。解放軍が台湾進攻に命を賭けられないことで、中国人民は習近平の野望が崩れることをいずれ知る。中国共産党が戦わずして台湾併合を目論んでいるのは、勿論、戦力温存のためもあるが、実戦になると軍の脆さを露呈するのが怖いためである。

四．中国人のメンツとは何か

一九八〇年代のことだ。そのころ毎年、東京大学では外国人留学生を対象に学長が主催して年一回の忘年会を行っていた。留学生は多様で欧米のほかにアジア系として中国も台湾もベトナムもフィリピンなどの学生もいた。あるいはアフリカ系の学生もいたであろう。彼らはたいてい裕福な家族の子弟で、当時まだ世界の一般家庭では誰でもが外国留学が可能な状況ではなかった。

さて、その忘年会だが、開催場所は椿山荘と決まっていた。立食パーティーだったが、提供される料理は和洋すべて一流のシェフによる豪華版だった。その出来事はある台湾人留学生が目撃したものである。その人は驚き唖然としたという。というのも学長が留学生たちの努力を労い、型どおりではあったが、夢と希望を彼らに託す励ましの言葉を述べている最中のことだった。話はまだ佳境に入ったばかりで、終わってはなかった。それにも関わらず、立食の皿を手に動き出した一団があった。一団は我先に料理を取り始めたのだ。学長の話に聞く耳を持たず、ただ黙々と料理を取り始めたのである。これほど学長に失礼なことはない。それは競争だった。一刻も早く皿一杯に料理を取り、食べたい一心に見えた。

目撃した台湾人の彼はその動きをただ浅ましいと感じ目を背けた。そして一団はガツガツと食べ始めたのである。学長の話しはまだ終わっていなかったが、学長もその動きに気づき、話を途中で終了せざるを得なかった。そしてさらに始末に負えないことは彼らの去った後だ。食べ散らかし、食べ残しは床にも落ちていたというのだ。

果たして、その一団とはどういう集団だったか。中国人留学生たちだった。そして彼らの身分は殆どすべてと言っ

ていい、中国共産党幹部の子弟たちだったのだ。中国は当時から一党独裁国家で当時約一〇億人を仕切っていたのは共産党幹部だった。ということは、いずれこの留学生たちが将来の中国をリードすることになる。そういう連中だったのだ。それからすでに三〇数年が経過しており、いまは党の要職を占めていると思われる。これによって、世界に迷惑をかけている今の中国の状況は成り行きとして当然である。

そこで、習近平を始め中国共産党がよく気にするメンツについて考えてみる。メンツとは何か。メンツとは、それを裏付ける誇りが必要だ。誰に見られても恥ずかしくない、後ろ指など指されることはない日常の行動における確固たる誇りだ。外国が中国に対し失礼なこと、実は失礼でも何でもないのだが、少し批判めいた態度を取ると途端にメンツを汚されたと咬みついてくる。ならば、そう言われないように自分たちも内面、外面について誇れる態度を示さねばならないのにそうしない。この臆面のない厚顔さ。国のトップから末端の一般人民に至るまで矜持とは無関係な生き方をしている。

彼ら中国人の主眼は目先の利益の追求であり、際限のない欲である。トップの習近平からして生き方に矜持が無く、また国際法を平気で蹂躙するような人間であるから国民全体が他人の利益に無関心になるのは無理もない。

五．中華思想のバカさ加減

中華思想。中華民族が世界で一番優秀な民族であり、当然、中国が世界の支配者であるという実に馬鹿げた思想。理屈も何もあったものではない。勝手に思い込んだ幻想である。中国を囲む東西南北は、東夷・西戎・南蛮・北狄と呼び、一段と劣った国々と信じ込んでおり、そういう国々は中国に従うのが当たり前で、いずれ世界は中国によって統一され一体化する。かつて朝鮮を始め東南アジア等の周辺国は定期的に貢物をしなければならなかった。その返礼として中国から贈り物を賜った（冊封体制）。その規則に従わなければ、攻め滅ぼされても文句を言えない。日本は東夷、東の外れに位置する野蛮な国と定義されており、下に見られていた。中国人にとって、日本はその程度の認識でしかなかった。中国が望めば黙って領土を差し出すことくらいは当然である、とまで考えている。だから「お前の

ものはオレのもの。オレのものはオレのもの」ということになる。

この中華思想を支えてきたものが儒教である。孔子の考えをまとめたものが論語であるが、そこに次の一節がある。ある県の長官が「私の村の直躬という正直者がおりまして、父親が羊を盗んだことを知って、子どもなのに訴え出ました」と言ったところ、孔子は「私の村で正直者とはこれとは違います。父は子のために罪を隠して庇い、子は父のために罪を隠して庇うものなのです。この罪を隠すことのなかにこそ、正直の精神があるのです」と諭した。実は孔子以前から祖先崇拝の精神は中国で強く伝えられ、その家族愛や信義などが「論語」としてまとめられた。これが儒教の根本精神であり、「公」よりも「私」などの家族愛が重んじられる価値観へとつながっていったのである。だから中国人に公共の精神は極めて薄く、自分や自分の家族・一族さえ栄えればそれでいいのである。中国人には国を守る精神が乏しいから、いざ戦争になったとき習近平の中国共産党のために戦う一般国民は勿論、人民解放軍の中でさえ極めて少ないのではないか。

さらに儒教は隋から始まった官吏登用試験の「科挙」の必須の問題となって中国人の精神に深く宿るようになった。儒教を学ばなければ高級官吏にはなれない。儒教は発展し中国人に深く根を下ろした。こうして儒教の精神によって中国は世界の中で特異の価値観を持ち、国際社会で孤立し、国際法を無視するような傍若無人の国になった。すべて自分の国が正しいし、すべて自分のものにする権利があると考えているから、何でも自分の都合のいいように考え、正当化する理屈を作り上げる。そしてそれを国民の大部分が支持する。幼少時から自分たちは選ばれた民族であり、国家であるから他国の所有物を自分たちのものにするのは当然の権利であると信じて疑わない。実にバカなことだ。そんなことは日本やアメリカの小さな子どもでも理解できる。が、中国人にはわからない。本気で中華思想を信じているから始末に負えない。

台湾はもともと中国の領土だったと叫んでいるが、中国の領土であったことなど過去の歴史で一度もない。沖縄の尖閣諸島は天然資源が海底に眠っているとわかってから、自国領土と叫び始めたし、今では沖縄まで中国領土だと言い始めている。チベットは独立国だったが、中華人民共和国が国の成立を宣言してすぐに人民解放軍が侵攻して自

国領土に編入してしまった。東トルキスタンと呼ばれていた国も占領されて今や新疆ウイグル自治区と呼ばれる土地になってしまった。そしてそこに暮らしていたウイグル人は完全に自由を奪われ、半奴隷生活を余儀なくされている。南シナ海のあちらこちらを勝手に埋め立てて中国軍の戦闘機発着のための人工島にしてしまった。やりたい放題なのだ。黙って見ていたアメリカを始め各国が情けない。とくにアメリカで言えばオバマだ。平和主義のオバマは中国にやられ放題だった。オバマのノーベル平和賞はまやかしだ。

とにかく中国と言う国は何でもありで、すべて自分たちの都合のいいように世論を形成し、相手国が黙っていれば認めたものとみなし自分の国の一部にしてしまう。嘘と欺瞞で満ち溢れ、国際ルールはまったく無視する。こんな国とまともに付き合っては国益を損じるばかりだ。国際連合の常任理事国になる理由もなかった。日本と戦ったのは当時の中華民国だった。つまりそれは蒋介石の国民党であって、共産党ではなかった。ところが共産党の建国した中国が国連の常任理事国になったためにおかしなことになった。ロシアとともに権力を振るっているから、まとまる案件も全くまとまらなくなった。国連が機能しなくなった。こんなことなら、民主主義陣営だけで国連に代わる機構を作り上げるべきだ。貧しくとも、人権を奪われた国になるよりはましだ。奴隷化が今後の懸念材料だ。

しかし日本は情けないことにまだこんなヤクザ国家と付き合おうとしている。経済が国防よりもそんなに重要なのか。国を侵される危機に直面しても変わろうとしない。おとなしすぎる国・日本。お人好しの国・日本。中国を性善説でしか見ることの出来ない日本。もう外交方針を大きく転換する時が来たのではないか。早く憲法を改正して中国などの無謀にして野蛮な国から舐められないように戦力を大幅拡張して国防にもっと力を注ぐべきだ。中国のような国に対峙するときは嘗められてはいけない。そのためにも抑止力としての軍事力を強化しなければならない。こんなことは素人の私が指摘するまでもなく政府与党の自民党が率先して実行するべき課題だ。

（ついでの論考）

中華思想を考えたついでに、このバカな思想（思想と言えるほどの高尚なものではない）に多大な影響を受けた韓

国（昔の朝鮮）についても述べてみる。

朝鮮は中国中心部から東であるから東夷ということになる。いわば中国から見れば一段劣っている民族である。朝鮮（韓国）はそれに対して何ら文句を言わない。中国には全く頭が上がらないし、従順である。大国には巻かれよ、というのが彼ら特有の事大主義と言っていい。しかし日本に対する態度はどうか。これがまた一八〇度違うのである。日本は韓国よりさらに東に位置するからより劣った民族だと彼らは考える。そこには何の根拠もない。もともと中華思想そのものが荒唐無稽なもの。それを信じているバカな民族として割り切ればまあ仕方ない。腹の底で何を考えようが、内心の自由だからどうでもいい。しかし韓国の日本に対する劣等感なり嫉妬から国際社会で余計な行動に走っているから許せない。かつて韓国は日本の植民地になったことがあった（韓国併合一九一〇年）。そのため大東亜戦争時、韓国人は日の丸の旗を背負って戦場に出た。日本は彼らを公平に扱い、同じ日本人兵士として遇した。そして植民地時代には韓国のインフラ、鉄道や道路、電力設備を整備した。また文盲を無くすべく教育にも力を注いだ。戦後は多額の資金援助によって漢江（はんがん）の奇跡と呼ばれた経済復興まで成し遂げた。いまある韓国はまさに日本のお陰なのだ。ところが、韓国のこれまで取ってきた日本に対する態度は感謝どころか日本を恨み、日本を国際社会から引きずり降ろそうとする動きばかりだった。朴槿恵の告げ口外交もそのひとつ。そして事実無根の従軍慰安婦問題と徴用工問題。

これは何故か。中華思想というバカな思想の影響なのだ。日本は韓国よりも東夷なのだ。だから韓国よりも優位なポジションにいてはいけない。ここではっきり言おう。日本が韓国よりあらゆる点で劣位であったことは一度もない。アジアで一番早くオリンピックを開催したのも日本。それで昭和三九年の東京オリンピックについで一九八八年に名古屋で開催すべく手を上げていた時、急遽立候補の意思表示をしたのが韓国だった。自国より劣っている二流国の日本が、自国がまだ一度もオリンピックを開催していないのに二度もやるとは絶対に許せない。急に割り込んできて多額の賄賂を使い、成し遂げたのが一九八八年のソウルオリンピックだった。二〇〇二年のＦＩＦＡワールドカップもそうだった。当初日本の単独開催だったものが、またしても嫉妬から急に割り込んできて二国共同開催に持ち込

んだのである。すべて嫉妬。日本が韓国よりも優れていては絶対にいけないのである。どんな手を使っても日本の思い通りにさせない。これが韓国という国なのだ。もうひとつ大きな嫉妬材料がある。ノーベル賞受賞者の問題だ。日本のノーベル賞受賞者は現在二八人いる。一方、韓国はノーベル平和賞受賞の金大中ひとり。受賞理由は初めて南北首脳会談が行われたことに対するものだったが、この会談にしても韓国側から多額の送金が北に対して行われたがために実現したものなのだ。ともかく韓国は自国より劣っている日本から二八人もの受章者が出ていることに我慢がならない。何とも哀れな国なのだ。韓国がノーベル賞を受賞できない理由ははっきりしている。目先の利益に捉われているからだ。ノーベル賞は一朝一夕にその研究成果が頂点に達することはない。長い時間をかけて積み上げた結果なのだ。それが目先の金に目がくらんでいるから基礎研究がおろそかになる。自分のため、自分の一族のためにしか研究の目的がないから頂点に立てない。日本の多くの研究者が利他の精神、公共の精神でおこなっていることと真逆なのだ。

こういう哀れな国にしたのは中華思想であり、それを支えたのが儒教なのである。儒教こそが中国と韓国を哀れな情けない国に仕立て上げたと言っていいのではないか。

六．免税店制度は改正になるか

留学生を含む三人の中国人が、日本各地の免税店で二億五千万円もの買い物をした事実が明らかになった。通常免税となるのは旅行で日本製品を購入し本国に持ち帰ることが前提になる。ところが、三人が買った物を中国に送った形跡はなかった。日本国内で同じ中国人の業者に転売したのである。業者は通常より消費税分だけ安く仕入れることができるから仮に五％利益を乗せただけでもかなりの儲けになる。

こうした抜け道は売った店で消費税を免じているから起こることなのだが、これが諸外国では税を免じることなく店で販売し、帰国時に空港でパスポートを提示することで消費税分を返還してもらうシステムになっている。したがって不正はできない。

今回のケースは財務省にとって大きな税の取漏れとなってしまう。中国人三人は法律違反ではないが、うまく法

の抜け穴を利用した。このため税の取漏れに異常なまでに神経を尖らしている財務省は早速免税制度の改正に動いたようだ。諸外国と同様の方法に切り替えるという。これによって中国人の爆買いが一気になくなっていくかもしれない。つまり爆買いも転売目当てだったのである。これまでも小型トラックの荷台いっぱいに医薬品を積み、中国本国の業者なのか日本国内の中国人業者なのかに転売していたのだ。これに日本の当局がやっと気づいた。

ここで、中国元の海外流出に話を変える。前述の中国人三人は中国元の海外流出に関わっている。どういうことかというと、三人はまず買い物をクレジットカードで行った。ということはその費用は本国では中国元で支払われるから、勿論現金は日本人業者の手に渡る。が、品物を日本国内で転売すると三人には日本円が手に入る。つまり中国元が日本円に変わったということである。留学生の身分に億単位の莫大な資金力などないので、これには大きな資本がバックにあると考えていい。つまり合法的に中国元を日本円に変えていることになる。中国元の海外流出である。

その目的とするところは中国元が今後大きく減価することがわかっているからである。今のうちに外貨に換えておこうとするひとつの現れなのだ。ムーディーズの中国に対する格付けが下がった。この傾向は今後ますます強まるだろう。ある中国通の情報によれば中国の資金は毎月五〇〇億ドル、日本円にして七兆円強が海外流出しているとのことだ。中国政府は元の海外持ち出しを法律で禁止しているが、こうした抜け道を使って毎月間断なく国から国富が失われている。すると愈々中国元の減価が進み、元安になっていく。台湾の戦略作家・范疇さんによれば一ドルが八元を境に危険水域に入っていくとのことであった。中国の経済が崩壊するとその悪影響は世界経済に波及する。一説によればリーマンショックの比ではないらしい。勿論、こちらの影響の方が大きい。すると習近平はボロボロの経済を打開するために何をやるか、それが予断を許さない。

七．アメリカへの従属化が確定した時

一九八五年（昭和六〇年）八月一二日午後六時五六分、東京発大阪行き日航一二三便が群馬県御巣鷹山山中に墜落し、乗員乗客五二〇名が命を落とすという大惨事が起きた。世界最大の航空機事故として歴史に残っている。この

事故を境に日本のアメリカに対する従属化、属国化が確定したと言える。その理由を以下に述べる。

昭和六〇年といえば、戦後四〇年を経過して日本国民の日本軍部に対する恨みや偏見はかなり薄まったと一般に考えられているが、実はそうではなかった。自衛隊はいまだに軍隊として認知されておらず、平和を乱す暴力装置であり厄介者だった。

その存在が徐々に認められ始めたのは一九九五年（平成七年）一月一七日に神戸で発生した阪神淡路大震災だった。自衛隊はけが人の救出や行方不明者の捜索に大いに力を発揮した。それによって自衛隊は日本国にとって無くてはならない存在へとようやく変貌したのである。さらに今では中国や北朝鮮そしてロシアの軍事的脅威に対抗すべく憲法を改正して正式な軍隊に昇格させるべきとの議論も出てきた。戦争を推奨すべく出てきた議論では決してない。日本を自分たちの力で守るという強い意志である。戦後八〇年近くを経てやっとここにたどり着いた感がある。

日航機が墜落した当時、自衛隊は国民が認める地位にはなかった。日航機墜落の真の原因がボーイング機尾翼の不具合ではなく、恐るべきことに自衛隊機の誤射であると判明したならば、世論によって自衛隊は解体させられたはずだ。日本人は極端から極端に走りやすい傾向がある。政府が苦労してここまで国を守る軍隊として自衛隊を育ててきたが、それが水泡に帰す。世界中を探しても主権国家において自国を守る軍隊がない国はない。しかし日本人ならそこまでやる。それほど大東亜戦争の傷跡は国民に深かったのだ。

墜落したボーイング社の機体には原因となるべき問題がなかった。それは後の調査で次第に明らかになっている。尾翼の一点にのみ何らかの強い圧力がかかり、結果、尾翼が吹き飛んだ。機長は一二三便が制御不能と管制官に伝えてきたと言うが、実は制御可能で米軍の横田基地に着陸すべく飛行していたのだ。ところが、何らかの理由で着陸できなかった。ボーイング七三七が無事に着陸すれば、機体の解析や乗員の証言で自衛隊の誤射が判明し自衛隊は危険に晒されたからではなかったか。政権の座にあった中曽根首相は自衛隊を守るため、言い換えれば国を守るために日航機を御巣鷹山に故意に墜落させたことになる。

この事実をアメリカは知っていた。その証拠に日本政府に圧力をかけてきた。事故機として不名誉を擦り付けたボ

ーイング社から大量の機体を購入させたのである。本来なら事故機製造の会社は見向きもされないのだが、そうではなかった。その後アメリカは次々とアメリカ経済に有利になるよう様々な圧力をかけてきた。プラザ合意で急激な円高になるよう強制したこと。日米半導体協議、日米建設協議、日米構造協議。さらには大店法でアメリカ企業の進出を容易にさせたこと。日本は弱みを握られたかのように次々妥協せざるを得なかった。つまりは明確な従属化、属国化の始まりであった。日航機墜落は日本の独立を妨げるキッカケになったと言える。

日航機墜落が自衛隊の誤射であることを公言したのは、経済評論家の森永卓郎氏だ。この公表により右翼から命を狙われかねない。つまり氏は命を賭けたのだ。いつ死んでもいいと考えたからこの行動に出たのかもしれない。ところでこの事実をどこで探り当てたのか、わからない。状況証拠はいくつもあるのだが、誤射の証拠はどこにあるのか。そのカギはボイスレコーダとフライトレコーダの公開と相模湾に沈む尾翼の解析に待つしかない。四〇年間、尾翼の回収もレコーダの公開もない、そのことも奇妙である。何かあると勘ぐられても仕方ないのではないか。

八．天才ＡＩ設計者の死

中国人民解放軍に関係する天才的ＡＩ設計者二人が二〇二三年に急死した。ひとりは七月一日、もうひとりは一二月一五日のことだった。七月に亡くなったのは軍の大佐である馮暘赫（ひょうようかく）。もうひとりは軍と連携してシステムを開発していた民間人の湯暁鴎（とうぎょうかく）だった。二人とも非常に有能なＡＩ設計者で、その死は人民解放軍にとってかなりの痛手になった。軍の戦略は今やＡＩがかなりの部分を握っていると言っても過言ではないのだ。したがって二人の死は裏返せば台湾や日本にとって戦死者を少なく出来るハッピーなことだった。

馮暘赫はその日、勤務終了後の午前二時三五分、車を運転中、トラックに追突され即死した。三八歳だった。一方、湯暁鴎はこれまで病気などしたことのない健康体だったが、朝起きてみるとすでに死んでいたというのだ。五五歳だった。

恐らく二人とも暗殺だろう。それでは一体誰の犯行なのか。可能性をつぶしてみる。ひとつの可能性はこれから戦争が想定される台湾だ。しかし民主主義国の台湾がこんな

卑劣なことをするだろうか。台湾なら正々堂々と敵を迎え撃つ態度を取る。少なくとも私はそう思う。アメリカはどうだ。何をするか判断のつかない前大統領のトランプなら理解できないこともない。しかしバイデンにはそんな勇気はない。もしも犯行が露呈したら習近平を激怒させ、大義名分を与え、それがきっかけで戦争になってしまうかもしれない。そうなると米国民に申し訳が立たない。したがってこれも違うと思う。習近平では勿論ない。その証拠に政権中枢の命令で馮暘赫の葬儀は副閣僚と同様の処遇で執り行われた。また湯暁鴎の葬儀も政権ナンバーツーの首相李強や副総理トップの丁薛祥（ていせっしょう）が花輪を贈るという厚遇だった。だから習近平一派の仕業ではないと考えられる。残る可能性は人民解放軍の中で習近平に反対する勢力だ。これについては、十分に可能性はある。第一に軍大佐の行動パターンを知悉しているのは内部の人間以外に通常考えられない。

それでは、何故、人民解放軍の反習近平勢力がこうした行動を取ったのか。考えられることがひとつある。軍の多くが戦争を嫌がっているということだ。軍の多くの人間は自分の出世のために入隊する。そこで金を大いに貯めるのだ。そしてさらに軍内部で出世するためには多額の賄賂を使う。決して国の為に自分の命を捧げているわけではない。利己的な理由だけがまかり通っている。したがって彼らは絶対に死にたくないのである。ましてやりたい放題の習近平に忠誠を誓い、習近平のために死ぬことを考えている軍人など殆どいない。

最近は二〇一五年に創設したばかりのロケット軍が習近平に謀反を疑われ、トップ二人が更迭され、幹部一二人が粛清された。そんな状態で戦争に突入する気などさらさらない。つまり軍の弱体化をさせ戦争を回避したいのだ。これは台湾や日本にとって朗報と言える。

●その他

一．新宿タワーマンション殺人事件

令和六年五月八日午前三時頃のことだった。新宿のあるタワーマンション一階のコンビニから買い物を終えて出てきた若い女性が待ち伏せをしていた初老の男に追いかけられ、果物ナイフで全身数十個所を刺され、外傷性ショ

ックで死亡した。被害者は平沢俊乃（二五）、加害者は和久井学（五一）。その後の調べでわかったことは、和久井はかつて平沢が経営していたガールズバーの客だった。その店に何度も通ううち、和久井は自分ではどうにもならないほどに平沢が好きになってしまった。平沢は男心をくすぐる、それなりの美人だった。しかし事件後のニュース報道でテレビに映った平沢の顔を見た私は、彼女を美人だとは思ったが、そこに知性を少しも感じなかった。人形のような、作られた美しさであって、所謂人間としての優しさなり深みがまったく感じられなかったのだ。

私は想像する。バーでの平沢の応対が和久井には非常に優しかった。過去に経験のなかったほどの優しさだった。そこでつい誤解した。結婚できる相手が見つかった、と。五一という年齢になるまで独身だった彼は、単に女性に縁がないだけだったのか。それとも何度も嫁選びはしてきたが、その度に失恋の憂き目に遭ったのか、それはわからない。報道によるとその一方、和久井が職に就いている様子がない。無職の男に嫁は来ない。それでも高級車やオートバイを所持していたというから実家は裕福だったのだろう。和久井はそれら愛車を売り、金に替え、平沢に一〇〇〇万円以上の金を貢いだ。

ところが、和久井の父親によれば、金を渡したすぐ後、急に女の態度が冷たくなったという。和久井はそこで騙されていたことに気づいたのではないか。それからは平沢に会う目的が金を返してもらうことに変わった。それが多分執拗だったのだろう。平沢はそれを逆手に取った。ストーカー行為として警察に訴え出たのだ。世間は弱者の立場にいる女性に甘い。それをまともに信じ、裁判所は和久井に平沢への接触を禁止する命令を出した。違反すれば自分が逮捕される。和久井にすれば、自分に対する強烈な背信か、裏切りだった。それは怒りとなり、やがて殺意に変化していったと推察される。男にとって、これと見込んだ女性に冷たくされ、ストーカーの濡れ衣を着せられたとなれば、プライドが傷つき心はズタズタになったに違いない。和久井は逮捕後に証言した。平沢の身体を傷だらけにしてやりたかった、と。彼のこの思いを読み解くと、平沢の女としての魅力を完全に奪い、自分以外の男との恋愛を許さない考えになったのではないか。

平沢は前述のとおり新宿でガールズバーを二五歳という若さで経営していた。人生経験は当然浅かったし、知識

や困難に対処する智恵があったとも思えないから、おそらく経営は困難を極めたに違いない。いつか行き詰まり、資金繰りにも窮した。そんな時に客として現れた和久井は自分に好意を持っているようで格好の金蔓に思えたのだろう。それなら試しに金を無心してみよう。優しくしてやるのだから金を出してもらうのは当然だ、とでも思ったのではないか。和久井は平沢の求めに応じ一千万円、二千万円と渡した。ところが平沢も途中で気づいた。結婚を仄めかしていたから金が結納代わりと和久井が考えるようになってはまずい。自分はまったく和久井と結婚する気などない。目的の金はいただいたし、それなら早めに和久井から離れよう。

おそらく両者の間にはこうした思いの交錯があったに違いない。和久井は初老になった身で二〇代の若い女性と一緒になりたいところに無理があった。勿論、和久井が大金持ちなら当世の欲深い若い女性ならば結婚を考えることもあろう。しかし和久井はそうではなかった。だから和久井は考えが甘いと言わざるを得ない。平沢は金を引っ張ることが目的だから金さえ手に入れれば後は冷たくしてもいいと考えた。

ところが一方の和久井だが、タワーマンションに住む豪勢な暮らしの平沢の資金源は自分の渡した金が一部入っている、と考えた。となるとこの事件の結論は明らかだ。平沢が招いた自らの死は自身の自業自得だった。男の心を持て遊んだ、あまりに身勝手な行動で墓穴を掘ったといえるのではないか。

二．桐島聡の人生を想像する

桐島聡は一九七〇年代の連続企業爆破事件の犯人として全国に指名手配されていた。しかしごく最近になって病に倒れ、救急搬送された際、自分は桐島聡だと名乗った。そしてその後の二〇二四年一月二九日、末期の胃がんのため死亡した。長らく偽名のウチダヒロシを名乗っていたが、最期の死ぬときくらいは本名で死にたいと実名を申し出たということだ。

桐島がどんな人生を歩んだのか、私にはまったくわからない。しかしそれは一般の我々が想像するよりかなり過酷な人生であったことは間違いない。

桐島は一九五四年に生まれた。したがって爆破事件が連

続した七〇年代はまだ二〇代始めの年齢だった。そんな若さで世間がどんな仕組みで動いているか到底理解できるはずもない。彼の考える以上に世間は表裏が絡み合う複雑怪奇な世界、そんな世界をとても二〇代の青年に理解できるはずのものではなかった。それにもかかわらず、恐らく反戦思想が影響したと思われるが反日思想にかぶれ、「東アジア反日武装戦線」などというテロ組織に属して活動した。頭の中は彼なりの正義観で充満していたに違いない。しかし他人を理由なく傷つけることは、どんな正当化も許容できない。信じ込むことの怖さはここにある。大企業は悪の巣窟とでも勘違いしていたのだろう。そこに働く人たちに何の罪もない。

桐島の場合、韓国産業経済研究所の建物を爆破したことで、七四年に指名手配され、以来五〇年間逃亡生活を続けることになった。

その間の桐島の生活だが、想像するにかなり強い人間だったと思われる。しかしそんな人間であっても、独りで生きることは相当に難しい。通常、人は家族、あるいは信のおける友人を心の支えに生きている。心が砕かれる事件に遭遇することや大きな失敗を犯したときなど、それを自分独りだけで耐え抜くことはかなり難しい。一歩間違えれば、精神に異常をきたす事態にもなる。信のおける人々に話を聞いてもらうだけでいい。そうすることで心が晴れることもある。

桐島は当時の仲間とはバラバラになり、それぞれが独りで生きていくしかなかった。だから指名手配を受けてからの彼はずっと孤独を託ってきたと思われる。その後の人生で仲のいい友人が見つかったかもしれない。しかし決して心の中は見せてはいないだろう。見せられるはずもないのだ。単に酒を一緒に飲むだけのその場だけの友人関係だったに違いない。これが寂しくないはずがない。

最大の心理的圧迫は警察による逮捕だった。捕まったら自分の人生は終わるという強迫観念は何事にも勝る心理的重圧となる。こんな人生が楽しいはずもない。ビクビクしながら世間から逃げ回る。この寂しさといったら比較するものがないほどに辛い。

警察ＯＢで現在は犯罪評論家になっている人が、桐島は海外に逃亡したかつての仲間から経済的支援を受けているに違いないと語っていたが、それはないと私は思う。胃がんで入院した時も保険証の提示はなかった。つまり身分

証を提示できないから保険証が作れない。とすると銀行口座も開けない。経済的に支援するためには現金を直接手渡さなければならない。しかしそれは非常に危険であり、第一自分の居場所を常に連絡しておかねばならない。だから経済的にも物理的にも彼は孤独だった。

因みに保険証がないということは、実費で治療費を支払うしかなかった。胃がんについても末期になるまで、多分、自覚症状があっても受診を避けていたのではないか。

桐島は指名手配されてから、ずっと偽名で逃亡を続けてきた。二〇年以上も偽名のまま藤沢市内の建設会社で住み込み作業員として働いていたらしい。生活費はそこで得たと思われる。よく正体を見破られなかったものだ。だから死ぬ寸前になって、死ぬ時くらいは本名で死にたいと思うのは当然のことと思われる。裸になってすべてを語り、楽になりたいしと思った瞬間が必ずあったに違いない。

あるいは、もう少し穿って考えてみると本名を名乗ったのは桐島の勝利宣言であったかもしれない。つまり警察の手を潜り抜け、死ぬまで逃げおおせたという、警察関係者を見下ろす思いである。

桐島は死を覚悟した時から絶望的な後悔を何度か自分の胸の内に繰り返した。実際、警察の事情聴取に対し、自分は人生を後悔していると語った。不幸の極みとしか言いようがない。次の人生があるとするなら、その時はまともな人生を送ってほしいと思う。

三、工藤会トップの死刑が減刑に

令和六年三月一二日の福岡高裁の判決で特定危険指定暴力団工藤会のトップ・野村悟の一審死刑が減刑され無期懲役となった。元漁協組合長射殺事件について、関りがなかったとしてこの件について無罪、その他三件の事件で無期懲役とした。だが、この福岡高裁の判断は正しかったか、私には大いに疑問が残る。

ヤクザの組織的犯罪にトップだけが関わらないということはあるのか。上意下達を旨とする暴力団特有の組織性を逸脱し勝手に下の者が動いたというのは現実問題としてあるのか。一審判決も一般市民や工藤会下部の者たちの命がけの証言を積み上げて、司法が野村を追い詰めたのではなかったのか。始めからこうした事件に証拠は乏しい。実行犯が口を噤んで話さないからだ。一審の裁判長も推論

で判決を出さざるを得なかった。そうしなければ永久にトップが裁かれることはない。

野村は一審で死刑判決を出した裁判長に対し「あんた、生涯後悔するぞ」と脅しの捨て台詞を放って退席した。二審高裁の市川太志裁判長はこの光景に恐れをなしたのではないか。

確かに裁判長の職務は重く辛い。その判断によって人の人生が決まる。命をも奪う。しかし裁判官になるときにそうした覚悟を持って任官されたのではなかったか。人を殺し、人を傷つけても証言がなければすべて許されるのでは市民は安心して暮らせない。それに歯止めをかけるのが警察であり検察などの司法ではないのか。私は一審の裁判長は市民を守り抜く勇気があり、二審の市川裁判長にはその勇気がなかったと思う。

一方、判決を下された野村という男、凶暴性のある工藤会という組のトップにあって、これまで何度、犯罪行為を組の手下に命じてきたことか。福岡市民に恐怖感を植え付け、福岡を我が物顔に牛耳ってきた男。しかし私は野村に真の男気を感じない。それというのも人を簡単に殺傷する命令を下せる男はそれなりに自分の死についても覚悟していなければならないからだ。あるいは義のためにはいつでも他人の身代わりとなる義侠心がなければヤクザのトップなんて務まらない。それなのに、この二審判決が出て、死刑が回避されると天井を仰ぎ安堵の表情を浮かべたという。そしてさらに市川裁判長に深く頭を下げた。何という情けない男であることか。命が惜しいのだ。したがってこの男には死に敢然と立ち向かう勇気はないと見た。そうしてみると現代のヤクザも司法を預かる裁判官も昔のように骨のある筋金入りの人間がいなくなった。高倉健の映画の世界ではないが、ヤクザ同士の死の抗争が激しかった時代の組幹部、トップの気概は完全に失われた。やはり平和が続いたツケで死を恐れるという情けない状況が良くも悪くもいまここにある、ということだろう。

（了）

この前・この間 ―第４回―

いんば華子

【前回までのあらすじ】（第１５号掲載）

岩井翼は大学卒業後カフェ事業に失敗し、借金を抱えて地元に帰ってきた。実家の『中華料理　四川』で働きながら、味気のない日々を過ごしている。ある日中学時代の担任であった佐伯先生が亡くなり、同級生の五十嵐紅美、佐伯先生と同僚だった鈴木優弥と通夜に向かう。すると会場で紅美は「伊藤奏太を見た」と言い張る。伊藤は中学時代いじめられていた。噂によると現在行方不明届が出されているという。

しばらくして『四川』で、佐伯先生が顧問をしていたバスケ部の宴会が開かれた。優弥をはじめ関係者が集まり、当時の話や近況を報告し合った。

宴会の片付けをしていた翼が店の裏に出ると、暗闇の中に伊藤が倒れているのを発見した。翼は誰にも言わず、店の厨房に引き入れた。一通り翼の世話になった後も帰る気配はなく、翼も離れで一緒に生活することを容認する形となった。

「で、今日は犬の散歩すればいい？」
伊藤は、首周りのたるんだ俺のお古のパジャマを着たまま聞いてきた。首筋を掻きながらずり落ちたズボンを引き上げる。確かゴムが緩んで、紐を結んで腰に引っかけて穿いていたやつだ。
「母さんがパートに出たら家空くから、その間にやっといて。あと、シャワー浴びるのもその時間で」
「うん。ご飯は？」
「後で適当に持ってくる。朝飯は、押し入れのパンまだあっただろう」
「いや、犬のなんだけど」
「犬のも同じ押し入れの中に入ってる。まずい、親父がエンジンかけてるから行くからな」
伊藤が離れで暮らし始めて、1カ月がたった。風呂に連れて行った日、頭の中に浮かんだ提案を我慢することができなかった。
あの日、ごみと埃を被ったような男と中華料理店の油にまみれた男二人の車内は、行きとは正反対のフローラルな香りで満たされていた。俺は伊藤に行先も告げぬまま来た道を走り、自宅へと向かっていた。
「どこまで送ってく？」
念のため聞いてみたが、後部座席からは何の反応もない。
「…行くところないなら、しばらく家に来るか？　俺離れの方に部屋あるんだけど、まあ、プレハブ小屋みたいなやつだけど、いろいろあるからさ。ゲームとか漫画とか」
誘い方中学生かよと自身で突っ込みながらも、他に言葉が出てこなかった。行方不明者届け出されているとか、家はどうなんだ？　とか聞いたら、十中八九逃げられてしまう。ここは、無害な昔の同級生、助けてくれる優しい同級生で行こうと考えた。その結果が中学生の放課後遊びに来ないか？レベルの誘い文句だ。その離れも、小学生から使っているから、結局遊び場の延長なのだが。
「……」
「なあ、ご不満でもありますか～」

伊藤からの反応はなかった。どうせ借金抱えた貧乏は、最新機種は持ってないよ。すいませんね。遊びに行ってもつまらない人の家って昔からあるもんな。声には出さずも不貞腐れてみる。

「俺、ゲームしないから。一緒にやる人いないし」

キャッチボールが始まる。この機会を逃がすわけにはいかない。

「それが、いるんだな。コントローラー二つあるから。古いけど。てか、ゲームは別に一人でもできるから。ネット対戦とかもあるし」

「…知らない」

「うん。そっか」

会話はすぐに途切れて沈黙に戻る。そっけない返事に明らかな苛立ちはないが、ご機嫌斜めモードだ。家に来ることは否定していない。自宅に着くと車庫に止め、すぐ隣にある離れのドアを開けて伊藤を中に入れた。母屋の方は、玄関の外灯も消されて、家ごと眠っているように静かだ。

離れの部屋の電気をつけた時、あらためて長さを持て余している伊藤の髪が目に入った。散髪しようと銭湯で話したことを思い出したが、散髪用のはさみやバリカンは母屋の方にある。床屋の真似は明日以降にするとして、押し入れから布団を取り出した。

「たまに友達とか従兄来た時に出してるから、そのまま布団使えると思うけど大丈夫？」

布団を整えてやると、伊藤はすぐに横になった。店の裏に来た時の様子から、しばらく落ち着いた場所では寝ていなそうだ。近くにはそうそう安く泊まれる施設もないので、どこかの納屋や神社で雨風をしのいでいたのだろう。安眠の誘惑に耐えられず、すぐに寝息を立て始めた。

「明日、定休日だからな。あー飯だけはなんとかしなきゃな」

店にいるときは勝手に賄いを作って食べている。休みの日は両親と一緒に母の作ったごはんを母屋で食べるのが通例だ。とっくの昔に成人した息子の休日の過ごし方について干渉するような親ではない。しかし、ごはんのいるいらないを

はっきりしておかないと、離れのドアをドンドンと叩かれて、伊藤がいることがばれてしまう可能性もある。

店の物は持ち出すことができたとしても、どこで食べるか、伊藤の食い扶持を何とかしてやらなきゃいけないとは思った。

宴会後さらに人の面倒を見るのは、随分と疲れるようだ。そのまま電気を消して、とりあえず身体の方を休めることにした。

離れは伊藤を隠すのに便利だった。バレた時の言い訳をいくつか考えてはいたが、伊藤は、それは見事に存在を隠し通していた。定休日は遊びに行くと言って、外に出るか店によって伊藤が食事をするタイミングを作った。食材管理は俺の担当だから、多少の誤魔化しがきいた。その代わり地元の人間に見つからないようかなり気を使った。市内のイオンに伊藤を連れては行けないし、少し遠出をする必要があった。時間も手間も金もかかるが、俺は帰れとは言わなかった。伊藤はいつでも出て行って三十分くらい歩けば実家には帰れるのに、家に帰るとは言わなかった。いつでも俺の言うとおり隠れて、忍者のごとく犬の散歩をこなし（実際、息子さん以外の人がご自宅のワンちゃんを散歩していたなどの噂は立たなかった）、家族の目を盗んでシャワーを浴びていた。図々しい態度をとることはなく、おとなしく忠実な室内犬のようだった。この間も、警察は行方不明者として伊藤を探して、家族は心配しているんだろうけれど、世間に対する罪悪感は日に日に薄れていった。俺の生活は、伊藤がいるのが当たり前になっていった。

九月半ばに入り、暑さも少し和らいできたころ、優弥が一人でやってきた。

「まだ大丈夫か？」

すでにファミリー層がいなくなった午後九時前、明日の仕込みを俺に預けた親父は、野球中継があるとかで先に戻っていた。同級生二人でゆっくりとしたいが、夕食を食べさせるため伊藤を呼び寄せていた。暗闇の田んぼ道で親父が使わな

い道を指定して歩くように伝えてあった。突然の訪問を少し厄介に感じた。伊藤には常に客席からは見えないところで小さくなっているよう言っていたので、静かに優弥との会話を聞いている。優弥は一度家に帰ってから歩いてきたようで、車のヘッドライトが店内に入ることはなくエンジン音も聞こえなかった。これは飲むつもりだなという予想は当たり、さっそく生中ジョッキと頼んできた。

「飯は？　まだだろ？」

「うん。どうしようかな…。なんか賄い作ってた？　もうお客さんいないのに」

「自分の夕飯分。麻婆豆腐の豆腐多め、チンゲン菜追加その他食材を加えたやつ」

「お、それで！　なんか豪華じゃん」

「いや、廃棄ぎりぎりだから悪いよ」

「全然」

ビールサーバの横で小さくなっていた伊藤は、口パクで俺のは？　と聞いてきた。

「そっか。味はちゃんと作るから待ってろよ」

ビールを出しつつ、優弥に言う形で答えた。

豆腐の水分で味が薄くならないよう調整しながら、二人分には少し多い麻婆豆腐を作り、麻婆丼にして優弥に出す。

「一緒に食べるには…まだだめか？」

「や、こっちにしておく」

キッチン下からミックスナッツを取り出して、適当に小皿に盛る。ビールを注いだジョッキを持って隣に腰かけた。

「そういえばこの前の練習試合とかどうだった？」

「手ごたえはあったけど、まだだな。昔みたいに土日も平日も部活できるわけじゃないし、まあ、変わったよな。地域のクラブもあるらしいし。あ、俺らの卒業後にできたやつね」

「お疲れさん」

カツンとジョッキをぶつける。

「じゃあ今日は監督の一人反省会？」

「そんなもんかな。別に部活に命かけたり四六時中考えているわけじゃないけど、なんかもっとやれることないのかなっ

て思うんだよあ。中学生で、勝ってうれしい気持ちとか、達成感とか。受験や勉強でもいいんだけど、そこは俺たちと一緒でさ、いろんなやつがいるから」

佐伯先生のこともあって、考えこんでいるのかもしれない。優弥はスプーンでゆっくりと麻婆丼を口に運んだ。

「俺が言うのもおこがましいことだけど、あまり気負うなよ。先生は、同僚で過去に担任。俺と優弥では、そのショックの大きさが違うんだから」

「うん。彩夏…嫁にもそう気使われたよ。目標や手本に、だいぶ影響受けていたんだな。佐伯先生がいなくなった部活の子も、先生が担任していたクラスも、意気消沈したままでさ。部活は俺が支えるしかないし、クラスの方も副担任だった先生が支えてる」

「じゃあ尚更、倒れられたら困るんじゃないか。悲しむ時間も大事だけど、生徒も、家族も優弥のことが心配になる」

「…ありがとな。こういう風に弱音吐きに来れるの、翼のところくらいしかないから」

「気にすんな。三百六十五日先生でいられるような人はいないさ」

軽く肩を押すと、風にしなる枝のように緩く翼の身体が揺れた。

「こんな時に、なんだけどさ、俺、…父親になるんだ」

うつむいたまま、優弥はスプーンを丼の中に置いた。

「よかったじゃん！　おめでとう。言ってくれれば、こんなありあわせの麻婆丼じゃなくて、この前のみんな集めたのに。さすがに三十路過ぎれば、みんな結婚や家族できるよな。まあ、今はさ、手放しに喜べないかもしれないけど、優弥には本当にうれしいことじゃん。今度彩夏さんも連れて…」

優弥は鼻をすすった。

「俺、父親になんかなれない」

握ったままのスプーンが擦れて、カタカタと音を立てる。

「先生が亡くなったのは、ショックだった。でも、俺がもっと、動揺したのは、俺が親になることだ」

「…それは…」

親になる予定もない人間に、かけられるような言葉は見つからなかった。いくら十分大人になっても、初めてのことに動揺や不安を抱えない人間はいない。先生のこともあって、優弥が弱っているから、余計不安になっているのかもしれない。クラスで目立つ秀才ではないが、職業に教師を選ぶような、真面目で堅実なタイプだ。父親になれないという言葉そのものでなくとも、出産やこれからの生活に期待と不安がある彩夏さんには、言えなかったのだろう。

「とりあえず、今日は何でも話して食べていけ。俺なんかがアドバイスできるようなことないけど、取りあえず食べれば少しは元気出るしさ。無理やり食わす気はないけど」

優弥は中ジョッキに半分以上残ったビールを飲みほして、備え付けのティッシュで鼻をかんだ。

「彩夏から話聞いて、家族に報告したのはもう二か月くらい前だったんだ。すごく嬉しかった。俺にも家族ができるんだって。それから少しして、昔通っていた塾のことを思い出したんだ。十年以上も思い出しもしなかったことなのに」

塾に通っていたころといえば、二十年近く前だろうか。小学校高学年くらいになると、田舎の中学でも塾に通う同級生が増えたことを思い出した。いずれもバスや親の車に乗せられて、最寄り駅の周りにある県内有数の学習塾に、学校の帰りや土曜日に行くようになった。うちは店があるので塾は行かなかったが、さすがに高校受験になると焦って夏期講習を受けたことをうっすらと思い出した。自転車に乗り汗だくになって塾まで通い、身体が芯まで冷えたところで帰る夏だった。部活も違う隣のクラスの女子が数人グループになっていて、他に知った顔もないので挨拶もそこそこに過ごしていた。優弥は、俺が通っていた塾より二駅先の、他市の生徒も集まるところに通っていたはずだ。できの違いってやつなんだろうけど、それが受験ってものだ。

「俺、みんなとは違う塾行ってたから、みんな知らなかったんだ。でも、どこかで、他校の部活の知り合いとかで誰かが聞いてきて、それを知られるのが怖かった。でも、学校じゃない場所で、クラスの自分をやらなくていいことが、気持ち

よかったんだ…」

優弥は、肩を縮こませた。過去を語る姿は、布団の中で丸まっている少年のようだ。優弥が、ただ純粋に親になることが不安でないことは読み取れた。しかし、たった数年ほど通った学習塾でのことに怯える必要があるのだろうか。学習塾での時間なんて、これまでを振り返っても一瞬に近い。記憶の地層の中で埋もれ、より強烈な経験や日々の喧騒の中で、どんどん小さくなっていくはずなのに。

「クラスに落ちこぼれや、揶揄(からか)いのターゲットができるように、塾のクラスにもそういうやつってできるんだよ。塾なんか、成績順に張り出されたり、問題ができないと違うってみんなの前で言われたり。高校受験の時、少しでもいい学校行きたかったから、がんばってはいたんだ。塾での成績は上位クラス。同じ学校の人もいないから、塾のクラスで友達ができて…。一つ下のクラスにいた仲の良かったやつを、自分たちと同じクラスに入れたくて、…今にも下のクラスに落ちそうな子をターゲットにして…居場所をなくしたんだ。酷いだろ。学校ではおとなしくしていて、あの、伊藤がいじめられているのも知っていたけど、みんなが見ていない所ではいじめていた側だ」

優弥はまた鼻をかんだ。

「その子が志望校に受かったとか、誰だったとか、もう名前も覚えていない。でも、あの時俺たちがやったことで、ほんの軽い気持ちでやったことで…。今更、何か変わるわけじゃない。でも、やったことはなくならないんだ」

優弥は赤くなった顔を上げた。唇を噛みしめて、後悔で作られた顔を向けた。

「誰も、中学生の時に自分がやったことを咎める人も、非難する人もいない。人を殺(あや)めたとかではないけれど、もしかすると、俺たちがやったことは、その子の人生を変えるには十分だったかもしれないじゃないか。昔のこと過ぎて、取るに足らない小さなことになっているかもしれない。何の過ちもしない子どもはいないとわかっているけれど、誰も見ていない所で、隠れていたやつが、平気な顔して昔のことなんかな

かったことにして、教師になって子どもに教えているんだ。それでそのまま、親になるんだ。塾のことだんだんと思い出した後、このまま、親にはなれないと思った。本当にこのままでいいのかなって…」

優弥は頭を抱えた。顔が麻婆丼に付きそうになって、どんぶりをずらしながら身体を支えた。

「うん」

直接謝罪する手段があるなら、優弥も少しは楽になるのかもしれない。名前も顔も分からない人のことを考えるやるせなさの方が勝って、優弥の立場にもターゲットになったという塾の子の立場にもなり切れない。昔のことなんて忘れて、今の平穏な幸せに身を委ねきれない優弥もみじめに見えた。もっと大事なことを忘れて、平気な顔をして生きているやつもたくさんいるだろうに。

親になること、一つの命、人生が紡がれることの重大さに、どのくらいの人が気付き、その責任を感じているのだろうか。大人にわからないことが、十代そこらの子どもに、理解は難しいだろう。時と共に、人生の歩みと共に経験するのは、はるかに先のことなのだから。十代前半の少年をした優弥のことを止めるすべも叱るすべもない。子どもができた時行き場のない後悔をするぞと言えたとしても、その頃の彼に、響くかもわからない。

「…食べるよ。元気でそう」

優弥は再びスプーンをつかんだ。嗚咽（おえつ）と一緒に、混ぜこぜの食材を口に運ぶ。

バスケの部活で、最後の地区大会で負けた時以来の優弥の涙だ。あの時一緒に泣いた涙以上の物はないと思ったけれど、大人の流す涙には、鎖のような重さがあった。解放されたくて、苦しんでいる涙だ。

「いつか、子どもや生徒たちに話してみるしかないんじゃないか」

一瞬言わなければよかったと思った。他人の後悔を身内や大勢に告白するなんて、酷な響きを持っている。優弥も驚いて、目を合わせてくる。覚悟を決めて、続けた。

「誰だって、何の後悔もない人はいないのは、わかっていると思う。俺だって、苦しみ方は違うけど、失敗して出戻って、恥ずかしいばかりだし。でも、誰かに話せたとき、きっと自分に区切りがつけられると思うんだ。なんだろう、ダメなやつだと諦めるとか呆れるとも違って、自分はそんなもんなんだって、いい意味の方で」

立ったまま話すのが居たたまれなくなって、隣に腰かけた。ついでにジョッキに残ったビールを飲みほした。俺にも勢いが必要だ。

「親や先生が、失敗を話すって、かっこ悪いし子どもには舐められたり、その、誤解されることがあるかもしれないけど、それを聞いた生徒の中に、俺たちみたいなのが二人くらいはいると思う。先生も一人の人間で、これからも大人になろうとしているんだって、いつかわかる時が来る生徒が。こうやってさ、酒を酌み交わしながら、忘れていたことを思い出したり、もちろん楽しかったことも、まだ区切りをつけられないことも一緒にさ」

抱きついてきた優弥をぎゅっと腕でつかんだ。すぐに離れると、食事の続きを始める。

「まあ、偉そうなこと言える立場じゃないけど。…佐伯先生なら、大人になった俺たちに言うかもな」

そう付け加えて、空になった二つのジョッキにビールを注いだ。

「俺、翼がここで中華作ってて本当に良かったと思ってる。誰にも言えないと思ったこと、言えちゃったし。なんか、翼が先生やってるほうが向いてんじゃないのかってくらい。…ここにいてくれて、本当に良かった」

食べ終わった器をカウンターに置きながら、グーを出してきたので、久しぶりに応える。泥試合の中のゴールが決まったわけではないし、ゴール下からの簡単なシュートすら入らないような毎日だけれど、決死のスリーポイントが決まった。そんな清々しさがあった。

優弥が帰る時、今度は彩夏さんや生まれる子も連れて来いと言って送った。そんな言葉を昔の同級生にかける日が来る

とはと思いながらも、ベタなセリフを言う年齢になってきたのかとただ若いとは言えなくなったことにさみしさを覚えた。

これにて一件落着と行かないのが、今の立場だ。隠れていた場所から客席の方へ、ぬっと細い体が出てくる。

「帰った？　ご飯食べてもいい？」

早速自分の飯の心配かと呆れる。

「なあ、さっきの優弥の話…」

念のため、口外しないように言ったほうがいいだろう。

「…心配しなくていいよ。どうせ話す相手なんかいないから安心しろよ」

そんなの常識だろという薄い反応を返す。どうせ話す相手がいないなんて、冗談半分に言うことはあるけれど、伊藤の場合は本気だ。ある意味、聞かれた相手としては、好都合だった。優弥には悪いが、ここには俺しかいなかったということにする。

食事の時間が遅れて、俺も伊藤も空腹度合が上がっていた。温め直して、それぞれのどんぶりに残りを盛る。優弥に出したよりもちょっと多いくらいだ。開けた瓶ビールは二本目の途中だったので、残りを二人で分けることにした。

厨房の調理台の横で、何度か食事をしているが、今日は珍しく伊藤の方が早く食べ終わっていた。泡の消えたビールをくるくるとまわしながら、伊藤は言った。

「お前ら、いいなあ」

伊藤は、初めて来たときみたいに、少し泣いていた。

「いいなあ」

今度は噛みしめるように、繰り返した。

反応に困って、言葉が出てこなかった。タイミングも逃してしまって、ただ食事を続けた。

『いいなあ』

そんな風に見えるのか？

優弥と自分の立ち場も離れているが、伊藤とはかけ離れすぎていて、どうしてよいのかわからなくなる。しかも、羨ましいと素直に口に出してくる。

「…何が、いいの？」
明らかにタイミングを逸した状態で、やっとのことで聞いてみる。いじめの例として名前まで上がっていたんだぞ？
「話しのできる相手がいることだよ。それに、顔も名前も覚えていないのに、鈴木はちゃんと覚えているじゃん。あの時、塾で何をやったのか。俺は、学校でバケツに入った水をかけられたんだよ。緊張して、顔が赤くなって、その時話していた相手が男だっただけで、ホモだって言われたんだよ。それで、居場所をなくした。今だってそうだけど、人に言い返すのは、得意じゃないんだ」
感情がない奴なんていないし、伊藤だって言われっぱなしやられっぱなしの毎日が苦痛でないわけはなかった。そんな当たり前のことさえ、思考の中から抜け落ちていた。嫌だから学校に来なくなるし、抵抗もしなくなるし、ただ、なにもない空気のようになっていくように見えるだけで、感情がなくなるわけではない。そんな当たり前のことが、優弥の話したいじめには当てはめることができたのに、どうしてか伊藤にははまらない。聞いたとたんに、いきなり口数が多くなったなという驚きの方が大きい。
「おい、いったん落ち着けって。優弥の昔の話聞いて、いろいろ思い出して当てられてるんだって」
俺は伊藤のグラスを取り上げた。
「返せよ。グラス一杯は飲めるんだ！」
「…ちょ、下戸なら先に言えよ」
思い返せば、アルコールを出したのも今回が初めてかもしれない。
「終わりだ終わり！」
グラスに残ったビールをシンクに投げ捨て、お冷を伊藤に持たせた。
「それ飲んだら帰るぞ。頼むから家までは歩いてくれよ」
なんだかんだで、こいつを家に置いている自分もなんだろうな…手間は十分かかるが、自分から辞めようとは相変わらず思わない。案の定予想は的中し、片付けが終わった頃、伊藤は小上がりで伸びていた。あの後も少し泣いたのだろう。

顎の先まで、涙の後が残っていた。
「勘弁してくれよ」
力なく漏れた言葉を、酔っ払いはいびきで返した。置いていくわけにもいかないので、何度か地面やコンクリートに転がしながら、最後は背負って帰路についた。

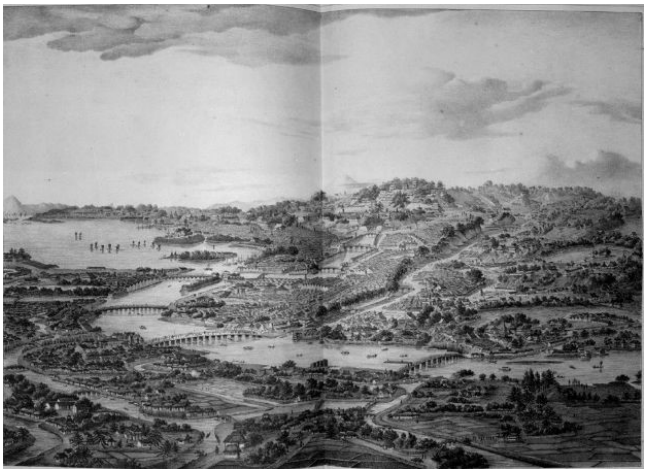
〈以下、次号〉

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

伊能忠敬の化身 ―第三回―

香取 淳



シーボルト著「NIPPON」に掲載された江戸の全景

【前号までのあらすじ】

日本地図の完成を見ることなく息を引き取った伊能忠敬は、家蜘蛛に姿を変えて地図御用所に留まった。それから三年後に待望の地図(伊能図)が完成。将軍家斉(いえなり)に上覧する折に、地図に潜んで入城した忠敬の化身は、幕府の公文書館である紅葉山文庫に住みついた。そこに、異人-高橋作左衛門景保に導かれたシーボルト-が入ってきた。驚いた化身は「これから伊能図はどうなるのであろうか」と強い不安に駆られた。その化身の不安や懸念に応えて、著者は伊能図が辿った波乱の展開を書き綴ることにした。

シーボルトはドイツ人であったが、オランダ国王に乞われて軍の外科少佐に就任。国王から、日本のすべてを調査する特命を与えられて来日する。彼の西洋医術は高く評価され、長崎の市中に鳴滝塾の開設が認め

られた。その塾で弟子や患者たちから情報やコレクションを蒐集してゆくが、長崎だけでは限界がある。

やがて、四年に一度の江戸参府がやってきた。商館長のスチュルレルらと共に長崎を発った彼は、各地の地形や港湾、城郭・産業等を役人の目を盗んで調査。その奇怪な行動に、商館長も批判の目を向け始めた。

一行が江戸に着くと定宿の長崎屋に来客が殺到。親蘭大名の島津重豪(しげひで)ら、蘭方医の桂川甫賢、天文方の高橋景保らである。シーボルトは来客たちに江戸参府後も引き続き江戸に逗留する工作を依頼し、逗留はほぼ確実と知らされた。また、北方領土に詳しい最上徳内と頻繁に会い、高橋景保からは、『世界周航記』と引き換えに伊能図を入手する約束を取り交わす。

他方、シーボルトの江戸逗留に反対する多紀派の奥医師(漢方医)たちは、将軍家斉の寵愛を一身に集める側室お美代の方を引き込み、シーボルトの逗留を阻止する。それを知る術もなく、シーボルトは将軍謁見の合間に、高橋景保の案内で紅葉山文庫に潜入した。

景保は、伊能図の複製をシーボルトに約したが、それと引き換えにオランダで伊能図を数十部活版印刷にして日本に送るよう依頼。その依頼は上司の商館長にも重複して為されたため、シーボルトの手許に伊能図が届くと、二人の対立は激化。伊能図を部下に横取りされたと思い込んだ商館長は、激しい怒りを抑えきれずに、伊能図の違法な授受等を長崎奉行所に匿名で密告し始める。

それと同時に、幕府もシーボルトを長崎奉行所に厳しく監視させ、江戸では景保らの一挙一動を御庭番(隠密)たちに探索させて、シーボルトを介した景保らの違法行為を徐々に把握してゆく。

八、シーボルト事件勃発

シーボルトの身辺に監視の目が迫ってくると、鳴滝塾で西洋医学や蘭学を学ぶ弟子たちの中にもシーボルトを危ぶむ者が現れはじめた。初代塾長美馬順三の跡を継いで塾長を務めた岡研介（けんかい）、伊藤圭介、オランダ語に堪能な高野長英などである。シーボルトは彼らを引き留めることなく、研介には所望された小型ピアノを、本草学に長けた圭介にはチュンベリーの肖像とその著書『日本植物誌』を贈り、それまでの労をねぎらった。なかでも仙台藩と繋がりがある長英は、ロシアの南下に警告を発した工藤平助や林子平の影響を強く受けて育った。そのため、西欧列強国の政治や軍事、産業などに関心が高く、シーボルトの奇異・奇抜な調査やコレクションにも鋭い目を向けていた。そのシーボルトが、幕府から厳しく監視される裏には何らかの隠し事があると睨んだ長英は、ある日シーボルトに単刀直入に訊いてみた。

「ドクトルが日本に来られた目的は一体、何なのですか？　どうやら、出島付の医官と博物学の研究だけではなさそうですね」

「ウム、一口では言いにくいな」

「では、訊き直します。医官や博物学者の他に、どんな肩書をお持ちですか？」

「ウーム、『機密調査官』というところかな」

「そうですか……やっぱり」

シーボルトは包み隠さずに答えたが、それに危険を感じた長英は即座に鳴滝塾を辞して、長崎を後にする。しかし、オランダ語や海外情報に精通する彼は、その後、幕府の言論弾圧である『蛮社の獄』で捕縛され、非業な死を遂げることになる。

一方、シーボルトはバタビアから帰国命令を受けていたが、鳴滝塾に残って彼に協力する門人もいた。後年、シーボルトから託された遺児いねを医師に育て上げる二宮啓作と眼科医の高良斎などである。彼らはオランダ船に積み込む荷物の中に禁制品を見つけても、見て見ぬ振りを貫いた。さらに、奉行に命じられた職務と、師と仰ぐシーボルトへの敬慕の念との板挟みに苦しむ者もいた。通詞（つうじ）目付の吉雄忠次郎である。彼は、高橋重賢の後任の長崎奉行大草高好よりシーボルトの監視を命じられていたが、尊敬する師の挙動を洗いざらいに上申することは出来なかった。

シーボルト自身も監視を警戒して、大胆な行動は差し控えるようになった。それまでは江戸の景保と頻繁に文通をしていたが、その便数が著しく減ってくる。彼は、書き終えた手紙を読み返し、もし漏洩があったとしても大丈夫かと確認する。そして、危険と思われるものは手元に留めて出さなくなったのである。しかし、警戒を怠らずに出した奉行便の一つが、思わぬ事件を惹き起こすことになる。

それは文政十一年（一八二八）の三月に江戸の景保に送られた手紙であった。その手紙には、間宮林蔵に宛てた小包が入っていたのである。景保は何も考えずに、小包を林蔵に届けたが、異人と直接文通することは幕府が禁じていた。その決まりに従い、林蔵は小包を勘定奉行の村垣定行に届け出る。定行とその配下が見守る中で開けられた小包の中から、一通の手紙と更紗一反が出てきた。その手紙を通詞に和訳させると、内容は林蔵の樺太探検を称える賛辞と、かつて江戸で会ったときに話した北方の植物標本が手に入ったら送ってくれというものである。シーボルトにはバタビアのカペルレン総統から帰国命令が下っており、次のオランダ船で日本を離れることになっていた。そこで

シーボルトは日本を離れる前に、樺太が島であることを発見し、地図に仕上げた林蔵を褒め称え、称賛の手紙と記念品を贈る気になったのである。

林蔵が奉行所に届け出た小包は、シーボルトが禁制品を国外に持ち出す重要な証拠になるものと定行たちは色めき立った。しかし、届いた通詞の翻訳文は、前述のように何ら禁制に触れる内容を含んでいなかった。「この文と更紗一反では何の証拠にもならぬ」と定行たちは失望する。結局、勘定奉行の定行は将軍家斉に諮ったうえで、出島の商館長メイランを介してシーボルトに厳重注意を下した。オランダ人は日本人と直接手紙等をやり取りすることはご法度なので、二度としないようにという警告である。なお、このときのオランダ商館長は、前任のスチュルレルからメイランに交代していた。

林蔵に届いたシーボルトの手紙について、穏便な警告で済ませた幕府の対応に不満を募らせたのは、側室のお美代の方であった。彼女は出入りの奥医師から、景保が禁制の品々、とくに伊能図や北方領土の地図までシーボルトに手渡したとの噂を聞いて、あるとき将軍家斉に進言を試みた。

「上様、間宮林蔵とやらに異人からの文が届いたとか。その文は天文方の作左衛門が仲立ちをしたと聞きますが、ご存知でございますか？」

「ウム、よく承知しておる」

「その文で異人と作左衛門の怪しい動きが掴めたということでございましょう。これを機に、作左衛門と異人を成敗することは出来ませぬか」

「そなたは何故、作左衛門や異人をさように目の敵にするのじゃ？」

「上様、異人には島津のご隠居さまが絡んでおられます。作左衛門と異人を成敗すれば、ひいては島津のご隠居の力も弱まるかと」
「フーム、なるほど……」
「昨今、作左衛門や蘭学者たちはやりたい放題とか。このままでは国の安泰も危うくなりかねないと危惧する者も多いと聞きます」
「ウム、それは分かっておるが、心に留め置こう」
家斉は、お美代の方の言い分を聞き容れはしたものの、決断することはなかった。何故なら林蔵が奉行に届け出たシーボルトの手紙は実にたわいのないもので、罪に問えるような代物ではない。さらに禁制の品や日本の地図が流出したという話は匿名の異人からの通報であり、村垣定行が放った隠密からの情報は、隠密の存在自体が公にできるものではなかった。

さらに家斉には、お美代の方が忌み嫌う重豪の暴挙に手を下せず、見て見ぬ振りをする理由があった。それは、五代将軍綱吉の時代にまで遡らなければならないが、綱吉の養女竹姫が、後の八代将軍吉宗の時代に、薩摩藩の島津継豊（つぐとよ）の継室となったときから始まる。竹姫は、許婚が二度も早世するという不幸が重なり、正妻を亡くした継豊に輿入れしたのは二四歳、当時としては遅い結婚であった。しかも、継豊には既に嫡男がいたので、たとえ竹姫に男子が生まれたとしても家督は継がせないという悪条件を呑んでの降嫁であった。
その降嫁から十数年後に、病弱で隠居した継豊の跡を、長男の宗信が継いだものの三年後に逝去、跡を継いだ弟の重年も襲封から六年後に病死している。重年の死は、幕府から命じられた木曽川治水工事と時期が重なるが、工事で生じた四十万両もの借財や八十人を超える犠牲者、さらに責任を取って総奉行の平田靭負（ゆきえ）

が自害したことなどの心労が重なったことも無視できない。その不本意な死を遂げた重年の遺児が重豪であり、弱冠十歳で薩摩藩の跡を継ぐことになった。重豪の生母は、出産の直後に亡くなったので、幼い重豪は義理の祖母、竹姫のもとで成長してゆく。重豪は後年、薩摩の気風を嫌って京や上方風の言葉や作法を推奨、西欧の文化を尊重する開化政策を推進してゆくが、これは竹姫の影響を強く受けたものであろう。降嫁後は薩摩藩に精一杯尽くし、幕府との結びつきを重視した竹姫は、死期が近づくと枕元に重豪を呼んだ。そして、藩主の重豪に「女子が生まれたときには、徳川家に輿入れをするように」と遺言したのである。

竹姫の死の翌年に、重豪に女児のお篤が生まれ、同じ年に一橋家の当主であった治済に豊千代が生まれた。それを知った幕府は竹姫の遺言にもとづき一橋、島津の両家に豊千代・お篤の縁談を命じた。

それから二年が経った春に、思いがけない事態が起こった。十代将軍家治の嫡男家基が十八歳の若さで頓死したのである。家治には他に男子がいなかったので、御三卿のひとつ一橋家の豊千代が次期十一代の将軍候補に選ばれた。豊千代は家治の養子となり、一橋の屋敷から西丸に移り、名を徳川家斉と改める。同時にお篤も茂姫と名を改めて、江戸城西丸の大奥に引き取られた。その後、外様大名の娘ではまずいとの理由から、公家の近衛家の養女となり、寛政元年（一七八九）に家斉と結婚して将軍家の正室となった。

十代将軍家治の死に伴い、十五歳で将軍の座に就いた家斉は、自ら政を執り行う力はまだ身についていない。そのため、実父の治済とそれを後押しする岳父の重豪に頼るほかはなかった。さらに、次期将軍と目されていた家基の頓死については、暗殺の噂が絶えなかった。手を下したのは老中の田沼意次ではないか、い

や、我が子を将軍に仕立てたい治済の仕業に違いないと囁かれていたが、家斉本人は父の治済であると信じ切っていた。その父に逆らうことなど考えるだけでも空恐ろしく、家斉は将軍となっても父治済の言いなりに振舞うしかなかった。

加えて将軍の岳父となった重豪もまた、実権を掌握する治済にすり寄って、幕政に大きく関わってくる。治済と重豪は豊千代とお篤の縁談が纏まったときから親戚となったうえ、二人には多くの共通点があった。その最たるものは豪奢な暮らしを好む「先楽後憂」の性格であり、謀略を操ることにも人一倍長けていた。その二人に育てられ、将軍に上り詰めた家斉と正室の茂姫は、端から親には頭が上がらない。実父治済にとどまらず、岳父の重豪も軽んじる訳にはいかなかったのである。

しかし、二人の父による院政に似た状況は、何時までも続くことはなかった。寛政の改革で失脚した松平定信の後任を務めた松平信明が病死し、ほかの寛政の遺老たちも辞職する中で、側用人の水野忠成を勝手掛・老中首座に据えたのは文政元年(一八一八)、家斉が将軍の座に就いてから実に三十二年も経った時であり、気脈が通じた御庭番の村垣定行を勘定奉行に取り立てたのも、この年であった。

水野忠成はそれまでの幕閣が禁じていた賄賂を咎めることはなく、むしろ奨励。家斉も勝手気ままに奢侈な暮らしを享受するようになる。そして、慢性的な財政ひっ迫に対しては貨幣の改鋳と大量発行等の安易な対応をしてゆく。それまでは、実父らによる院政を受け入れてきた家斉ではあったが、やっと自分が思うような治世ができるようになったのである。

さらにシーボルトらの江戸参府の翌年三月には、父の治済が息を引き取り、長く続いた院政は完全に終わりを告げようとしていた。お美代の方は治済の死により、「いよいよ上様の世が到来」と勢いを増し、シーボルトとそれを推す重豪や景保、蘭方医たちの取り締まりを、と声を高める。その声に賛同する幕閣や奥医師たちが増えてくると、大奥におけるお美代の方の地位も高まる一方。それを好ましく思わない正室茂姫はお美代の方の言動や行動を妨げることが多くなり、夫々に加担する女官たちも互いに険悪な仲となり、大奥は大混乱の様相を呈していた。

家斉は、正室とお美代の方との争いに巻き込まれて落ち着かない日々を送っていたが、自ら大鉈を振るう気にはなれなかった。それというのは、四十年にも及ぶ院政にすっかり慣れてしまい、「父には勝てぬ」という感覚が骨の髄まで染み込んでいたこと。さらにお美代が追い落としを狙う重豪は、家斉にとって大恩人であり、しかも八十歳を過ぎたご老体である。「もう少し時を待てば……」と鷹揚に構えていた。

また、シーボルトと景保らの動きについては、自由に泳がせておけば、彼らの真の狙いも分かってくるし、海外の情報もそれなりに入ってくる。勘定奉行の定行をはじめ、多くの庭番たちにシーボルトと景保や蘭癖大名たちを監視させておけば実害はなかろうと考えていた。

一方、側室お美代の方は、日増しに高まる重臣たちの意見を後ろ盾に、「いつまで異人や作左衛門らにやりたい放題を許すのですか」と、一刻も早い仕置きを急かし続ける。それらに対し、将軍家斉は筆頭家老の水野忠成らの幕閣に、「シーボルトと高橋景保の監視をさらに強め、確たる証拠を掴むように」と指示するほかはなかった。

文政十一年八月九日（西暦九月一七日）、その日の長崎は快晴であったが、夜になると大粒の雨と南西からの強風が吹きつけてきた。夜更けに風雨はさらに強まり、人が立っていられないほどの暴風雨に変わってゆく。季節柄、大型の台風が襲来したのである。自宅にいたシーボルトは科学者の習性で気象観測機器を取り出して、気圧や温度、湿度などを測定していた。思いがけず遭遇した台風の記録を取り始めたのである。

突然、物凄い突風が窓を打ち付け、ガラス窓が粉々に割れた。そこから吹き込んだ強風で屋根が吹き飛び、家中がガタガタと揺れ始めた。二階は壊滅して、今にも家全体が倒壊しそうである。身の危険を感じたシーボルトは、妻のたきと生まれたばかりのいねを連れて外に出た。しかし、頑強なシーボルトでさえ立っていられないほどの強風である。隣のフィレネーフェの家に逃れて、助けを求めたくても一歩も前に進めない。結局、シーボルトの一家三人は、玄関前に積み上げられた箱荷の隙間に身を潜めて、夜が明けるのをじっと待った。

台風が過ぎ去った朝、嘘のように晴れ渡った青空のもとに出島の惨状が明らかになった。シーボルトの家はもとより、殆どの家の屋根は吹き飛ばされ、中には倒壊した家も見受けられる。石垣や塀も広範囲にわたって崩れ、植物園の木々はすべてなぎ倒されていた。商館長宅や通詞部屋、役人の詰所なども甚大な被害を受けて、出島の中は大変な騒ぎになっていた。

しかし、もっと重大な事態が出島の対岸、稲佐の浜で起こっていた。シーボルトのコレクションを満載した帆船コウネリウス・ハウトマン号が暴風で座礁してしまったのである。彼は、その帆船で台風直後の八月十二日に日本を離れてバタビアに帰る予定であった。

ところが湾内に停泊していたハウトマン号の錨綱が切れて、対岸稲佐村の志賀氏宅の砂浜に舳先を突っ込んだ。動きが取れなくなった帆船は、台風による高波が収まると、浜に船底を露わにいたのである。

奉行所の役人が現場に駆け付けてハウトマン号の座礁を確認し、早速、二人の長崎奉行大草高好と本田正収（まさとき）に伝えた。奉行は座礁したハウトマン号を『入り船』、すなわち違法な着岸と見做して臨検を開始する。臨検は抜け荷やキリシタン流入を防ぐために時々行われていたが、オランダ船に実施したことはない。無茶苦茶な話であるが、シーボルトの監視を命じられていた奉行たちは、苦し紛れに座礁したハウトマン号を『入り船』とこじつけて、立ち入り検査に及んだのである。

その日の昼過ぎ、稲佐の浜に自ら出向いた奉行の陣頭指揮により、役人たちが座礁船に乗り込んだ。そして、信じられないほどの速さで事は進んでゆく。船内から運び出された荷は稲佐の浜辺に運び出され、一般の品とシーボルトの品とに分別された。奉行所に没収されたシーボルトの品は一つ一つ徹底的に調べられたが、その中から禁制の品が次々に出てきたのである。奉行所は押収した禁制の品々を文書に纏め上げ、座礁から三日後に早馬を江戸に送った。

長崎奉行から早馬で届いた文書をみて、江戸城の家老たちは愕然とした。かねてから怪しいとは睨んでいたが、禁制品の持ち出しがこれほど多く、多岐にわたっているとは思ってもいなかったのである。それらの流出には多くの者が関わっていると推定されたが、とりわけ伊能図や北方領土の地図については高橋景保が首謀したことは疑う余地もない。何より、間宮林蔵に送られてきた手紙と更紗一反が動かぬ証拠になっていた。幕閣たちは十月の半ばから機密の会議を何度

も重ねて、国禁を犯した景保を直ちに捕縛して、取り調べるようにと将軍家斉に上申する。

シーボルトと景保らの監視を強めていた幕府は、確たる証拠が座礁船から数多く発見されたため、もはや躊躇することはなくなった。そこで将軍家斉の命が下され、十一月十六日の深夜に、御用提灯の長い列が景保の邸宅に差し向けられる。屋敷をぐるりと取り囲んだ橙色の提灯の列は、そのまま屋敷の中へと入って行く。そして、一時も経たぬ間に天文方兼御書物奉行の高橋作左衛門景保は、縄を掛けられ竹駕籠に押し込められた。担ぎ出された駕籠の後には息子の小太郎、さらに部下の下河辺林右衛門も縄を打たれて、和田倉門外竜の口の評定所にしょっ引かれてゆく。

「一寸、待った！　話が違いますぞ」

突然、大声を上げたのは伊能忠敬の化身であった。遠隔地は無理でも、江戸とその周辺であれば遠目が利くと言っていた化身が、事件の展開に異議を唱えたのである。

「座礁したオランダ船から禁制の品々が出てきたという筋書きは公儀に都合のいい作り話。早馬も方向が逆で、作左衛門の捕縛が、江戸から長崎に知らされたのじゃ」

これまで沈黙を守ってきた忠敬の化身が、何の理由もなく横槍を入れるとは思えない。では、二百年近くものあいだ正史とされてきた話のどこが違うというのであろうか？　著者は化身の言葉を俄かには受け容れられず、半信半疑のまま、多くの書物や報文等を渉猟して事件を検証した。

先ず、台風襲来時の状況について考察をしてみよう。八月九日（西暦九月一七日）の夜に長崎を襲った台風は超大型で、シーボルトの観測データによると、気圧計で２８．１インチ（９５１．６ヘクトパスカル）の記録が残されている。南西海上より上陸した台風は、それまでに経験したことがないほどの暴風雨をもたらし、長崎の街は壊滅状態に陥った。その台風に見舞われたとき、シーボルトの家は倒壊しそうになったので、隣のフィレネーフェに助けを求めようとした。しかし、激しい風雨で動きが取れず家族三人は玄関前に山積みにされていた荷物の隙間で台風が過ぎるのを待った。その際の『玄関先に山積みされた荷物』とは一体何であったのか？　もし、正史に記されているように、シーボルトの膨大なコレクションが座礁したハウトマン号に積み込まれていたのであれば、玄関先に大量の荷物は無かったのではないか。

さらに、稲佐の浜に座礁した帆船を、入り船として臨検し、シーボルトのコレクションとそうでない品に素早く区別して奉行所が押収したという記録は不自然である。何故ならば、多くの家や庭木がなぎ倒され、塀や石垣の崩壊に崖崩れも多発、多くの死傷者が出たというときに、役人の家やその家族だけは何の被害もなかったとは考え難い。いかに厳しい奉行であっても、前夜に被災した部下たちを稲佐の浜に向かわせることなど考えが及ばないであろう。仮に命じたとしても、稲佐の浜に通じる道は豪雨と高潮による冠水や漂着した流木等で寸断され、人馬が通れる状況ではなかったに違いない。

近年になって、ハウトマン号について書かれたスチュルレルの後任の商館長メイランの日誌が発見された。それによると、ハウトマン号が長崎に到着したのは文政十一年の六月二十六日（西暦八月六日）、入港手

続きや乗組員の人別改めを終え、積み荷の荷揚げ作業を開始したのが七月六日。その作業に半月ほど掛り、最後の積み荷となった砂糖を荷揚げしたのは七月二十二日。その翌日に船の安定を図るバラスト(錘)として銅五百ピコル(約三十トン)を船底に積み込んだ。そして、出島に陸揚げした積み荷の分別や貿易商人たちが下見をしているさなかに大型台風が到来している。出島の沖に停泊していたハウトマン号は、湾内を漂流する清国の小型船に錨綱を切られ、対岸の稲佐の浜に座礁。高波で浜に打ち上げられたハウトマン号は、それから三ヶ月以上もそのまま放置された。当然、座礁した船に積み荷は何も無く、船底にバラストの銅が見つかっただけで、奉行所が臨検を行ったという記録も残っていない。

さらに禁制の品々は、座礁した船からではないことを裏付ける国内の文書も発見された。それは、商人の中野用助が江戸の呉服商三井越後屋の本店に送った事件報告書の写しである。用助は三井越後屋の長崎代理店を営んでいたが、彼の報告書に日本地図の受け渡しが『江戸表で露見』との連絡が十一月九日の夜に長崎奉行所に届き、役人が速やかに出島でシーボルトを取り調べ、禁制品を発見したと記されている。事件は国防に関わる重大事であったかも知れないが、オランダからの反物を長崎で仕入れていた三井越後屋の関心はひとえに貿易の行方にあった。事件がシーボルト個人の問題に過ぎない……との見解を通詞らから入手した用助は、「貿易への影響はないであろう」という見通しを本店に伝えたのである。

ただ、この大型台風によりシーボルトの予定が大幅に狂わされたことは間違いない事実で、ハウトマン号の座礁により彼の帰国は大幅に延期された。もし、後年「シーボルト台風」と呼ばれるようになったこの台

風が襲来していなければ、シーボルトは大量のコレクションと共にハウトマン号に乗り込み、事件発覚前に日本を離れることになっていたのである。

九、北方領土で名を成した男たち

それでは、事件の真相はどうであったのか、話をオランダ商館長スチュルレルらの江戸参府にまで戻して考えてみよう。商館長の一行が、江戸の定宿の長崎屋に滞在していた時、シーボルトには多くの訪問客が押し寄せてきた。来客の中には、天文方兼御書物奉行の高橋景保がいたことも間違いない。シーボルトは、景保が海外の情報、とりわけクルーゼンシュテルンの世界周航記を熱望していることに目を付け、伊能図と北方領土の地図との交換を持ち掛けた。景保はそれらが国禁の品と分かってはいたが、地図を複写して提供することを承諾し、同時に「オランダで五十～六十部の活版印刷をして、日本に送り返すように」と要請をした。その際、景保は上司の商館長にも話を通しておかなければならないと考え、スチュルレルにも伊能図を見せて活版印刷を依頼している。

商館長のスチュルレルは、活版印刷は幕府からオランダ国への正式な依頼であると考え、江戸参府から出島に帰り着くと、長崎奉行に相談を持ち掛ける。しかし、奉行は「伊能図や北方領土の地図は国禁の中でも極秘の品であるから、幕府が国外流出を認めるわけがない、まして活版印刷を依頼することなど端から有り得ない」と一笑に付した。面目を潰されたスチュルレルは、シーボルトに対する怒りを爆発させ、奉行に宛てて匿名の密告書を送り付ける。さらに、バタビアから着いたオランダ船には、後任の商館長メイランが乗

り込んでいて、その年の七月付でスチュルレルは商館長の任を解かれた。解任の理由はシーボルトとの不仲と聞かされてスチュルレルは激高、シーボルトの違法な行為を洗いざらいに書き上げ、長崎奉行に密告する。その数は何と三十二通にも及んだ。

出島から匿名の密告書を受け取った長崎奉行は、内容が国家機密に関わることなので、すべて江戸幕府に転送する。情報を入手した幕府は、「オランダ商館内の内輪揉めに興味はないし、匿名の密告書など信じるに当たらぬ」と表面上は無視をした。しかし勘定奉行の村垣定行は、「予てより怪しいと睨んでいたシーボルトは、ここまでやっていたのか」と密告書の中身に注目、御庭番として将軍家斉に仔細を報告した。前年に、『異国船打払令』を発した家斉は、海外諸国からの干渉を極度に嫌っていたが、通商のあるオランダといえども、その例外ではない。「油断ならぬシーボルトと作左衛門の動きを徹底して監視し、動かぬ証拠を掴むように」と定行に命じたのである。

将軍からのお墨付きを得た定行は、配下の間宮林蔵に景保とその取り巻きの探索を命じ、長崎奉行にはシーボルトの監視を強めるように指示した。さらに将軍家斉は村垣定行にとどまらず、御庭番の明楽八五郎や川村庄五郎にも景保や蘭学者、蘭癖大名たちの動きを探るように命じる。

これまでの歴史のなかで、村垣定行はシーボルト事件と無縁のように伝えられてきたが、定行は配下の林蔵を駆使、さらに御庭番の明楽や川村たちとも連携して、この事件に大きな役割を果たしてゆく。ここで疑問となるのは、常陸国(現茨城県)の農家に生まれた間宮林蔵が、何故、代々の御庭番で勘定奉行にまで上り詰めた村垣定行と強く結びついたのであろうか？

その答を得るために、場面を北方領土の探検・探索の時点にまで遡ってみよう。

幕府による蝦夷地の探検や調査は、田沼意次が実権を握っていた頃に端を発している。老中首座の意次が動かされたきっかけは、工藤平助の『赤蝦夷風説考』(赤蝦夷はロシアの意)と言われる。この著書により北方領土に興味を持った意次は、天明五年(一七八五)から二年にわたって調査隊を蝦夷地に派遣した。二年目の調査隊には前述の最上徳内も参加していて、彼は後日、『蝦夷草子』を執筆し、国後(くなしり)、択捉(えとろふ)、得撫島(うるつぷとう)の状況とロシアの動きを著している。

北方領土の調査と蝦夷地開拓を始めた意次が失脚した後も、ロシアの南下はとどまることなく、むしろ顕著になってゆく。寛政二年(一七九二)にはロシア皇帝の使者ラクスマンが根室に上陸して通商を要求、次いで文化元年(一八〇四)にレザノフが、かつてラクスマンに渡した信牌(入港許可証)を持って長崎に来航し、通商を求めた。しかし、幕府は半年以上もレザノフを幽閉状態で待たせた上、通商拒否の返答をする。二度とロシア皇帝に開港や通商の要求をしてこないようにと、敢えて礼を欠く対応をしたのである。この無礼な幕府に怒ったレザノフは「日本の開国は武力に頼るほかはない」と皇帝に上奏したが、後日考えを撤回して、配下の艦隊をアメリカへと向かわせた。ところが、レザノフの部下ニコライ・フヴォストフは、作戦変更前に出された「日本を攻撃すべし」という命令が取り消されてはいないと解釈した。そして、文化三年(一八〇六)の秋に樺太にある松前藩の番所を、翌年の春には択捉島の港などを襲撃し、放火、暴行、略奪等を繰り返した。後年、文化露寇(ろこう)といわれるロシア軍の侵攻である。

この時、函館奉行所の幕吏となっていた間宮林蔵は、たまたま択捉島の紗那（しゃな）にいて、ロシア軍の襲撃に遭遇する。紗那の防衛は函館奉行所の戸田又太夫の指揮の下、弘前藩と盛岡藩の兵士で守られていた。ロシア兵の銃撃や艦砲射撃は凄まじかったが、林蔵は徹底抗戦を主張する。しかしトップの又太夫には受け入れられず、日本勢は戦わずして敗走、責任を取って戸田又太夫は敗走中に自刃し、関係者は処罰を受ける。紗那にいた林蔵も罪に問われることを覚悟したが、最後まで徹底抗戦を主張したことが認められて、「お咎めなし」の処分となった。

しかし、百姓から武士に取り立てられた林蔵は、敵前逃亡の汚名と後ろめたさが拭えずに悩んだ。そして、名誉を取り戻す良い方策はないものかと奉行所吟味役の高橋重賢に相談する。後年、長崎奉行に昇進して、来日したシーボルトに鳴滝塾の開設などを認めた重賢である。重賢は、自責の念に駆られる林蔵に、「北蝦夷（樺太）の調査を……」と持ち掛ける。未踏の地、しかもロシアの侵出が想定される樺太に足を踏み入れることは命懸けの冒険で、誰も行こうとはしない。しかし、武士の名誉を挽回したい林蔵は、「是非にも」と重賢に訴え、準備に取り掛かった。

他方、ロシアの侵攻に対処して、幕府はその年の秋十月に函館奉行を松前奉行に格上げして、奉行に村垣定行を派遣した。重賢は、松前奉行となった定行に、林蔵の樺太行きを進言、ロシアの動向を掴みたい定行は即刻、林蔵に樺太行きを命じる。その命令と実務を取り仕切る重賢の指示で、林蔵は松田伝十郎と共に蝦夷地を北上し、知床から樺太の白主（しらぬし）へと海を渡った。文化五年（一八〇八）の三月のことである。林蔵たちが着いた白主には知床の番所勤務の最上徳内が詰めていて、若い林蔵に「アイヌに変装して行っては」と勧

めた。しかし、頑固一徹の林蔵は徳内の助言を受け入れず、武士の格好のまま北へと向かった。

林蔵と伝十郎は樺太の北西に位置するラッカまで探索したものの、それ以北には進めなくなって引き上げた。しかし、樺太の北部が未調査のうえ、大陸と地続きか否かも不明のままで、納得がいく調査ではなかった。そこで林蔵は、再度の探索を上司の重賢と定行に願い出て、その年の秋に、今度は林蔵単独で樺太に向かう。そして酷寒の地を幾多の困難や危機を乗り越えて北上し、最北端のナニオーに到達。そこで樺太の北端を測量して、海峡の先に大陸を眺めながらラッカに近いノテトまで引き返した。それでもまだ林蔵は満足できず、現地アイヌの酋長の従者となって海を渡り東韃地方へと向かう。そして、黒竜江(アムール川)の上流デレンまで分け入り、出張してきた清国の役人たちにも会っている。

その困難極まる探索を通して、林蔵は樺太が大陸と陸続きではなく、独立した島であることを発見、大陸と樺太との狭い海を『間宮の瀬戸』と名付けた。後年、シーボルトによって世界中に周知される『間宮海峡』である。

樺太の北部から黒竜江の河口に至るまで探索調査を終えた林蔵は、文化六年(一八〇九)の秋に宗谷に戻ってきた。一年半にも及ぶ苦闘と凍傷などで全身はボロボロ、その姿は林蔵と見分けられないほど変わり果てていた。しばらく休養して体調を整えた林蔵は、宗谷から船で松前に南下して、松前奉行の定行や吟味役の重賢に帰着の報告をした。そして休む間もなく、大陸に渡った探索の記録『東韃地方紀行記』の執筆に取り掛かる。執筆と言っても、林蔵の手指は凍傷がひどくて筆を握ることができない。そこで、林蔵が初めて

蝦夷地に赴いたときに仕えていた村上島之丞の養子貞助に口述筆記を頼むことになる。

年が明けた文化八年(一八一一)の正月に、一旦江戸に戻った林蔵は松前奉行所の霊岸島会所に籠って東韃地方紀行記の手直しや樺太の地図などを仕上げて幕府に献上、その功により、彼は松前奉行所の支配調役下役格に昇進し、禄高三〇俵、三人扶持を与えられる。そして五月の中旬になると、林蔵が師と仰ぐ伊能忠敬から「是非、拙宅に来てほしい」という文が届いた。忠敬は二年にも及ぶ九州方面の測量(第七次測量)から戻ったところであったが、旅先で間宮林蔵の壮挙を知って、江戸に帰着後、真っ先に林蔵に文を送ったのである。

林蔵は樺太探索の話が持ち上がった時、かつて函館で会った忠敬に彎窠(わんか)羅針の提供を頼んでいる。杖先磁石ともいわれる方位測量機器であるが、林蔵は忠敬が函館近辺で使っているのを見て、樺太の測量にも是非、持参したいと知人を通して願い出た。忠敬は、樺太に果敢に赴く林蔵の願いを快く受け容れ、彎窠羅針を二個も林蔵に進呈したのであった。

林蔵はそのお礼もあり、直ちに深川黒江町の忠敬宅を訪れた。忠敬は、樺太を踏破して海峡を発見、さらに地図まで作製した壮挙を褒め称え、年老いた自分ではもはや行けそうもない蝦夷地の測量を林蔵に頼みたいと言う。林蔵は北方領土で積み重ねてきた経験から、陸地の測量については自信があった。しかし、観測地点の緯度・経度を割り出す方法については何の知識も持ち合わせていない。そこで蝦夷地の測量は引き受けるが、ついては緯度や経度を測定する方法を教えて欲しいと忠敬に乞うた。

頼まれた忠敬は、「緯度や経度は天体観測から導き出す。それ故、先ずは天体の観測方法を知ることじゃ」

と言って林蔵を庭に設えた天文台に連れ出した。林蔵は、象限儀や子午線儀などの大掛かりな装置に目を見張り、是非、天体観測の指南を……と忠敬に申し出る。この時から二人は、それまでの淡い繋がりから、強固な師弟関係を結ぶことになった。

林蔵は足繁く深川黒江町に足を運び、北極星の仰角を象限儀で測る方法などを身に着けてゆく。そこから緯度を正確に測ることは覚えたが、経度を割り出すまでには至らなかった。経度を算出するためには月や木星、無数の星座などの観測が必須となるが、それらを短期間で学ぶことには限界があったのである。後年、忠敬が作り上げた伊能図の蝦夷地は、林蔵がその大半を測量しているが、結果として蝦夷地の緯度は正確であるものの、経度には若干のずれが生ずることになる。

林蔵が黒江町に通い始めて半年が過ぎた秋十一月に、忠敬は再び十九人の隊員を率いて九州方面の測量（第八次測量）に向かった。その忠敬を品川で見送った翌月に、林蔵にも松前行きの命令が下される。彼に託された任務は、その年の春に蝦夷地で起こったゴローニン事件の調査であった。

林蔵にゴローニン事件の調査を命じたのは、松前奉行の村垣定行である。定行は、林蔵が単身樺太に行きたいと申し出たとき、「恐らく、生きて帰ることはあるまい」と思いながら許可を出した。しかし林蔵は、その姿かたちが変わるほどの苦難にもめげず、与えられた使命を果たして戻ってきた。定行は、林蔵の壮挙を褒め称えるとともに、アイヌや名も知らぬ原住民にどのようにして溶け込み、協力を取り付けたのか。危険な場面に遭遇した際は、如何にして脱出したのか等々を詳しく聞き出す。その困難で危険極まる冒険話を聞きながら、定行は林蔵の卓越した知力と体力、さらに与えられた任務の遂行力に舌を巻いた。

その定行は、生家が御庭番の家柄であったため、蝦夷地に赴く前から将軍家斉と直接に会うことができた。今回の松前奉行拝命も、その裏には「ロシアの動向を現地に赴いて調べ、将軍に伝えよ」という隠密の遠国御用（おんごくごよう）が隠されていた。御庭番という職業は、八代将軍吉宗が江戸城に入る際に紀州藩から連れてきた隠密集団にその起源がある。初代の御庭番は十七家よりなり、世襲で若干の増減はあっても幕末まで続いた。普段は江戸城本丸の庭に詰めていて、奥向きの警備を職務とする。しかし、一旦将軍の命を受けると秘かに裏庭から抜け出し、情報収集活動などを行う。その職務で、江戸から遠くに出向く仕事は、遠国御用と呼ばれ、村垣定行はもっとも多くの遠国御用を務めてきた。経験豊富な定行は、林蔵が隠密として卓越した能力を備え、さらに真正直で律儀な性格から、信用できる男であることを確信、このときから先は、表には出せない御庭番の重要な仕事を林蔵に託してゆくことになる。

その機会はすぐに訪れ、林蔵が江戸にいた文化八年（一八一一）の春に、ロシアの軍艦ディアナ号が国後島に寄港した。艦長のゴローニンは、薪水の提供を求めて艦船を降り、国後の陣屋を訪ねる。しかし、交渉は途中でこじれ、陣屋の役人はゴローニンら八人を捕縛して松前奉行所に護送する。そこでゴローニンらは二年三ヶ月も幽閉されることになるが、江戸から松前に赴いた林蔵は、ゴローニンをロシアのスパイと見做して執拗な尋問を繰り返す。もちろん、尋問から得られた情報は、細大漏らさず江戸に宛てて報告されることになる。林蔵には、紗那でロシア兵に襲撃された悲惨な記憶が鮮明に残っていて、ロシア人を忌み嫌い憎んでいた。後年、帰国したゴローニンが著した『日本幽

囚記』の中で、ゴローニンは林蔵の尋問が執拗を極め、苦しめられたことを記述している。

このゴローニン事件は、ディアナ号の副艦長リコルドとロシアに拿捕された高田屋嘉兵衛の力で解決に向かう。元々捕獲事件の背景には、文化露寇に対するロシアへの報復の意味合いが強く込められていた。しかし文化露寇は、ロシアでは「フヴォストフ事件」と呼ばれ、レザノフの部下フヴォストフが独断でやったことが判明。怒った皇帝アレクサンドル一世はフヴォストフを処罰し、一八〇八年（文化五）に全軍を撤退させ、以後、日本への侵攻を中止するように命じた。

その経緯を知った捕囚の嘉兵衛は、襲撃の真実を日本政府に伝えて釈明をすればゴローニンを取り戻せるとロシア側に入れ知恵。同時に日本側にも襲撃事件の真相を伝えて、ゴローニンの釈放を促す。日露の交渉には紆余曲折があったが、来航したリコルドは一旦ロシアに引き返して、イルクーツク県知事の釈明書を入手。交渉に立ち会った松前奉行所吟味役の高橋重賢らに釈明書を手渡し、ゴローニンらは函館で全員が釈放されることになった。文化一〇年（一八一三）、九月のことである。

この事件の顛末は、松前奉行や林蔵から江戸幕府に宛てて詳しく報告された。しかし報告書では、日露の交渉成果は奉行所の寄与が顕著であり、ロシア軍の全面撤退も奉行所の功績が大きかったと当事者の手柄が誇張される。ロシア皇帝の命令で軍が撤収したというロシアの国内事情など誰も知る術はない。偏にロシアに勝利したという日本側の言い分だけが江戸に伝えられ、蝦夷地に派遣された村垣定行の評価と将軍家斉からの信頼はますます深まるばかりであった。

話をシーボルト事件に戻そう。オランダ商館長スチュルレルの密告から、シーボルトの違法行為を掴んだ幕府の村垣定行らは、シーボルトと親交のある人物の内偵を強める。その筆頭は、天文方兼御書物奉行の高橋景保であり、彼の部下やオランダ語の通詞、蘭学者たちも含まれた。しかし、シーボルトに国禁の地図や物品を渡したという確たる証拠はいまだに手に入っていなかった。

これより少し早い時期に、日本は海外の国々から様々な干渉を受けていた。前述のロシア軍の侵攻やゴローニン事件、イギリス船の琉球や浦賀への来航と通商の要求、島民から牛を略奪した宝島事件、さらに捕鯨船が薪水を求めて上陸した大津浜事件など、枚挙にいとまがない。これらの海外圧力に対して国防強化が必要と考えた幕府は、『異国船内払い令』を発し、オランダや中国以外の外国船が近付いて来た場合には砲撃し、上陸した外国人は捕縛して処罰することを定めた。これは、日本を海外列強国から守るための政策であったが、裏では民衆が異人と交流することで、幕府の転覆を企てることがないように抑え込むという目的が秘められていた。

弱冠十五歳で将軍の座に就いた家斉は、海外諸国からの侵攻や開国圧力を何度も経験している。イギリス艦船によるフェートン号事件や文化露寇などであるが、それらを通して海外列強国の軍事力に脅威を抱くとともに、海外の文化や産業などに関心を寄せる邦人にも警戒心を強めた。とくに解体新書が翻訳された後の蘭方医や蘭学者、ヨーロッパの学問に心酔する天文方や御書物方と通詞、蘭癖大名などである。何よりもそれらのオランダかぶれ、海外崇拝の機運が日ごとに高まっている世情に危機感を抱くようになった。そのような折に、シーボルトに擦り寄り異人から多くのこ

とを吸収しようとする輩は、いつ何時幕政に異を唱え、倒幕運動を起こす勢力にもなりかねないと懸念。シーボルトが国禁を犯していることに目を付け、この際に交流のある人物を一網打尽に捕らえて、処罰したいと企てる。

その異国が憎い、異人と交流する者も憎いという将軍の思いは、腹心の定行に直接伝えられ、命じられた定行は何としてもオランダに心酔する不逞の輩を捕らえなければならないと決心していた。

海外諸国への不信と恐怖、国内では海外崇拝をする人物への成敗が目論まれている最中に、オランダ商館長のスチュルレルとシーボルトらが江戸参府にやってきた。将軍家斉はオランダと言っても油断ならない国であり、出来ることなら謁見などしたくなかった。そこで、数多い将軍の子の一人(第十三子)が亡くなったことを理由に、謁見の日延べをする。まして、シーボルトが江戸に長期逗留して、西洋の医療を施すことなど、すぐにでも断りたいところであった。

その家斉の気持ちは、腹心の定行に伝えられるが、定行は知略に富んだ御庭番である。将軍がシーボルトの長期逗留を拒んだことが世間に知れ渡ると、親蘭大名や蘭方医たちの反発を招き、オランダ国との関係にも悪影響が出る。ここは側室お美代の方が肩入れをしている多岐派の奥医師を利用することが得策と家斉にご注進、その間に、定行は御庭番を動員して、シーボルトらの定宿長崎屋を夜遅くまで監視させた。そのたくらみがあることも知らずに、蘭方医たちは連名でシーボルトの長期逗留の願い書を幕府に提出する。待っていましたと言わんばかりに、幕府は「多紀派が反対するから、シーボルトの江戸逗留は認められない」と却下し、日延べしていた将軍謁見の日取りを商館長らに通知した。

その間に、定行は長崎屋に出入りした人物を記録に残して、後々シーボルトと密通した罪人の候補に列挙。さらにシーボルトが江戸を離れた後も、御庭番の明楽八五郎や川村庄五郎に追尾させ、シーボルトの違法行為、山や港湾の測量、禁制品のコレクションなどを探らせた。

定行の執拗な探索によりシーボルトと景保、蘭癖大名らとの交流がほぼ把握されてきた。探索は景保の部下たちにも向けられ、日頃から横暴な景保に反感を抱いていた画工から重要な証言も得られた。彼は不本意であったが、作左衛門から命じられて伊能図の複写、それも地名をカタカナで記載した日本地図を作ったと言う。あとは物証などの確かな証拠が見つかればシーボルトと密通する景保らに縄を掛けられる。

ちょうどその時、間宮林蔵が村垣定行のもとにやって来て、相談を持ち掛けた。問題の作左衛門から林蔵宛に文が届き、樺太に関する著書『北夷分界余話』の一、二、四巻を貸してくれと頼まれたと言うのである。林蔵は、作左衛門には貸したくはなかった。しかし、断る前に情報を上げて、上司の同意を得たかったのである。林蔵自身は景保を毛嫌いしていて、樺太の地図や東韃地方紀行記を書き上げた際も、景保を無視して直接幕府に献上している。景保が信用できないことは、師匠の伊能忠敬からよく聞かされていたし、景保が制作中の世界地図に林蔵の樺太図が取り込まれてしまうことは、火を見るより明らかであったからである。

しかし、林蔵の思いとは裏腹に、定行は「貸してやるがよい」と命じた。理由を問う林蔵に、「それは間違いなくシーボルトからの依頼であろう」と答え、景保の密通を暴くのに役立つから、是非に貸してやれと言う。やがて、定行が仕掛けた罠に嵌ったかのように、シーボルトから林蔵宛ての手紙と小包が景保に送ら

れてきた。罠とは知る由もない景保は、届けられた小包をそのまま林蔵に送り、受け取った林蔵はその包みを開かずに、勘定奉行の定行に差し出した。

林蔵に宛てたシーボルトの手紙は、現在もオランダのハーグ国立公文書館に保管されているが、おおむね次のように記されている。

――江戸滞在中は一度しか会う機会に恵まれず、また後になってあなたの業績を数多く耳にし、大変残念に思います。そこで今、ささやかな敬意の証を送らずにはおられず、贈り物として花柄入りの布を同封します。私が無事オランダに戻ったときには、諸外国の貴重な地図をお送りします……。

前述のように、手紙には問題となるような記述は何も見当たらない。しかし、小包に入っていた『花柄入りの布』というのは、インド製の壱番更紗で、大変高価な品であった。現在の価格に換算すると、数百万円にも及ぶ代物で、いわば高級車を一台贈られたようなものである。その高価な贈り物を見れば、誰でもシーボルトが如何に重要な資料―樺太の地図や情報―を入手したかが推測できよう。定行は、林蔵に送られてきた手紙と小包を出島に送り返し、二度と禁制に触れる行為を繰り返さないようにシーボルトと商館長に警告した。しかしその裏で、「作左衛門を捕縛する証拠を掴んだ」とほくそ笑み、幕閣への根回しを始める。

十、高橋作左衛門景保らの捕縛

文政十一年(一八二八)十月十日の夜、浅草の天文台下にある高橋景保の屋敷に大勢の役人たちが向かってゆく。暗闇に煌々と灯る御用提灯は御蔵前(東)と猿屋町(南)の両方向からやってきたが、その中には葵御

紋の高張提灯も見られた。夥しい灯が屋敷をぐるりと取り囲み、同心が屋敷の中に踏み込んだ。それから半時も経たないうちに景保は捕縛され、青網を掛けた駕籠に押し込められて担ぎ出された。駕籠の行く先は江戸城和田倉門外にある龍の口の評定所で、容疑は『シーボルトとの密通』と知らされた。景保は来るべきものが来たと悟ったが、息子の小太郎や部下の下河辺林右衛門も縄を掛けられ、評定所へと連行されて行く。

景保らへの尋問はその夜のうちに始められ、翌日の明け方まで続く。取り調べが進むうちに、景保はシーボルトとの関係がすべて筒抜けになっていたことを知らされて驚いた。尋問に当たった大目付は、動揺する景保にすべてを自白するように迫ってくる。出島のオランダ商館員からの密告に加え、信頼していた間宮林蔵や通詞の吉雄忠次郎までもが幕府の手先であったことを知り、景保は愕然とした。「もはやこれまで」と観念した景保は、密通に関わった人物の名を次々に挙げていった。その内訳は、伊能図を複写した岡田東輔や川口源次郎ら四名の画工、定宿長崎屋の源右衛門、西丸裏門の門番役同心二名などである。捕まった西丸の門番たちは、何故かも分からなかったが、シーボルトが紅葉山文庫に入った際に、便宜を図った疑いであると言い渡された。

景保捕縛の際に、証拠となりそうな物品はすべて土蔵に入れて封印されたが、十日ほど経ったとき、蔵の押収品が町奉行所に持ち込まれた。その数の多さに幕府側は驚いたが、ロシア語やオランダ語、中国語が堪能で、天文学や幾何学にも長けた景保の所持品は想像を遥かに超えていた。江戸の市中は久々の、それもオランダ人シーボルトがらみの大事件とあって、この話題でもちきり。ざれ歌や狂歌などもつくられ、人から人へと広く伝わってゆく。その騒ぎの中で、景保の部

下で画工の岡田東輔が自害した。彼は十一月二十四日、奉行所に出頭する前の夜に脇差で腹を刺したのであった。シーボルトと交流してきた人は気が気ではない。とくに親蘭大名や蘭学者、蘭方医たちは、いつ自分に飛び火してくるかと、固唾をのんで事態の推移を見守っていた。

一方、余りにも多くの関係者が続出することに戸惑った評定所は、一座を構成する神社・町・勘定の三奉行が膝を突き合わせて協議する。その結果、奉行の一人が「先ず、シーボルトから禁制品を取り戻すことが大事じゃ。その為に、シーボルトに近い通詞に宛てて作左衛門から文を送らせては如何か」と提言。即刻、景保を問い詰めて、大通詞の末永甚左衛門と通詞目付の吉雄忠次郎がシーボルトと通じていることを吐かせ、その場で次のような文を書かせた。

――一昨年、シーボルトに日本、蝦夷、北蝦夷の地図を送り申したが、承知のように、それらは禁制品であるゆえ、早急に取り戻し、その後は封印のうえ奉行所に差し出されたく。さすれば貴殿らの罪も軽減されるであろうゆえ、よしなに。

高橋作左衛門――

その手紙自体が通詞の二人を罪に陥れることも念頭に置かず、景保は奉行に命じられた通りに文を認めた。天文方筆頭兼御書物奉行の風格も誇りも感じられない文面である。この脅迫じみた文書は早速、早馬で長崎に送られ、事件は出島のオランダ商館関係者へと波及してゆく。

早馬が長崎奉行所に着いたのは、十一月初旬の夕暮れ時であった。奉行の本田正収は書状を見て驚愕し、その日のうちに役人たちを招集する。通詞の甚左衛門と忠次郎も呼び出されて、役人たちの合議が終わるの

を待った。深夜になって、正収は通詞の二人に景保からの文を見せ、シーボルトから地図を取り戻すこと、もしシーボルトが応じなければ奉行の力をもって没収することを伝えよと命じた。

二人の通詞は、「お役目に全力を尽くします」と恭しく答えて奉行所を出たが、忠次郎はその足で出島に向かい、寝ていたシーボルトを叩き起こす。そして、江戸で起こった景保の捕縛事件や長崎奉行が幕府から命じられていることを話して、禁制の品をすべて差し出すようにと頼んだ。しかし、シーボルトは大半のコレクションは出してもよいが、日本地図など重要なものは渡せないと断る。忠次郎は、二枚目の地図があることを知っていたので、「せめて最初の日本地図は出すべきだ」と忠告したもののシーボルトはまったく耳を貸さない。余りもの頑固さに耐えきれなくなって、忠次郎はシーボルトの家から飛び出した。

事態の急転を知ったシーボルトは、画工のフィレネーフェを訪ねて、地図の複写に要する時間について尋ねた。フィレネーフェは、日数は分からないが蝦夷等の地図の方が早く出来上がるであろうと言う。早速、二人は力を合わせて地図の模写に取り掛かった。その作業が一段落した夕暮れに、忠次郎が再びシーボルトの家を訪ねてきた。いつもと違って、固く思い詰めた表情である。シーボルトは、大変な事件に巻き込んでしまったことを詫びて、記念に懐中時計を贈ろうと戸棚から取り出す。

「私は日本人として、恥ずべきことをしてきました」

突然の言葉に、シーボルトは怪訝な顔で、何のことかと訊きなおす。

「私は、長崎奉行の手先になって貴方の行動を監視し密告するよう命じられ、多少なりとも情報を漏らして

きました。昨夜ここに来たのも、奉行から日本地図を取り戻すように言われてのことです」

忠次郎は、隠していた密命をすべて打ち明け、涙ながらに謝罪する。シーボルトは、よもや最も信頼する通詞が……と驚いたが、ここで忠次郎を敵に回すわけにはいかない。「これまでのことは水に流そう」と忠次郎を諭し、取り出した懐中時計を手渡した。シーボルトを師と仰いで尊敬していた忠次郎は、「いかなる咎があろうとも、これからは貴方に尽くします」と改めて忠誠を誓った。

忠次郎を味方に取り込んだことは、シーボルトにとって大きなことで、それから始まる取り調べに有利に働いてゆく。忠次郎を介して奉行所の考えや動きが直に伝わってくるので、シーボルトは余裕をもって対応することができたのである。

早馬が着いた三日後に、シーボルトは複写を終えた『蝦夷図』を差し出すと忠次郎に伝えてきた。しかし忠次郎は、蝦夷の地図だけで納得するわけはなく、奉行所は家宅捜索をするでしょう……と言い残して奉行所に持参する。しかし、奉行所は「お役目を返上したい」と本音を漏らした忠次郎を信用しておらず、すべての日本地図を即刻取り戻すようにと命じた。その間にシーボルトは、忠次郎の助言にしたがって日本地図の一つを商館長の金庫に預け、残りは植物園の地中に埋めて保管する。

早馬の到着から十日ほどが経った早朝に、奉行所の役人三十名が正面の橋を渡って出島に入った。その主力は商館長メイランの館に入り、シーボルトを召喚したうえで、奉行からの令状を読み上げる。その主旨は、『江戸で捕縛した作左衛門が、シーボルトに日本地図や蝦夷図などを渡したと白状した。ところがシーボル

トは再三の要請にもかかわらず、まったく応じず、ここに家宅捜索を行い召し上げる』というものであった。シーボルトは令状を突き付けられ、役人から脅されても「地図の類は既にバタビアに送ったので、ここにはない」と平然と胸を張っている。幾ら糺しても頑なな態度を変えないので、役人たちは訊問を中止して、シーボルトの居宅や土蔵に立ち入った。座礁したバタビア号に積むために梱包された箱を次々に開封してゆくと、禁制の地図類や絵図、書籍、刀剣などが続々と出てくる。しかし、目指す日本地図は最後まで見つからなかった。そこで役人たちは、夥しい押収物をひとまず奉行所に持ち帰って、奉行の指示を仰ぐことにした。

長崎奉行の本多正収は、押収品の整理をしていた役人たちを「捜索が手緩い！」と叱り、再び出島に向かわせる。そして、シーボルトが日本地図を隠し続けるのであれば、その場で取り押さえて捕縛せよと命じた。再び商館長の館に入った役人たちは、シーボルトに朝と同じ訊問を繰り返す。商館長のメイランも役人の言うことを聞くようにと諭すが、シーボルトは耳を貸そうともしない。何度も押し問答が続いて、役人の語気も荒くなってゆく。夜もしんしんと更けた時、「もはやここまで、やりたくはないが縄を掛けて……」と役人が腰を浮かせた。それを見たシーボルトは顔色を変え、それまでの態度を翻して日本地図の在処を白状する。そして、自ら植物園に足を踏み入れ、埋めた鉄製の箱を掘り出した。

押収されたコレクションから、禁制品の蒐集に深く関与した罪で、忠次郎ほか四名の通詞と役人二人が拘束される。さらに役人は、禁制品の入手先を執拗に糺したが、シーボルトは頑として口を割らない。相手に罪が及ぶことを考え、「誰であったか分からない、覚え

ていない」と繰り返した。江戸の評定所で、何の配慮もなく関係者の名を挙げた景保とは対照的な態度である。幾ら問い詰めても名を言わないので、年が明けると奉行所はシーボルトに関わった人物を次々に喚問してゆく。二年前の江戸参府に同行した通詞と役人に絵師の川原慶賀、さらに鳴滝塾の門人二宮啓作や高良斎たちも拘束され、入牢または町年寄り預けなどに処されてゆく。

十二月の下旬に、長崎奉行から商館長メイランに宛てて再び書状が届いた。それはシーボルトに対する一時帰国差し止めの通達で、シーボルトには自宅謹慎と要請があるたびに奉行所に出頭することが命じられた。彼が帰国のため乗船する予定であったハウトマン号は既に離州して、出港準備に入っていたが、この通達によりシーボルトの乗船は叶わなくなった。そして、シーボルトに対する本格的な事情聴取が始まる。

奉行所の取り調べは言葉が通じないため、対面では行われなかった。江戸から届いた二十三カ条の質問を通詞が翻訳した後に、シーボルトがそれに答えるという形式になった。そのため、翻訳には時間が掛かるうえ、有能な通詞は皆召喚されたので、正しい訳文は端から無理である。翻訳に当たっては、拘束中の忠次郎が訂正をしたり、シーボルトが翻訳ミスを指摘したり。さらに担当する通詞たちもシーボルトと親しいので、文書の厳しい言葉も、棘のない穏やかなオランダ語に翻訳されてゆく。その結果、シーボルトにとっては余り苦にはならない、気の楽な取り調べになった。

事件発覚後、「知らぬ、存ぜぬ」を貫いてきたシーボルトは、取り調べの翻訳文書が届いた翌年の正月に、幕府に宛てて大それた手紙を認めた。「今回の禁制品の入手について、その責任はすべて自分にあるので、私は日本に帰化して、すべての罪を償う」というもの

である。数日後に、その手紙の写しを見た長崎奉行は「取調べをなめている」と激怒し、江戸に早馬を送って将軍のもとにシーボルトの手紙が届かないように手を打った。

シーボルトには奉行所の出方が読めたし、言葉の壁も利用できたので、文書による取り調べをのらりくらりとかわしていた。訊問が禁制品を手に入れた相手など肝心なことになると「知らない、誰であったか忘れた」とはぐらかす。業を煮やした奉行は、矛先を商館長メイランに向け、「このままでは日蘭の貿易に支障をきたすが、それでも良いのだな！」と脅した。危機感を抱いたメイランは、もはやシーボルトを庇っている場合ではないと奉行所に協力を誓い、シーボルトにも態度を改める様に諭した。

そのような経過を経ながら二度目、三度目の家宅捜索が行われ、多くのコレクションが差し押さえられてゆく。シーボルトがひた隠しに隠していた伊能小図、景保に作成させた二枚目の日本地図も没収されてしまった。さらに、三回目の家宅捜索では、新たに『三つ葉葵の紋付帷子（かたびら）』が発見される。将軍から拝領した品は禁制であるが、その帷子をシーボルトに贈ったのは奥医師の土生玄硯（はぶげんせき）と判明。帷子は即刻、早馬で江戸に送られ、玄硯は捕縛の憂き目に遭った。取り調べに対し、眼科医の玄硯は手術のために開瞳薬を手に入れたかった。しかし、シーボルトが応じてくれなかったので、禁制の紋付帷子を渡して薬の調整法を教えてもらったと供述する。己の医術を極めるためとはいえ、禁制品を手渡した罪は重いとして、玄硯は将軍の奥医師を罷免され、入獄の刑に処せられる。

高橋景保らの投獄と岡田東輔の自害に引き続き、土生玄硯の入獄は蘭方医や蘭学者たちを震え上がらせた。親蘭大名も同じで、シーボルトに贈った様々な物

品の中に禁制品はなかったかと気が気ではない。将軍家斉の岳父島津重豪も例外ではなく、さらに重豪の場合は盟友ともいえる将軍の父治済が昨年他界している。そのため、家斉に対する影響力が薄れ、以前の豪奢な暮らしも自重するようになった。自慢していたオランダからの舶来品も蔵に仕舞い込んで、封印するほどの気の使いようである。

関係者がすべて召喚され、取り調べも山場に差しかかろうとしていたさ中に、主犯格の景保が獄死した。二月十六日のことである。厳しい訊問に加え、伝馬町の牢は寒いうえ、厠の悪臭で夜も眠れないと嘆いていた景保は、体調を崩して四五歳の生涯を閉じたのである。牢屋敷の看守役は大変なことになったと狼狽えながら、恐る恐る奉行所に突然の死を届け出た。その訃報は、勘定奉行の定行を介して将軍家斉に知らされるが、将軍家斉は驚くどころか満足気な表情で何度も頷く。そして、「蘭癖（らんへき）の輩への見せしめのため、極刑にせよ」と定行に命じた。その命を受けた定行は、景保の死体を大きな甕（かめ）に塩漬けにして、刑が確定するまで保存するよう配下の役人に命じた。

景保獄死の報せが長崎に届くと、シーボルトの取り調べは日毎に緩められ、形骸化していった。奉行が、シーボルトを厳しく糺してきたのは、偏に景保らの罪を裏付ける証言や証拠の入手にあったが、首謀者の景保が死んでしまっては殆ど意味をなさなくなる。シーボルトも言葉の壁を利用して話をはぐらかし続け、裏付けになる人名などは一切証言しない。出島に住む妻のたきを訊問しても、夫に口裏を合わせて「私は何も知りません」を繰り返すばかり。数ヶ月にも及んだ取り調べは、かくして何の進展もないままに終了。初夏にはシーボルトの自宅謹慎も解かれて、出島内を自由に動き回れるようになってきた。その機会を見逃さず、

彼は出島で飼育するヤギの飼料と称して、鳴滝塾から多くのコレクションを取り戻してゆく。「相手に罪が及ぶから」と事件に関わった人の名を決して口にしなかったシーボルトの評判は高まり、再び入門を望む者が集まってきた。

取り調べの緩和は幕府からの指示であったが、長崎奉行所は押収した禁制品以外のコレクションを出島のシーボルトに返してゆく。さらに、判決前にもかかわらず、召喚した関係者の拘束を大幅に軽減。五月の末に、日本地図を出島に運んだ疑いで謹慎・親類預かりとなった吉雄権之助が放免されて通詞に復職。六月になると二宮敬作、高良斎など鳴滝塾の門人二十三名を出獄させ、町年寄り預かりに緩和した。そして、一時帰国停止・自宅謹慎に処せられていたシーボルトには、バイエルン国王からオランダ政府への働き掛けもあって、九月の末に判決が出される。その内訳は、『日本御構(おかまえ)』すなわち国外追放、再渡航禁止であった。江戸に先んじて判決を受けたシーボルトは、十二月に入って間もなく、バタヴィアに向かう船で送還される。日本の紫陽花に「オタクサ」という学名を付けるほど愛した妻たきと二歳半の娘いねを残しての永久追放であった。沖に停泊するオランダ船と出島とを繋ぐはしけ船に乗り込むシーボルトを見送るのは、日本に残された妻子とごく親しい者だけの淋しい旅立ちであった。

翌文政十三年の二月に、シーボルト事件にかかわった者たちに判決が下された。主犯格の高橋作左衛門景保は存命であれば死罪、その息子小太郎と作次郎は遠島(八丈島、三宅島等)。部下の下河辺林右衛門や図工の川口源次らには程度の差はあるものの江戸払いが、そして長崎屋源右衛門には五十日の手鎖(鉄製の手錠掛け)等の刑罰が言い渡される。思わぬことで召喚さ

れた土生玄硯は改易の重い罰に処され、奥医師にとどまらず家禄・屋敷まで没収された。幕府は五十名にも及ぶ関係者を罰するだけでなく、塩漬けにしていた景保の死体を甕から引き出し、その首を刎ねるという前代未聞の断罪を行う。親蘭者たちに対する見せしめであったが、この斬首は蘭学者や蘭方医にとどまらず、親蘭大名たちをも震え上がらせた。

一方、樺太や北方領土の地図をシーボルトに手渡した最上徳内は何の罪にも問われることはなかった。さらに、間宮林蔵も長崎屋でシーボルトに会っているが、そのような記録はことごとく消し去られた。林蔵は村垣定行が最も信頼を置く隠密で、徳内の行動はすべて把握し、定行に通告している。しかし、定行はかつて松前奉行として蝦夷地に赴き、吟味役であった高橋重賢やその配下の徳内、そして林蔵を指揮したことがある。いわば北方領土で名を成した男たちの頭領格でもあった。その経緯から、勘定奉行に就いた定行は、かつての仲間たちを罪人にすることは忍びなく、見て見ぬ振りを貫いた。つまり、禁制の樺太や北方領土、さらに日本の地図が異人の手に渡ることなど、大したことではなかったのである。むしろ、江戸城内の見取図『江戸御城内御住居之図』の方が、幕府にとっては極秘中の極秘になる代物。その絵図を模写したのは誰かといえば、図工の岡田東輔であった。彼はその発覚を恐れ、訊問の前夜に自害するほかに道はなかった。もし、発覚したときには死罪はおろか、家族や一族郎党にまで罪が及ぶことは明白である。しかし、この門外不出の絵図については、さすがの景保も自白しておらず、シーボルトは難なくオランダに持ち帰ることができたのであった。

十一、事件を尻目に伊能図は海外に

シーボルトにとって国外追放と再渡航禁止の処罰は正に青天の霹靂であった。来日して以来、有能な医師、博物学者と大いにもてはやされ、出島の外に鳴滝塾を開くことまで許されていたのに何故か？　禁制の地図を持ち出した罪を問われたが、かつて来日した商館長ケンペルやチュンベリーも地図や絵図の類を数多く蒐集して母国に持ち帰っている。もし、日本地図や北方領土の地図が国家機密であるというのであれば、オランダ政府に抗議があって然るべきである。現に押収されたコレクションの大半は戻されてきたし、地図類も収集の段階では公然と見逃していたではないか。何もかにもが摩訶不思議で腹立たしく、納得がいかない。そのような思いに駆られながら、シーボルトは帆船の旅をつづけ、七月にオランダに到着した。

シーボルトが帰着して真っ先に行ったのは、国王ウィレム一世に頼まれた蒐集品の一部を買い取ってもらうことである。元々、彼を日本に派遣した張本人でもある国王は、依頼した物品の引き渡しを待たずに、快く前金一万二千フルデン（約二億五千万円）を支払ってくれることになった。シーボルトはそれを原資にして二人の助手を雇い、コレクションの整理に取り掛かる。そして、小さな博物館である『日本館』を、ライデンの運河沿いに入手した自宅に設置した。

その日本館は、それまでのヨーロッパ人の先入観を根底から覆すようなものであった。先ず、展示されたコレクションの凄まじいまでの多さに来館者たちは瞠目する。次いで、誰にでも分かりやすい模型や人形などが三つの部屋に整然と分類されていることに驚かされる。一階には人形、絵本・絵画や美術工芸品、二階の一室には川原慶賀の風俗画を中心に日本の産

業に関するものが立体的に、残る一室にはシーボルト自慢の樺太の地図やアイヌの物品等がほどよく配置されていた。日本館の評判はオランダにとどまらず、周辺の国々にも広がってゆく。シーボルトが各国の要人に働き掛けたこともあり、ドイツの高官やロシアの皇太子、後のアレクサンドル一世も訪れる。やがて、狭い自宅スペースでは来館者への対応が出来なくなって、近くに博物館を新設して、移転しなければならないほどであった。

その一方で、彼は日本滞在中に調査・研究を重ねてきた多種多様な情報やコレクション、地図等を紹介する大著『NIPPON』の出版準備に取り掛かった。彼が思い描く著書は、日本のありとあらゆることを網羅するもので、その出版には莫大な費用が掛かる。したがって、出版後に購入してくれるパトロンを確保しておかなければ安心して執筆に取り掛かれない。そこで新たに目を付けたのは、ロシアの皇帝であった。彼はいろいろな縁故を頼って、先ずロシアの探検旅行家クルーゼンシュテルンに会う約束を取り付ける。そして、ロシアに持参した日本コレクションの中に、間宮林蔵直筆の樺太地図を入れることを怠らなかった。

シーボルトに会ったクルーゼンシュテルンは、コレクションの中でも日本の地図類に興味を示したが、その中に間宮林蔵の樺太の地図を見出す。樺太が大陸と陸続きであると思い込んでいたクルーゼンシュテルンは驚嘆して、思わず「日本人、我に勝てり！」と大声を上げた。

シーボルトは興奮気味のクルーゼンシュテルンに頼み込み、皇帝ニコライ一世に紹介の手紙を書いてもらう。その後、紆余曲折はあったが、皇帝に謁見したシーボルトは、これから執筆する自著 NIPPON の売り込みに成功した。その時のロシアは、日本との交易を

強く望んでおり、シーボルトの日本情報は役立つと見做されたのであろう。ロシア政府はシーボルトに勲章まで贈り、その返礼にシーボルトは川原慶賀の絵画やコレクションの一部を皇帝に献上している。かくしてシーボルトは、ロシア皇帝との良い関係を保ちながら、著書NIPPONの執筆に取り掛かった。

一方、シーボルトが去った日本の長崎周辺では、幕府にとって都合の良い噂が広まっていた。

――神風が吹いてオランダ船が浜に座礁し、浮上作業が手間取っている間に船の中から兵器や禁制品の日本地図などが出てきた。さらに座礁した船を詳しく調べると、江戸の天文家とオランダ人による「日本を覆す」謀叛のたくらみも発覚したが、このオランダ人は、本当はロシア人ではないかと言われている……。

その噂話は人馬や情報が行き交う小倉藩、さらに博多藩から九州の北部地域に広がっていたが、自然発生の噂にしては少々出来過ぎと言えなくもない。実は、この噂話には幕府が絡んでいて、直接手を下したのは勘定奉行の村垣定行であった。

定行は台風が到来した八月上旬に、間宮林蔵に送られてきた手紙と更紗を出島の商館長とシーボルト宛てに送り返した。そして、「日本人と文通することは御法度と知らずにやったことであろうが、二度としてはならぬ」と警告を発している。その警告文と行き違いに、長崎奉行からは、台風で被った市中の被災の状況と、蘭船が稲佐の浜に座礁して浮上できず、シーボルトの帰国が延び延びになっている旨の文書が発送された。

半月後、江戸に届いた長崎奉行の文を見た定行は、「これは、したり！」と膝を打ってほくそ笑む。

――シーボルトがオランダに帰れず、出島にいるのであれば作左衛門が渡した日本地図や禁制品はすべて取り戻せる。さらに、シーボルトが乗る予定であった蘭船が座礁して浮上出来ないとなれば違法な入り船と見做すことも出来よう……。

脳裏を過ぎった妙案が纏まってくると、定行は間宮林蔵を屋敷に呼んで、特別の任務を与える。その頃、林蔵は定行の配下として各地に漂着あるいは薪水を求めて上陸した外国船の調査探索を任されていた。その林蔵に、座礁した蘭船を違法な入り船として取り調べ、積み荷から日本地図や禁制品をすべて没収すること。そして、「他言無用」とあらかじめ釘を刺し、間近に迫った作左衛門の逮捕を秘かに伝えた。シーボルトと密通した咎で作左衛門を捕縛することは既に決まっており、いまは幕府内で最終の詰めに入っている。しかし、逮捕した作左衛門を厳罰に処すためには密通の物的証拠が必要になるので禁制品、とりわけ日本地図は必ず取り戻すようにと強く言い含め、即刻長崎へ向かうように命じた。

特命を受けた林蔵は長旅の準備をしっかり調えて、秋晴れの江戸を発った。それから数日が経った夜に、高橋景保が御用となって評定所に引き出される。景保は容疑をすべて白状し、「シーボルトに渡した日本地図等を取り戻されたし」と、二人の通詞に宛てた手紙を認める。その手紙を運ぶ早馬は途中で林蔵を追い越して、長崎奉行所に先に着いた。

林蔵は、景保らの逮捕を知る術もなく東海道を西に進み、大坂から先は船で長崎に向かった。しかし、天候や風に恵まれず、林蔵が乗った帆船は予定通りに進まない。苛立つことが多い船旅であったが、林蔵は十一月の十日過ぎに長崎に着いた。山に挟まれた細い湾の突き当りが港で、桟橋のすぐ隣に扇型をした出島が

見える。その出島を正面に据えた位置に長崎奉行所（西奉行所）が陣取り、出島とは細い橋で繋がっている。出島の出入り口を奉行所が常時監視する構えで、オランダ商館員が「まるで監獄のようだ」ということがよく理解できた。

林蔵は奉行所に入り、自分は勘定奉行の村垣淡路守の命で、座礁した蘭船の取り調べに来たことを告げる。長崎奉行所は二つ（立山と西奉行所）があり、奉行も二人制で、本多正収と大草高好が務めていた。林蔵はその二人に用件を伝えたが、奉行たちは口を揃え「船の中には何も無かった」と繰り返す。実は、十日ほど前に江戸から早馬が着いて、景保らが逮捕されたこと、その景保からの手紙に基づき、通詞がシーボルトに地図の返却を求めたものの応じないので出島を捜索して、日本地図は無事取り戻した……と伝える。しかし、林蔵は、「座礁した蘭船から証拠の品を」という定行の言葉に拘り、座礁した船を調べると言って引き下がらない。勘定奉行の村垣淡路守の命令であれば抗っても仕方なかろうと、本多正収が突き放すように言った。

「しからば貴殿を稲佐の浜にお連れ申す故、得心行くまで蘭船をお調べくだされ」

林蔵は、早速奉行所の役人に案内を頼み、海辺の細道を歩いて稲佐村に向かった。港湾に沿って家が立ち並び、そのすぐ後ろには山が迫り出している。出島の対岸にある稲佐の浜には半時ほどで着き、舳先を陸地に突き上げたハウトマン号の前に立った。船の周囲には大勢の人夫が働いていて、船の浮上作戦を進めていた。彼らを指揮するのは時計師の小幡栄三と名乗る男で、うまくゆけば次の満ち潮で浮上するかも知れないと言う。林蔵は、船内を検めたいと申し出たが、栄三は「船は空です、浮上のために積み荷は全部降ろしますが、何もありませんでした」と答えた。林蔵はそれ

でも船内を検めたいと思ったが、梯子がなければ乗り込めないし、地図類は出島から押収済みと聞いていたので、それ以上の無理押しはしなかった。

奉行所に戻った林蔵は、蘭船が空であったことは認めたが、江戸を出るとき定行から命じられた言は曲げようとしなかった。出島から押収したシーボルトの日本地図や禁制の品々は、すべて蘭船から発見されたものである。座礁した蘭船の拿捕や臨検は筋が通らないというのであれば、蘭船は出港後に嵐で引き返し、稲佐の浜に漂着したことにすればよい、そのように淡路守から命じられてきたのだと主張した。

長崎奉行は、証拠もなくオランダ人の居住地である出島に踏み込み、家宅捜索をしたとなれば、対外的に問題視されかねないし、将軍に近い村垣淡路守の命とあれば致し方なしと、林蔵の言い分をすべて了承。今後も出島の捜索やシーボルトらの尋問は続けるが、押収した証拠の品々はすべて蘭船から発見されたことにすると確約した。長崎奉行の約束を取り付けた林蔵は、その旨を江戸の定行に宛てて文を認め、その末尾に「拙者はこれから長崎周辺の情報工作に向かう」と追記した。

長崎の市街は港湾の周囲を隙間なく家が取り囲み、その背後に急峻な山が迫出している。林蔵が思っていたより遥かに狭い町で、蘭船が台風で座礁し、三ヶ月以上も浮上できずに放置されたこと、江戸からの報せで出島の捜索が始まったことなど、多くの町人たちがありのままの事実をよく知っていた。したがって、この市街地に長く留まって情報工作を実施したところで、徒労に終わることは明らかである。半月余りを長崎で過ごした林蔵は、定行に宛てた報告書を奉行便で送り終えると、奉行所を辞して長崎街道を東に向かった。

長崎に近い大村藩や佐賀藩に入ると、林蔵は茶屋や宿場で情報を確かめた。先の台風が襲来したときの荒れ模様や被害の状況を、それとなく訊くのである。得意気に話す相手の言葉が途切れたところで、林蔵は長崎港で座礁した蘭船の話を投げ掛けてみる。すると茶屋や泊り宿の主たちは、ほぼ正確な情報を知り尽くしていた。彼らの言葉に相槌を打ちながら、林蔵はこの地でも情報操作は通用しないと判じて、さらに歩を進める。しかし、日田街道と薩摩街道とが繋がる山家(やまえ)宿までくると、蘭船の話はかなり曖昧になってきた。そこで林蔵は、宿の主人や女将たちを相手に、長崎で見てきたことと前置きをして話を始める。

——先の台風で蘭船が浜に座礁したが、その蘭船の中から武器や禁制品の日本地図などが……。

林蔵は予め用意していた作り話を披露してゆくが、何度も繰り返すうちに尾鰭(おひれ)がついて、話はロシア人のスパイにまで及んでゆく。かつて林蔵が択捉島に渡った時、紗那の会所でロシア艦隊に襲われた記憶が彼の脳裏に焼き付いていた。その後に、幽囚となったゴローニンを函館で訊問したことも記憶に鮮明で忘れることはない。それ以来、林蔵は極端なロシア人嫌い、異人嫌いとなったが、その思いが高じて、シーボルトもロシアのスパイと重なったのであった。さらに林蔵の「蘭人はロシアのスパイであった」という作り話は、四半世紀前のレザノフの長崎来航とも重なって、多くの人々に抵抗なく受け入れられていく。

交通の要所である小倉藩に近づくと、林蔵は茶屋や宿の主に加えて、とっておきの情報操作に手を付けた。まず、代官所に協力を頼み、その地の大名主(おおなぬし)を訪問する。大名主というのは、代官の下で数村から数十村の庄屋を束ねて法規の伝達や年貢の割り当て、訴訟の調停などを行う村役人である。その大名主の屋敷は、越

中富山の薬売りの拠点にもなっていて、売薬人たちはそこに寝泊まりをしながら訪問販売をしていた。柳行李に薬と紙風船、版画などを入れて背負い、懸場帳（顧客名簿）を持って得意先を回ったのである。

蝦夷地の勤めを終えて江戸詰めとなった林蔵は、外国船の違法着岸があるたびに現地に赴き取調べをしてきたが、行く先々で越中富山の薬売りに出会った。彼らは薬箱を各家に置いて、年に一度代金の回収と薬の補充をしていたが、訪問される家は売薬人を歓迎し、彼らから各地のニュースを聞くことを楽しみにしていた。その売薬人たちに、座礁した蘭船から禁制の品や日本地図が発見された情報を吹き込めば放っておいても話は広がると林蔵は踏んだのである。

最初に訪れた大名主の屋敷で、林蔵は「清国から抜け荷で入った薬が出回っておるが、こちらにはそのような薬がないか検める」と言って、土蔵の一隅に積まれた薬箱を調べた。もちろんそれは格好だけで、売薬が何処の産であるかは確かめる術もない。一通り目を通したところで、「この屋敷には何人ほどの売薬人が出入りをしておるのか」、さらに「大名主が統括している庄屋の数は如何ほどになるか」などを訊き出す。そして、「拙者は先の台風で長崎の浜に座礁した蘭船を取り調べてきたが……」と作り話を、さもありなんと思える口調で披露した。

小倉藩の大名主を何軒か回った林蔵は、長崎街道を少し引き返して唐津街道に入った。そこから西に向かい、博多藩へと足を運ぶ。その道中で近くの代官所に立ち寄り、大名主の在処を訊ねては協力を頼んだ。かくして林蔵は、幕府の役人であることを巧みに利用して、長崎で起こった蘭船の座礁と禁制品発見の作り話を広めていった。

村垣定行と林蔵の目論みは功を奏し、九州の北部地域に幕府にとって好ましい噂話が流布してゆく。それを見届けた村垣定行は、勘定奉行在任中に病で倒れ、天保三年(一八三二)の三月に、この世を去ることになる。彼の後任には明楽茂村が抜擢されたが、前任者と同じ御庭番であり、将軍家斉の腹心でもあった。

明楽茂村はシーボルト事件に深く関わり、高橋景保とその配下や蘭学者たちの動きを秘かに探ってきた。しかし、それは誰にも知られたくない陰の仕事で、表向きは江戸城に詰めて将軍を守る役目である。勘定奉行の高い地位も、将軍の守護職を立派に果たしてきた結果であると胸を張りたい。その茂村にとって、シーボルト事件が決着したとき、「神風が吹いて座礁船から動かぬ証拠が発見された」という話は実に都合が良いものであった。これ以上はない事件の風聞に満足はしていたものの、いまひとつ気掛かりなことがある。それは、人馬が行き交う小倉や博多藩で噂されるだけでなく、肝心な長崎とその周辺に同様な噂が広がること。その情報操作が遅々として進んでいないことにあった。そこで茂村は改めて長崎奉行所に、かつて間宮林蔵を介して伝えた工作を徹底するように命じた。

シーボルトが国外追放になった年に、長崎奉行の一人は本多正収から牧野成文に替わっていた。成文は赴任する前に、今は亡き定行からしっかり手を打って、好ましい情報を流布させるようにと指示されている。その定行からの指示も記憶から薄れかけた頃に、後任の明楽茂村から追い打ちをかけられ、成文は焦った。御庭番の茂村の背後には将軍家斉の意向も強く働いているに違いない。彼は、留任の長崎奉行大草高好と膝を突き合わせて、良い方策がないものかと本気で考えた。

そのような時に、牧野成文は「おくんち」で名高い諏訪神社の神官が『橿園社中』という国学の結社の構成員で、そこに歌人で国学者の中島廣足が出入りしていることを聞きつける。折しも廣足は、数年前に長崎半島の南端にある樺島の沖で台風に遭遇しているが、その経験を書き綴って出版するという。話を聞いた成文は、早速、長崎に来た廣足を秘かに屋敷に招いて、著書の内容を訊き出した。『樺島浪風記』と題するその著書は、たまたま乗り合わせた船が台風で漂流し、命からがら故郷の熊本に辿り着くまでの旅の模様を綴ったものである。荒れ狂う暴風雨と漂流の様子、台風後の長崎の街、シーボルト事件が発覚した後の経緯など、実際に台風に遭遇した者ならではの記録であると言う。

廣足の長話をじっくり聴いた成文は、「折り入って頼みたいことが……」と、シーボルト事件の望ましい筋書きを出版する著書に書き込むように依頼した。しかし、廣足は「国学者として、そのようなことは……」と即座に断った。予め想定していた返事に、成文は、「これは長崎奉行にとどまらず、公儀からの頼みでもある、是非聞き入れて欲しい」と食い下がる。それでも渋る廣足に、「貴殿が天領の長崎に自由に出入りして、橿園社中で好きなことができるのは誰のお陰か分かっておるであろうな」と脅しにかかる。何度か押し問答が続いた後で、廣足は「分かり申した、仰せのように書きましょう」と妥協して、引き下がった。

中島廣足は、肥後国熊本藩細川家の重臣の家に生まれた。十歳を過ぎたときに父を亡くして家督を継ぎ、十五歳で八代藩主細川斉茲に小姓役として仕える。しかし、病気のため二十代半ばで家督を妹婿に譲り、病気が回復した後は本居宣長の流れを汲む師について国学を学んだ。数年後、熊本から長崎に移り住み、諏

訪神社の神官らと国学を研究する橿園社中を結成し、長崎と熊本のあいだを頻繁に行き来していた。

廣足は、奉行から思いも寄らぬ要求を突き付けられて困り果てた。重い足で泊り宿に引き返す道すがら、完成が近い著書のどこに噂話を書き込んだらよいものかと思案する。しかし、幾ら考えても、奉行が求めるような筋書き、明らかに事実とは異なる噂話を自身の著作に組み入れることは出来ない……。その思いは泊り宿に着いても何一つ変わることはなかった。

廣足が出版する前に苦悩した『樺島浪風記』は天保四年(一八三三)に刊行されたが、座礁した蘭船にまつわる記事は、巻末の落款や落款印が押された後の頁に追記された。「こたびの大風は、まさしく神風なりと世にいひながせるはさる事ありたり、かの阿蘭陀船はこたび帰るべきときにて、その船の中にわが国の地図をはじめて外国に渡すことをいみじく戒めたまふ物どもを……後略」。

しかも、廣足は二頁にわたる追記の終わりに「天保四年正月十五日橿園のあるじ、長崎のたびやどりにて、ふたゝび此よしをしるしぬ」と記している。この不本意ながら書いたとも読み取れる記事は、この地を代表する国学者の言葉であったため、後世に正統なシーボルト事件として語り継がれてゆく。

場面を再びオランダに移して、シーボルトの著書『NIPPON』の執筆と、出版後の反響について見てみよう。本著は、シーボルトが日本に滞在した五年のあいだに調査や研究をした物事の集大成である。その内容は日本の地理と歴史、宗教や政治経済、美術工芸など、日本に関するありとあらゆる情報に及んでいた。本著の大半は、シーボルト自身で調査または蒐集をした資

料に依るものであるが、中には鳴滝塾の門人たちに提出させたオランダ語の論文も含まれていた。

著書の冒頭、第一章は『日本の地理とその発見史』である。高橋景保が作った地図『日本とその隣国および保護国』、次いで長久保赤水の地図を原文のまま、日本の地名集の意味合いで記述。そして、幕府から国外持ち出しを厳しく咎められた正確な日本の地図、いわゆる伊能図へと。ペンを進めてゆく。江戸参府の時に会った高橋景保に複写を頼んだカナ書き伊能小図の紹介である。

ここで疑問となるのは、高橋景保から入手した三枚のカナ書き伊能小図と、その後にシーボルトの要望で二枚に纏められた日本地図は、度重なる出島の捜索で役人に没収された筈である。それにも拘わらず、何故、彼の著書に正確な日本地図を載せることが出来たのであろうか？　その答は後者の、二枚に複製された伊能図が没収される前に、画工のフィレネーフェが模写した地図をシーボルトが持ち帰ったからである。しかし、シーボルトはその図に、『日本人作成による原図および天文観測に基づく日本地図』と長いタイトルを付けたものの、作者については何一つ触れていない。彼は、グロビウスと呼び親しんだ景保の監修に依ることは知っていても、正確な地図を作り上げた伊能忠敬については、その名前すら知らなかった。

景保は、十八、九歳で父至時と死別したが、その後は忠敬を実の父以上に頼ってきた。さらに、忠敬が全国を隈なく踏破して、天と地の測量を成し遂げた労苦も目の当たりにしている。しかし景保は、忠敬の想像を絶する測量や膨大な測定資料から正確な地図を作り上げた功績については、シーボルトに一言も伝えていなかったのである。

それとは裏腹に、忠敬の弟子となった間宮林蔵については、樺太が独立した島であることを発見した経緯を詳しく述べて、世界地図に間宮の瀬戸すなわち『間宮海峡』と、その名を永遠に刻むことになる。シーボルトは、林蔵が幕府の隠密で、シーボルトを罪に陥れた張本人であることを事件後に知ったが、彼は科学者として真実を曲げるようなことはしなかった。

さらに、蝦夷地や樺太、千島列島などの探検を積み重ね、北方の地理やアイヌの生活・文化等を明らかにした最上徳内の功績についても、多くの資料を添えて詳述していく。

著書『NIPPON』は、シーボルトの国外追放から二年が過ぎた一八三二年に初版が出版された。それから分冊の形で順次発表されてゆくが、本著が出版されると、多くの国の為政者や冒険家、学者たちが注目して競うように購入してゆく。それまで、東洋は未開の野蛮国ばかりで、科学的根拠にもとづく正確な地図など存在しないと思われてきた。ところが日本には天体観測を基にした正確な地図が既に作られていた。その地図の緯度は正確で、経度も京都を零度にしているものの、グリニッジ天文台を起点に補正すれば、そのまま世界地図に組み込むことができる。シーボルトが著書『NIPPON』に記述するまでは、実にあやふやであった日本、さらに樺太や千島列島の正確な姿が全世界に明示されたのである。

シーボルトの著書『NIPPON』はオランダにとどまらず、出版を後押ししたロシア皇帝ニコライ一世を始め世界の国々に多大な影響を及ぼしてゆく。

その一つに、今から半世紀ほど前に独立したアメリカを挙げることができよう。アジアの侵略に出遅れたアメリカは、清国に勢力を伸ばす足掛かりとして日本との交易を強く望んだ。お茶や生糸など発展する清国

との貿易における中継地として、さらに捕鯨船への水の補給や海難時に寄港するためにも日本との交易を求めたのである。

大統領の国書を携えた東インド艦隊のペリー提督は、四隻の軍艦を率いて嘉永六年(一八五三)に浦賀沖に来航する。彼は日本に向かう前から、シーボルトの『NIPPON』に掲載された地図や資料を入念に調べた。とはいっても、著書に掲載された地図は単なる見取図に過ぎないと考え、日本に到着すると海岸線の実測を試みた。その結果、緯度も経度もまったく狂いがない正確な地図であることを知って驚愕する。しばらく浦賀沖に停泊していたペリーは首尾よく江戸幕府に大統領の国書を手渡し、一旦は引き返した。そして約束した一年後を待たずに再度浦賀に来航して、日米和親条約の締結に成功する。次いでロシア、イギリス、オランダ等がアメリカに倣って和親条約を結び、長く続いた日本の鎖国が解かれてゆく。

一方、フランスにおいては地図類に止まらず、シーボルトがヨーロッパに持ち込んだ美術工芸品が注目されてゆく。その流れは、後年のジャポニスムに繋がってゆくが、葛飾北斎の絵画や版画、とりわけ絵手本の『北斎漫画』は高く評価された。そして、北斎を始めとする浮世絵師たちの作品はゴッホや印象派のモネ、ドガ、ルノアールや多くの芸術家に大きな影響を与えることになる。

シーボルトにより世界に紹介された日本の地図や数多くの情報のほかにも、日本の科学技術の高さに外国人が驚嘆した事例がある。それは日英通商条約が締結された三年後の文久元年(一八六一)のことである。当時、トップレベルの技術を誇っていたイギリスが、日本沿岸の測量を無理やり行おうとした。日本の沿岸

を隈なく測量されることは、国の地形を悉く知られることになり、軍事的にも大変危うい。それを何とか阻止したい幕府の役人は、外国奉行から入手した伊能図を測量艦アクティオン号のワード艦長に見せた。その伊能図は、測量を始めたばかりのイギリス艦隊のデータとぴったり一致していたのである。

イギリスは、「このように正確な地図が既にあるのであれば、手間をかけて測量する必要はない」と測量を中止して、幕府から伊能図の写しを譲り受けた。その伊能図を基に水深などを追記した正確な海図を完成させ、巻頭に「日本政府から提供された地図による海図」と明記している。

イギリスは日英通商条約が締結される前に、清国にアヘン戦争を仕掛け、さらにアロー戦争へと突き進み、清朝を勢力下に収めてきた。しかし、日本に対してはアメリカのペリー提督の来航により、不平等な条約が押し付けられはしたものの、対清朝に見られるような露骨な植民地支配をすることはなかった。その背景には、「世界水準の正確な地図を作る日本の科学技術は決して侮れない」、「この国を軽く見ると大変なことになるかも知れない」という政治的な判断があったと考えられる。

幕府の禁制を破った高橋景保は獄死の憂き目に遭い、伊能図や禁制品を国外に持ち出したシーボルトは『日本御構』すなわち永久追放となった。しかし、それは異国船打払令を発して、外国との繋がりを拒否する幕府の犠牲になったに過ぎない。江戸幕府の安泰と将軍の座に固執した家斉は、親蘭大名や蘭方医、蘭学者たちを幕政の批判者と決めつけ、多くの関係者を捕らえて厳罰に処した。その手口は、多くの御庭番に命

じて証拠をかき集め、さらにはシーボルトに証拠となる手紙と小包を送らせるようにも仕向けた。

しかし、隠密を駆使して陰険な策略を巡らせ、幕政に背く者を悉く弾圧、排除した事実が明るみに出れば、家斉は末代まで極悪非道な将軍と呼ばれるであろう。それを何よりも恐れた家斉は、腹心の御庭番である村垣定行を呼び寄せ、世間が納得するような偽装工作を命じた。さらに定行が在職中に死去すると、やはり御庭番の明楽茂村を後任に据えて、さらなる隠蔽工作を重ねてゆく。

このように、家斉は歴代将軍の中で最もよく御庭番を使った将軍であり、御庭番の組織を創設した八代将軍吉宗を遥かに凌いでいた。しかし、家斉は、それを多くの幕臣や世間に知られることを極度に嫌ったのであった。

シーボルト事件が幕府に都合よく塗り替えられ、親蘭者の処罰も世間に抵抗なく受け容れられてゆくと、将軍家斉とその家臣たちは、さらに圧政を強めてゆく。そして、シーボルト事件後にも海外に目を向け、異国船打払令を批判する渡辺華山や高野長英らを自決に追いやる蛮社の獄へと突き進んでいった。

押し寄せる列強国との繋がりを頑なに拒絶し、激動する世界の潮流に抗う後向きの幕府に反して、権力とは縁遠い人たちによる偉業や作品は世界に広く知られ、多くの国々で高く評価されてゆく。その代表として、伊能忠敬の日本地図、間宮林蔵の海峡発見、葛飾北斎の美術品等を挙げることができる。そして、それらは紛れもなく我が国の科学技術の底力の表れであり、美術工芸等の高いレベルを示すものである。その頼もしくて力強いうねりは、やがて到来する日本の開

国や維新後の目覚ましい発展、世界における高い地位の獲得に大きく貢献してゆくことになる。〈了〉

【参考資料と謝辞】

本稿の執筆に当たっては、多くの出版物やwebサイトの情報を参考にさせて頂いた。貴重な研究論文の著者や関係者に深甚の謝意を表します。

・文政十一年のスパイ合戦　秦 新二(文芸春秋社)
・帆船コルネリウス・ハウトマン号とシーボルト事件―オランダ商館長メイランの日記に基づく考察を中心に―　梶 輝行(滝紀要第六号)
・創られたシーボルト事件―台風・座礁・禁制品発覚の結びつき―　海老原温子、宮崎克則（西南学院大学国際文化論集第２６巻１号）
・国立国会図書館サーチ デジタルコレクション(『樺島浪風記』等の古文書)　　２０２４年６月　著者

【編集後記】

■今年は梅雨入りが遅く、しかも不安定で、激しい降雨のすぐ後に晴れ間が覗いたりしている。そのせいか、紫陽花も見頃は長続きせず、瞬く間に色褪せてしまった。一方、発生から三年以上ものあいだ猛威をふるっていた新型コロナウイルス感染症も下火となり、市井には数年前の活気とインバウンドの増加で外国人の旅行者が溢れている。

■そのような時節に『文芸 草の丘』の第二六号を発刊する運びとなった。今回のコンテンツは、詩と短編小説、エッセイおよび連載小説が夫々二編、合計八編である。その中でも、いんば華子の『この前・この間』は十五号からの長いブランクを乗り越えた久々の掲載であり、中川とらの『最後の間借り人』も、短編小説としては二十号以来で、本誌の編集にかかわる者にとって望外の喜びである。

■文芸において詩、エッセイ、小説には夫々の特性があり、一概に甲乙はつけがたいが、個人的には、その多様性や具現性、読み応えなどから小説に利があるのでは、と思っている。本誌に掲載された四編の小説を見ただけでも、そのフォーカスされた時と場面、筆者の視点などが多岐多様に亘っていて、興味深く読むことができる。

■さらに『視点』について、香取の『伊能忠敬の化身』の後半、幕府により造られたシーボルト事件と二百年近く経過した後世に解明された史実により、物語全体が大きく変質してしまうことは、典型的な事例と言えるかもしれない。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

安達 真魚　kiyonori.s@gmail.com
いんば 華子　bach.goldberg-variationen@hotmail.com
香取 淳　katorijun27@gmail.com
中川 とら　nakagawatora1@gmail.com
畑中 康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

草の丘 第二六号
発行　二〇二四年 六月三〇日
編集兼発行人　印旛文学の会　香取 淳
連絡先(携帯)とメール　080-5533-1002
katorijun27@gmail.com
URL　http//bungeikusano-oka.raindrop.jp